日本書畫人名辭書

下

日本書畫人名辭書

下巻

杉原夷山 清水退軒 編纂

十三畫

嵩之【畫】佐脇氏、名は道賢、字は子嶽、東淑、呆呆観、中岳堂、一翠齋、幽篁亭等の號あり通稱は甚藏、江戸の人、初め畫を一蝶の門に學び英一水と稱す技益々進みて遂に一家を成す筆意狩野を去る遠く浮世繪に入る近し明和九年七月三日歿す年六十六 **嵩雪**【畫】佐脇氏、嵩之の男、字は貫多、中岳齋と號す通稱倉治、嵩雪は其名、父に學びて家風を繼げり文化元年十一月二十二日病みて歿す年六十九 **嵩谷**【畫】高嵩谷、名は雄、別に屠龍翁と號す一蝶の門人嵩之に就きて學ぶ當時出藍の譽あり最も山水に長ず當時堤等琳畫を以て自負す曾て韓信股下を出づる圖を寫し之を淺草觀音堂の楣間に揭げ先きに嵩谷の揭ぐる所頼政怪物を射る圖を畫きたるものに比較す然れども世人嵩谷を重んじて等琳を輕んずといふ文化元年八月二十三日歿す年七十五 **嵩月**【畫】高嵩谷の門人なり天保元年歿す年七十餘 **嵩樹**【畫】名は御康、高嵩月の門人なり天保年中 **嵩溪**【畫】高嵩溪、名は信宜、嵩谷の子、畫法を父に學びて能くす文政年中病歿す年五十八 **嵩鄉**【畫】高嵩鄉名は信賓嵩谷の門人なり友松菴又た一桂と號す天保十四年歿す年八十餘 **嵩嶽**【畫】高嵩嶽は嵩谷の二男なり畫法を父兄に學ぶ父に先ちて天す **嵩松**【畫】高嵩谷の門人なり戯名を元の木阿彌と曰ふ天明年中 **源尊**【畫】巨勢氏の支族にして源慶の子巨勢益宗の孫なり源慶の死後宅間良賀とゝもに當麻寺新曼陀羅の圖を作る後法眼に敍せらる嘉禎年中の人 **源慶**【畫】巨勢氏、有宗の末弟なり後祝髮して法眼に敍せらる建仁年中の人 **源七**【書】梅村清茂、鳥山巽甫の門人にして書を能くし名聲あり **源谷**【書】溝口成住、庄司と稱す、源谷は其號、後ち嘯齋、又た後嘯軒、自玄堂と號す曉谷の子にして江戸の書家なり文化十一年九月十三日歿す年三十三 **源一**【畫】賴氏、佛畫を善くし筑前法印と號す壽永二年二月二十四日歿す **源延**【畫】相模の人なり曾て信濃善光寺に至りて尊像を圖

源七郎〔畫〕狩野氏、松榮の第三子なりと傳ふ兄永徳に就いて書法を學び能く其奥義を得、新に發明せしところも亦少なからずといふ不幸父兄に先ちて早世す故に傳はるところのもの少なし **源好**〔畫〕川邊氏、土佐派の書家なり明治十九年歿す **源章**〔畫〕並川氏、四條派の書家なり天保年中 **源翁**〔畫〕名は玄妙、字は玄翁、越後の人にして峨山の法嗣たり常に佛像を書けり彼の那須野殺生石の事は人口に膾炙するを以て茲に省く應永三年四月寂す年七十一 **源淵**〔畫〕水上氏、越中の人なり **源琦** 駒井琦を見よ **源三郎**〔畫〕元祿年中の蒔繪師なり

瑟々〔畫〕織田氏、露香女に學び能く櫻花を寫す近江の人

琦〔畫〕駒井氏、字は子韞、琦は其の名、書を圓山應擧に學び奥旨を極む尤も設色に巧みに師の筆と判別し難きものあり應擧門下十哲の一人なり寛政九年八月八日歿す年四十八

意精〔畫〕姓氏詳ならず初め元信に就いて學び山水を能くす **意信**〔畫〕狩野意信は春貞房信の子なり書法を父に學ぶ文政年中の人、秀賴十一代の孫なり **意信**〔畫〕狩野氏春笑宜信の子なり書法を父に受く寶暦頃則ち秀賴九代の孫なり

愛山〔畫〕大原氏、狩野風の書を善くし後一家をなす京師の人にして常に長崎に住めり **愛石**〔畫〕畫僧愛石、名は眞瑞、紀伊の人、畫を野呂介石に學び後ち元明の遺跡及び本朝先哲の畫風を研究して其技大に進み一家をなす山水を能くす水墨淡彩共に氣韻の清高を以て勝る世に野呂介石、長町竹石、及び愛石の三人を以て三石と稱す享和頃 **愛雪** 佐竹永海の別號 **愛翼** 大岡春朴の名 **愛雀軒** 柳亭種彦の別號 **愛山**〔畫〕安井氏、尾張の人、安政年中 **愛山**〔畫〕上田氏、源兵衛と稱す安政年中の人 **愛泉**〔畫〕岩崎氏、通稱浪江、對州の藩士なり書を谷文晁に學ぶ慶應年中歿す年七十餘 **愛日樓** 佐藤一齋の別號

葛野王〔書畫〕大智天皇の孫　大友皇子の長子なり少くして學を好み博く經史に涉り能く之を囑し兼て書畫に工みなり慶雲二年十二月薨ず

滄洲〔畫〕赤松氏、名は鴻、字は國鸞、滄洲は其號又た靜思翁と號す通稱良平、播州の人、赤穗侯に仕へて儒員より家老に陞る寶暦十年老を告げて平安に出で帷を下して徒に授く晩に赤穗に歸る經史に邃く兼ねて筆札に工み也享和元年歿す年八十一、二子あり兄を蘭室、弟を魯齋といふ皆學術富贍、伯は五十一叔は二十三にして先歿す **滄洲**〔書〕磯谷正卿、字は子相、覺右衞門と稱す、尾張の人、松平君

山に從つて學び博洽を以て聞えまた書に巧なり明和年間朝鮮來聘のとき其學士南秋月筑前の龜井道載及び滄洲を並稱して東海の鸞鳳と稱せりといふ享和二年歿す年六十六 **滄洲**〔畫〕山本氏、名は公章、尾張の人、嘉永年中 **滄浪** 室鳩巣の別號 **鼎菴**〔畫〕石原學魯、字は貫卿、鼎菴は其の號、又梓山と號す長崎の人、書に巧なり壯なるに及んで江戸に出で木下順菴に從ひて學ぶ順菴其の才を賞し深く之を器とす鼎菴詩名あり人と爲り倜儻にして富貴權勢を喜ばず官路に趨らず澹然淸貧に居る初め仕進の意なきにあらざりしかど或人謂て曰く子の多能を以て之を公門に售らば當に祿八百石を得べしと鼎菴艴然として遂に仕念を絕つ此より後ち諸侯の聘禮を被むると雖も固辭して應せずと元祿十一年江戸に歿す年四十六 **鼎**〔畫〕秦鼎、字は士玄滄浪、又た小翁と號す尾州侯府學の敎授たり平洲の門人にして儒家なり又書を能くす **鼎介**〔畫〕廣島氏、父の如雲に就いて書を學べり **鼎湖**〔畫〕石井氏、重賢と稱す鈴木我古の子なり書を能くす明治年中 **鼎湖**〔畫〕清水氏、憲藏と稱す尾張の人、安政年中 **鼎** 宇野士新の名 **誠拙**〔畫〕初め鎌倉圓覺寺に住し後天龍寺に住す高僧なり書風雋逸と稱せらる **誠齋**〔畫〕望月氏、玉蟾の男、書法を父に學びて家風を能くす天明年中 **誠應**〔畫〕中西氏芝增上寺の繪師なり文政年中 **誠名園** 百々俊道の號

詩佛〔畫〕大窪氏、名は行、字は天民、通稱は柳太郎、痩梅、又別に詩聖堂と號す常陸の人、明和四年を以て生る徙りて江戸に居る草書を喜くし詩を以て其名海內に著はる好で墨竹を畫く氣韻あり夙に四方の志あり後ち詩書を以て諸州に遊ぶ嘗つて北遊せんとし將に江戸を去らんとするや適々某老畫師來て窮を告ぐ詩佛手を叉ぬいて沈吟し忽にして曰く吾れに一策あり請ふ之を安んせよと乃ち谷文晁に詣りて外套を借る文晁は田安府の僚たり外套は公の賜ふ所に係る詩佛畫師をして之を被り僞つて文晁と稱せしめ倶に上州に遊ぶ是時に方つて文晁の名聲都鄙を動かす故に各邑の素封家爭ひ延ひて以て揮灑を乞ふ其の葵章を服するを以て疑ふ者あるなし去るに及び金帛行李に滿つ既にして歸つて詩佛之を文晁に語る文晁寬雅唉て止む詩佛又た畫を過ぐる所の諸氏に移して曰ふ向きの畫師は眞の寫山翁（文晁）に非ず適ころ生理蹇に溢りて糗糧繼がず僕深く之を憐む因て計策を授けて詐て扶蘇項燕と稱し姑らく人望を收て以て急を救ふのみ然れども此を以て頗る興復の計を助く敢て謝せずんばあらずと諸氏素と詩佛の狂逸を知る亦唉て止む詩佛性酒を嗜しむ嘗つて孝經樓塾中に寓するの日密かに小壺を以て酒を貯へ時に出して之を飮む一日詩佛外に出づ北山塾を視乍ち之を見て曰く誰れぞや我門に在つて是の小磁壺を用ゐる凡べて小を好む者は與に天下の大を語るに足らずと

已にして詩佛歸る或人之を告ぐ詩佛艴然として復た出で頃焉らくにして一大空罇を挈へ至り之を案上に置き且つ酒少許を買て之を罇中に注ぎ輒々柄を抽て且つ斟み且つ飲ひ大聲放言す此れより後日々に此くの如し其狂逸率ね此類なり天保八年二月十一日歿す年七十一

業實【書】藤原氏、繪所預となり文章博士に任せらる制に應じて大嘗會主基の圖を書けりといふ

業廣 木下犀潭の名

達長老【書】墨書を能くして其の筆趣淸逸なり氏名歿年月等詳らかならず

鳩溪【書畫】平賀國倫、字は士彝、通稱源内、鳩溪と號す讃岐の人、書畫を能くし又陶器を製す其他物産學に精しく諸種の發明あり多く戲作の書を出だせり戲號を風來山人、天竺浪人、松籟氏、森羅萬象翁、無根叟、福内鬼外といふ安永八年十二月十八日歿す年五十七

鳩巢【書畫】室氏名は直淸、字は師禮、鳩巢と號す別號は滄浪、齋に命じて靜儉と曰ふ通稱新助、其先は熊谷直實に出ず鳩巢幼にして穎悟好みて書を讀み年甫めて十五出でゝ加賀侯に仕ふ侯其才を奇とし命じて京師に入り業を木下順庵の門に受けしむ正德元年幕府の儒員に列し祿二百石を賜はる三年邸を駿河臺に賜はる世呼びて駿臺先生といふ有德公職を襲ぐの後特に擢じて殿中侍講と爲し屢々政事の得喪を詢ふ此の職實に鳩巢より始まる論諫する所少からずと雖も口を拑して人に語らず故に其將順の美人或は多く之を知らず享保十年西城侍講に遷る別に職俸二百苞を賜はる鳩巢學程朱を宗とし老に至りても徒に誨へて倦まず興に乘ずれば時に畫を作る享保十九年八月歿す年七十七明治四十二年九月從四位を追贈す

暘谷【書】渡邊氏、名は彝、字は君乘、暘谷と號す通稱忠藏、長崎の人、詩に巧みなり寬延中京師に遊びて講說し諸名士と交り聲價一時に振ふ傍ら書を能くす明和三年三月歿す年四十八

暘谷【書】山田氏、弘庵と稱す越中の人書を水上蘭崖に學ぶ文政元年生

筠圃【書畫】宮崎氏、名は奇、字は子常、初名は淳、常之進と稱し筠圃と號す、尾張國海西郡の人なり平安に住し業を伊藤東涯の門に受く東涯の歿後闇齋に從ふ詩及び書畫を能くす書は趙子昂の風を倣び畫は尤も墨竹に長ず時人宮崎筠圃、山科李蹊、御薗中渠、淺井圖南と共に平安の四竹といふ聲價日に貴く書を乞ふもの常に絕へず相傳ふ一客筠圃の門に至り問て曰く是れ竹を寫すの儒者宮崎氏の居乎と母之を聞き以て辱とす是より筠圃筆を投じて終身復た畫かず是に因て世益々其畫を重んずと安永三年十二月十日歿す年五十八

筠齋【書】佐藤氏、恭助と稱す出羽秋田の人、文久年中

筠齋【書】池田氏平兵衛と稱す肥前の人嘉永年中

遊清〔書〕本間氏、字は士龍、九江、眠雲、又た百里と號す伊豫吉田侯の臣、醫を以て仕へ江戸に住す歌學を修して時に稱せらる書も亦善くする所なり嘉永三年八月歿す年七十

遊汀〔畫〕石田氏、幽汀の二男なり畫を父に學ぶ寛政年中

遊圓〔畫〕松井氏、權之助と稱す狩野休白の門人なり正保年中

頑石〔書〕渡邊氏、名は實、字は廷倫、抗翁と號す浪花の人、書體風致あり又た詩を能くせり

頑仙子 石川丈山の別號

聖德太子〔書畫〕用明天皇の第一皇子なり夙に佛法を尊信して力を盡せる事蹟少なからず書畫に巧みにして其の遺跡猶ほ現今に傳はるものあり推古天皇二十九年二月二十二日薨す年四十九

聖欽 江馬天江の名

聖觀〔畫〕仁和寺の住僧なり內藏頭忠倫の子、畫を能くして釋像人物を畫けり

畫雲〔畫〕名は良、字は良子、天開翁の贅婿にして有栖川の宮の府臣なり雅樂助と稱し畫を能くす花木草蟲に長ず嘉永五年三月歿す年五十五

畫蝶樓 谷文晁の別號

畫餅居士 中島棕隱の別號

楠亭〔畫〕西村璩章、字は子鳳、京師の人、應擧の門に入つて學び能く其法を得たり天保五年六月二十日歿す年八十一

嵯峨天皇〔書〕人皇五十二代、延曆五年九月七日降誕平城天皇の同母弟なり文武に達し書を能くし給ふ空海逸勢と世に稱して本朝の三筆と曰ふ承和九年七月十九日崩ず御年五十八

照元〔書〕女史は佐々木氏、志頭磨の女、晦山の妹なり父に書法を學び筆力雄健大に世に稱せらる請ひ求むるもの多し志頭磨の門人少なからずと雖も眞に其法を繼ぐものは唯だ照元と傳長との二人のみ初め寳篋尼公に仕へ後ち非藏人吉見氏に嫁す

照子〔畫〕百々廣年の配、伏見の紀東暉を師とし花卉禽獸を書く

照陽〔畫〕朱玉と號す雪舟の門に入りて學び山水人物を能くす永正頃研秀愛すべし

照什 釋南谷の名

董水〔書〕馬場政隆、春水の子にして青海堂と號す江戸の書家なり明和三年九月二十七日を以て歿す年七十八

董齋〔書〕松本盛義、字は直方、小簑中兵と號す通稱正輔、法眼に叙す、董堂に學び最も草書を善くす版下を書きたるもの多し明治三年四月二十五日歿す

董詮〔畫〕山崎氏、沈詮流の畫人なり青曠また始達と號す文化十三年三月生る父董烈に就いて畫を學ぶ最も花卉を能くす

董

堂【畫】中井敬義、字は伯直、通稱嘉左衞門、春星、小笠山樵、宜松老人等の號あり董其昌を學ぶ因て因て又た董堂と號す俳名を乙平と呼び狂歌に腹唐秋人と號す又た好みて詩を作る文政四年七月二十六日歿す年六十四

董烈 井戸甫田の名

薫川 狩野中信の號

董巴【畫】宮本氏、通稱秀助、安政年中

董信【畫】狩野氏嘉永年中

楊月【畫】薩摩の人、和玉と號す後ち移りて笠置寺に居る依りて笠置の楊月と稱せり雪舟に學び宋人の墨畫を慕ひ山水人物花鳥を善くす大年永中の人

楊眞【畫】祥啓を宗とし又兼て宗湛の風を學べり

楊門【畫】長門の人なり雲溪等澤と號す雪舟に學ぶ

楊溪【畫】畫を雪舟に學び墨畫達摩の圖殊に妙なり

楊富【畫】沙門にして畫を雪舟に學びて山水及び達摩の像を善くせり

楊愼【畫】一名は遵眞、明朝の畫僧にして人物を畫くに巧みなり隱元國師に從ひて我國に歸化す

楊知賓 雪舟の別號

經隆【畫】土佐經隆は初め春日有房と稱す藤原光長の男にして畫所預となり從五位下に叙し土佐權守に任せらる又中務大輔に轉ず畫法を父に學びて卒に丹青の妙を極め名聲世に鳴る後春日を改めて土佐と稱す建仁中南殿の賢聖障子を畫く

經光【畫】土佐光信の裔、將監と稱す薙髮して光永といふ

經信【書畫】源氏、從二位道方の三子、書畫を能くす世に桂大納言と稱す永長元年薨ず

經增 土佐廣周薙髮後の號

會理【畫】佛畫に巧みなり宗叡禪師を師とす承平五年十月二十四日寂す時に年八十四

會心齋 狩野晴川の別號

會山【畫】相澤氏、通稱會平南宋畫家なり文久年中

塞軒【畫】石王氏、名は明誠、字は士則、初の名は安兵衞、後ち康介と改む塞軒は其號、又確廬、黃裳の別號あり元祿十四年四月を以て近江國水口村に生る資性穎悟弱冠京師に遊びて業を三宅尙齋の門に受く講究數年遂に井澤灌園及び久米訂齋と宅門の三傑と稱せらる塞軒は其魁たり後ち伊豫の大洲侯に聘せられ伊豫に至り其政事を與り聞く居ること數年親の老いたるを以て辭し鄕里に歸りて奉養甚だ厚し時人皆其至孝を賞す親の沒するや其の田宅家財を擧げて悉く族人に頒與し單身平安に出で門を開きて講說徒に授く寶曆三年江戸に來り仙臺侯の請に應じ之に游事す侯大に之を重んじ擢んでゝ以て大夫となす將に委するに大政を以せんとす居ること數年侯の失行を見て俸を辭して再び平安に來り帷を下して道を唱ふ安永九年正月二十一日歿す年八十

塞白【畫】畫を能くし好みて牧牛を畫けり

幹々【畫】林氏、翠闌と號す谷文晁の妻なり夫に學びて畫を能くせり闌竹殊に妙なり寬政十一年

七月二十三日歿す

幹信 狩野松榮の初名

馴固(畫)廣瀨氏、岸駒に就いて畫を學び牛馬を畫くに巧みなり江州の人

搜雲(畫)大森守一、畫を鶴澤探山に學ぶ後法眼に敘せらる

搜月(畫)大森氏、搜雲の男にして畫を父に學び能く其家法を守れり

搜朴(畫)梶氏、大森搜雲に學びて其畫法を能くす狩野派の畫家

瑛昌(畫)土岐氏、字は白華、龜溪、又た濟美と號す瑛昌は其名、京師の人、圓山應擧に學び花鳥を好くせり文化年中

葉溪(畫)稻葉貞隆、通稱兵吉、畫を能くす寬政十二年十二月二十七日歿す

新川(書)岡田氏、名は宜生、字は挺之、通稱彥左衞門、新川は其號、暢園、朝陽、甘谷等の號あり尾州の人、學を松平君山に受け群書に該通す又た書に名あり寬政十一年三月二十四日病歿す年六十三

新右衞門(書)堀氏、養拙の門に入りて和様の書を學び能手の聞えあり

新兵衞(畫)番場氏、京都の人、文化頃

新川 土肥霞洲の別號

粲堂(書)滕博泉、平安の人なり、書名當時に鳴る

載一(畫)龜井氏、字は坤臣、東溪と號し讃岐高松の產、花鳥を善くす文化年中の人

雷洲(畫)安田氏、名は尙義、俗稱茂平、文華堂と號す北齋の門人にして西洋の畫法を研究し油畫を能くす

雷周(畫)葛飾氏、北齋の門人にして畫を能くす

雷斗(畫)柳川重信本と鈴木氏、江戶の人、本所柳川町に住す人呼びて柳川町の重信といふ後に町字を省きて柳川重信といひ終に氏の如きに至る夙に北齋の門に入りて畫法を學び其女を妻とし雷斗の號を讓らる後ち浪花の玉山、江戶の南嶺を慕ひて其筆意に摸し又た國貞の浮世繪に倣ふ最も刻板の密畫に長じ讀本を畫く又人形細工の製作に巧なり天保三年十一月歿す年五十餘

雷蕭(畫)雪舟に學び能く人物を畫く

傳教(書)名は最澄、延曆二十一年唐に入りて法を求む天台山延曆寺の開祖なり書も亦凡ならず自書の圖像あり台嶺に收む弘仁十三年六月四日入寂す年五十六

傳古(畫)龍を畫くに巧みなり遺墨今尙ほ黑谷の阿彌陀堂に存す

傳外(書)名は宗佐、凍雲子と號す大德百九十六世延寶三年四月寂す年六十六大通智勝禪師

傳齋(畫)武田氏、畫法を狩野常信に學ぶ

傳六(畫)山本氏、元祿の頃の浮世繪師なり

傳內(書)建部賢文、通稱傳內、御家流より出でゝ一家をなす幕府の書史を勤め江戶に住す其門下一時三千人に餘れりと云ふ世に傳內流と稱す

遂翁【書】名は戸盧、字は遂翁、釋氏なり

愚堂【書】名は東寔、字は愚極、妙心寺の住職詩文を能くす

愚菴【畫】牧溪の風を學びて之を能くせり文政年中歿す年八十餘

愚石 增山雪齋の別號

愚翁 渡邊華山の別號也

愚洲【畫】根本氏、名は器、初め文映と號し後ち愚洲と改む少うして谷文晁の門に入り其蘊奧を極め後長崎に遊び淸人と交り頗る悟る所あり畫風一變す既にして歸り居を江戸にトす名聲隆起畫を乞ふもの門に相踵ぐ山水人物花鳥能く之を兼ね能し設色白描皆其の妙を得たり文久年中

瑞應【書】名は運歛、字は元春、泊如と號す僧正に任ず

瑞山 武市半平太の號

資騰【畫】雪舟の畫法を慕ひ後ち宋人馬遠の風を帶ぶ筆力雄逸神氣活動せり

資信【畫】狩野氏、法眼に敘せらる天保年中

運良【畫】恭應運良は加賀傳燈寺の開山なり畫を好みて能くす曆應四年八月十二日寂す年七十五

慊堂【書】松崎氏、初名は密、字は退堂、又益城と號す肥後の人、幼にして僧となる十五歳の時逃れて江戸に奔り昌平黌に入る數年林述齋の家熟に寓し佐藤一齋と共に切瑳砥礪し學大に進む後ち掛川侯に仕ふ該覽博通一世に冠たり弘化元年四月歿す年七十四

圓伊【畫】書を以て法眼に敘せらる嘗て六條の道場一遍上人の緣起十二卷を畫く筆法宅間住吉に類す而して其山水木石の畫は圓熟して意趣餘りあり正安元年八月二十一日歿す

圓覺【畫】京師法金剛院の中興なり畫を善くす自像を畫きたるもの今尙ほ同寺に存せり

圓心【畫】姓氏傳統を知らず嘗て宇治關白賴通の家にありて鷄を畫くといふ

圓深【畫】朝日阿闍梨と稱す紀氏の子、畫所の圖世に稱せられたりと

圓明【畫】名は光爾、畫を能くし殊に鳫鷺に巧み也天明年中歿す年六十五

圓通【書】紀伊の人、和歌山光明寺の開祖たり黃檗山に上り獨湛禪師に就いて學び學德共に高し人と爲り淸廉無欲大に觀音を信ぜり因て自から圓通と稱す法明和尙と親しみ善し草書に巧みなり

圓常【書】和田氏、源七と稱す寬車、又た蛇とも號す大師樣を善くす

圓爾 釋無關の名

圓俊 狩野廣信の名

圓嶠 阿部棕軒の別號

圓乘【畫】高田氏、江戸の人、加藤文麗に學ぶ文化年中

圓山 狩野寬信の號

圓龍【畫】佐久氏、薩摩の産　狩野派の畫家天保年中の人なり

圓光 大師は法然上人の諡號

圓仁 慈覺大師の名

慈雲【畫】名は飮光、慈雲は其字、百不知童子と號す播磨の人、俗姓上月氏、法樂寺の貞紀和尙の弟子となる又伊藤東涯に學　研幾　年遂に大知識となる傍ら畫を好み雪舟の筆意を學び觀音及び山水を畫

けり文化元年歿す年八十七

慈岳【書】名は定琰、慈岳道人と號す

慈眼天海僧正の諡號なり

慈慧【書】木津氏、名は良源、近江國淺井郡の人なり天台座主となり大増正に任ず良源容貌雄偉なり自ら鏡を杷り自像を書きて曰く我像を置けば必ず邪魅を避くるを得んと永觀三年正月寂す年七十四

慈覺【書】壬生氏、名は圓仁、下野の人なり法を傳教大師に受け延暦寺座主となる能く不動尊を書けり貞觀六年寂す年六十二

道風【書】小野氏、太宰大貳葛弦の子、好古の弟なり書を善くす道勁神逸今古に冠絶す醍醐朱雀村上三朝に歷事し正四位下内藏權頭に至る醍醐帝甚だ其書を愛し醍醐寺を造るに及び道風に命じて榜を書せしむ一は楷一は草初め楷書を南門に掲ぐるに擬す而して終に草書を榜す道風大に喜びて曰く嗚呼賢主なる哉と蓋し其得意は草書に在るを以てなり又命じて行草法帖各々一卷を書せしめ僧寛建をして持して唐に往かしむ蓋し其美を異邦に播かんと欲してなり其餘殿堂の題字宮門の扁榜道風書する所甚だ多し晩に中風を患ひ手顫して筆勢彌々奇體を生す嘗つて橘直幹の爲めに奏疏を書す村上帝常に座側に置く會々禁中に火あり帝左右を顧みて曰く直幹の疏は存するや否やと復た他を問はず康保三年卒す年七十一凡そ其書は一行隻字すら人競ひて之を求む得ざるものは以て耻となす其世の爲めに貴まるゝこと此の如し後世道風及び藤原佐理藤原行成を稱して三蹟と曰ふ又書を善くす多武峰護國院に藏する大織冠の神像高野山に藏する勢至の像は並に其の書く所と稱せり

道棟【書】名は道棟、治理道人、又た猊山人と號す黄檗山の住僧たり

道榮【書】林氏、名は應采、字は疑雲、墨癡、蘿山の號あり肥前長崎の人、萬治年間江戸に至り祝髮して道榮と號す故ありて長崎に歸り寛文年中通辭となる時に年二十四延寶貞享の際道榮の書名大に天下に顯れ遠近爭ひ求む世目して高天漪と並び稱して長崎の二妙といふ

道芳【書】本莊氏、從四位下宮内少輔たり加茂敦直に書法を學びて皆傳を得たり寛文八年五月二十日卒す年六十五

道溪【書】岡氏、名は壽精、字は翕伯、幕府の醫官たり詩文に通じ書を能くす寶暦八年歿す年二十五

道頓【書】初めの名は光長光茂の弟子なり

道賀【書】周文に學び又た雪舟を慕ふ仙女の圖を能くせり

道覺【書】後鳥羽天皇の第六の皇子、西山宮と稱す靑蓮院の法主なり書を能くす建長二年正月十一日入寂す

道晃【書】道晃法親王、古宮と稱す後陽成天皇の第十一の皇子なり聖護院に入りて剃髮す書を能くす人物花鳥雜書を書けり延寶七年六月十八日薨ず年六十八

道元【書】久我道忠の子、越前國永平寺の開祖なり書を能くす建長五年八月二十八日寂す年五十四

道深【書】道深法親王は後高倉院の皇子なり金剛院の御室と稱す書を能くせり建長元年七月六日薨ず年五十二

道恕

【畫】安井門跡蓮乘院の大僧正なり鷹司房輔の猶子にして久我通規の弟なり狩野永納に就いて畫を學ぶ人物花鳥を能くす享保十八年十一月十五日寂す年六十六

道機 釋鐵牛の名

道賢 佐脇嵩之の一名

道安 【畫】山田氏、名は順清、民部と稱す後ち薙髪して道安と號す大和國に住す初め周文及び雪舟の畫風を慕ひ後ち宋人の畫風を追慕し大に其風格を得たり子孫三世畫を能くし印章を同じくす然れども自ら優劣あり道安又彫刻に巧なり今尚奈良に存すといふ永祿十二年正月十三日歿す

道昌 【畫】秦氏、京都西法輪寺の住職なり佛畫を書く貞觀十六年僧都となり明年二月某日寂す年七十八

道眞 【畫】菅原氏、事蹟は世人の識る所なるを以て贅せず畫を能くす延喜三年筑紫の配所に薨す年五十八

道雲 【畫】池永氏、名は榮春、一峰と號す道雲は其通稱なり江戸の賈人なり書を能くし又篆刻を以て聞ゆ元文二年七月十九日歿す

道關 狩野玉燕の初號

道麿 【畫】田中氏、通稱莊兵衛、後ち道全と號す美濃多藝郡の人なり早く鈴屋の門に入り頻りに萬葉を研究して世に推さる殊に古體を善くす天明四年十月歿す

道觀 墨江武禪の一名

道寛 墨江武禪の一名

道崇 尾形光琳の別號

道詮 足利義持の號

道義 足利義滿薙髪後の號

道暉 海北友雪の號

道有 足利義滿の一號

道舜 足利義植の號

道信 【畫】狩野道信賴母と稱す探幽の門人なり萬治年中

道鼎 【畫】墨水道鼎は大阪の人、膂力を以て世に聞ゆ幼より畫を好みて清客江稼圃に學び能く其筆法を得て殊に山水に巧みなり文政年中の人なり

道效 僧高泉の名

道空 細川久之の號

道味 【畫】狩野光信の門人なり通稱を與助と云ふ慶長頃

道一 【畫】酒井氏、名は道一、雨華菴と號す實は山本素堂の子にして酒井抱一の四世たり畫法を外祖父鈴木其一に學ぶ明治年中

道民 北山晋陽の名

道標 蜷川親長薙髪後の號

道林 【畫】年代傳統詳ならず肖像を畫くに巧みなり

道華庵 中島棕隱の別號

楚俊 釋明極の名

義滿 【畫】足利氏、畫事を好み墨畫を能くす應永十五年薨ず年五十一鹿苑院

義持 【畫】足利氏、顯山と號す、畫を好み兆殿司を師とす正長元年薨す年四十三勝定院

義政 【畫】足利氏、入道して道慶と號す畫法を同明藝阿彌に學び妙手に至る多く宋元の書畫を集め金襴を以て表裝し之を愛玩す今猶ほ世に存す延德二年薨ず年五十東山殿、慈照院

義重 【畫】斯波氏、左兵衛督、畫を好み山水花鳥を能くす應永二十五年歿す

義植 【畫】足利氏、始め義材又義尹、畫を好み達摩と書

神の像を書く大永二年薨ず年五十八惠林院

義輝【畫】足利氏、始めは義勝好んで花鳥を書く永祿八年薨ず年三十光源院

義堂【畫】名は周信、字は義堂南禪寺に住して文章に名高し

義隆【書】大内氏、中國の大守、左京太夫に任ず和歌を好み又書を能くす

義董【畫】柴田氏、名は義董、字は威忠、琴海と號す通稱喜太郎、備前の人、京都に住し松村月溪の門に入りて書法を學び最も人物を書くに長ず文政二年四月五日歿す年四十

義重【書】斯波義敎、治部大輔に任ぜらる書を好みて能くし最も山水人物花鳥に巧みなり

義成妹【書】奈良氏、殊色あり性和歌を好み書に巧みなり貞光久左衞門思慕措かず足利義昭の三好黨と戰ふや義成三好黨に屬して久左と接戰して死す妹氏久左に捕はれ却て久左を殺して仇を報ひ屠腹して死す

義方【畫】良峰氏、本朝世紀に書所左近衞將監良峰朝臣義方とあり其詳を知る能はず

義亮【畫】雙林寺に住す書僧にして月峰の男なり

義仁【畫】佐竹氏、右馬頭義盛の嗣子なり講武の餘暇書を學びて能くし特に鶉を書くに妙なり籠鶉之を見れば皆聲を發せりといふ寛正三年二月歿す年六十八

義龍【書】河北氏名は詢、字は子周、桃浪の子なり父の業を繼ぎて家聲を墜さず文政十年閏十一月十日歿す年六十五

楳嶺【畫】幸野氏、幼名覺三郎、父を安田治郎兵衞といひ母は中田氏楳嶺は實に其弟三子なり長じて幸野氏の嗣となる幼にして書を好み年甫めて九歳中島來章の門に學び後鹽川文鱗の門に入り專ら山水を學ぶ慶應三年二月金五兩を得柳馬場に門を開く然れども元治以來世上騷然たり是故に此に來るものなく窮乏其極に達し赤貧洗ふがごとし然れども更に意に介せず神山鳳陽に就きて漢籍を修し傍ら宮原節菴、山中靜逸、江馬天江、谷鐵臣等の諸老儒と交りを結びまた中西耕石、前田暢堂等の南宗派の名家に就き專ら支那書の書法を質す明治十五年內國繪畫共進會の審査官に擧げられ其名大に顯はる後ち京都に歸りて私塾を開く後ち居を名古屋に移すたまたま皇居御造營の御用書を命ぜらる歸京の後また京都畫學校の敎師に擧げられ京都美術協會の設立に與かる二十五年農商務省より米國市加古萬國博覽會出品の揮毫を命ぜられ翌年九月帝室技藝員に擧げらる二十八年二月二日歿す年五十二

敬齋【畫】紀氏、奥洲の人寛政中書を米庵に學ぶ後ち京師に出て徒に授く嘉永年中歿す

敬齋【書】大野氏、名は重民字は子敎、敬齋と號す

敬心【畫】可翁の風韻を學び頗る清奇なり

敬甫【畫】高田氏、(甫を一に輔に作る)久は隆久、初め德右衞門と稱す近江の人、狩野永敬に學びて書法を得後右瀾を師として大に得るところあり人物を能くす後ち法眼となる寶曆五年病み歿す年八十二

敬所【書】猪飼氏、名は彥博、字は文卿、敬所は其號、岩垣龍溪の門に學び後ち一家を成し津侯

に聘せられて優待を受く博覽强記人に絕す弘化二年十一月十日歿す年八十七

敬儀【書】田山氏、通稱從事、伊賀上野の人にして藤堂家の藩士たり京師に出でゝ蘆菴の門に入り修學し終に一家をなし其名一時に鳴り蘆門四天王の第一と稱せらる又た兼ねて書を能くす文化十一年四月九日歿す享年四十九

敬明【書】關氏、字は子哲、東山と號す通稱信藏、本と小堀氏、小室藩士江戸の書家なり天明八年八月二十一日病歿す享年三十八

敬宇【書】中村氏、名は正直、敬輔と稱し敬宇と號す初め鶴鳴、梧山等の號あり幼名は釧太郎幼にして葛馬茂右衞門に就きて四書の素讀を受け又た鹽田瀧潭、石川梧堂の門に轉じて筆法を修む又岩崎多左衞門に就き經書の素讀を學び平田馬之進、川崎魯助、井部香山に漢學を受け桂川甫周に就き蘭書を學ぶ嘉永元年昌平坂學問所寄宿寮に入る文久二年十一月將軍上洛中侍講を命ぜらる慶應二年英吉利國に留學し明治元年歸朝す後ち大學敎授となり又た元老院議官及び貴族院議員に任ず曾て小石川に同人社と稱する一大家塾を開く全國の子弟東京に遊學する者爭うて入學す西周、神田孝平の諸氏と明六社を起し明立雜誌を出だせり著譯の書多く西國立志編自由之理最も汎く世に行はる明治二十四年六月七日歿す年六十

敬和 松山天姥の名

溪琴【書】菊池保定、字は士固、溪琴は其號後ち海莊と改む通稱孫左衞門、紀伊の有田郡栖原村の人、詩に巧みに書を能くす初め大窪天民に從ひ後四方の名士と相唱和す明治十四年一月十六日東京に歿す年八十三

溪菴【畫】鏑木德胤、畫に巧に兼て詩賦及び煎茶を好み又月琴を能くす明治三年八月二十五日歿す年五十二

溪齋 池田英泉の別號

椿年【畫】大西氏、名は椿年、字は大壽、運霞堂又楚南と號す通稱行之助、江戸の人 德川幕府米倉の吏なり初め畫法を渡邊南岳に學び輕纖淡易山水人物花蟲を善くす後文晁の畫風を慕うて之を修め當時に稱せらる嘉永四年十一月六日歿す年六十

椿平【畫】大西氏、大椿と稱す、名は椿平、楚南と號す明治六年六月二十六日歿す

椿山【畫】椿氏、名は弼、字は篤甫通稱は忠太郎、琢華堂、又休菴と號す畫を谷文晁及び渡邊華山に學び後ち淸人張秋谷の風を慕ひ後ち一變して益々勉む人物花鳥蟲獸山水を能くせり特に花鳥に至りては其妙眞に迫る當時華山と共に稱譽せらる就中五穀の圖は人口に膾炙す椿山大橋訥菴と友とし善し訥菴嘗て言ふ余椿山と交る三十年椿山は羸瘦にして衣に勝へざるものゝ如し然れども精神極めて篤く余と同じく片山流の拔刀法を庄內某に學び吹笙を丹羽某に受く椿山劇忙余は多く閑にして皆彼に及ばず一日其故を椿山に問ふ椿山曰く僕終日人の爲めに畫を作り他技を講ずるに暇なし由りて自から戲課を設け每日昧爽夙に起きて拔刀を試み辰時にして止め暮夜吹笙を習ふ三更にして息む是れ或は君に羸る所か

と訥菴是を聞き憮然之れを久ふすと椿山事をなす大率斯の如し其の書の非凡なる又た偶然に非ざるなり又軍法を平山子龍に學びて蘊奥を極むと云ふ安政元年七月十三日歿す年五十四

椿齋〔書画〕佐多氏字は大瘤、椿齋は其の號なりまた雲居道人と號し俳號を李材或は荷舟といふ通稱は龍淵、薩摩の人、書法を馬場伊蔵に學び出藍の稱あり藩主島津齋彬公に擢でられて奥繪師となる又隷書を能くす明治二十四年二月十五日歿す年七十五

椿岳〔畫〕小林氏、通稱城三、椿岳は其號別に吉梵と號す江戸の人、書法を大西椿年に學ぶ明治二十一年歿す年六十七

椿月〔畫〕勝川氏、四條派の書家なり天保年中

椿水〔畫〕内海氏、名は元紀越前の人、文政年中

楓溪〔畫〕赤川俊章（一に年章に作る）字は涼々、熊太郎と稱す楓溪は其號、播州安志藩の人なり江戸に住す元祿年間

楓山〔畫〕呉楓山別に黑酣の號あり通稱は周藏、肥前長崎の人、寛政年中

楓山〔畫〕道幸氏嘉永年中

楓泉〔畫〕中野氏、通稱久右衞門、越後の人、嘉永年中

楓湖〔畫〕松本氏、名は敬忠、幼名藤四郎、常陸の人、天保十四年九月生る、年甫めて十四江戸に出で丶沖一峨の門に入り洋峨と號す一峨歿後佐竹永海に學び永峨と號す後ち容齋に就きて學び其衣鉢を繼げり

雅經〔畫〕木村氏、立嶽と號す、越中富山の人、年甫めて十二江戸に出で丶繪所に入學し狩野伊川晴川及び勝川の三法眼に從ひて專ら書法を學び且つ深く自から研究する所あり刻苦三十餘年幕府の兩本丸御用を務む明治維新の後圖書局勸農局を始め皇居及び東宮御所等の繪書に力を盡し大に賞賛せらる而して其書風は唐宋元明に倣ひ米國人にして其門下生たるもの數人あり第二回博覽會に出品して妙技賞を受け第三回博覽會に出品して大に賞賛を受く明治二十三年七月九日歿す年六十四

雅章〔畫〕藤原氏、初め名は雅昭、飛鳥井氏、雅庸の第三子なり官權大納言に至り從一位に上る榮雅流の書法に於て巧妙の聞えあり延寶七年十月薨ず年六十

雅齋〔畫〕平井氏、名は維章、字は子良、仙右衞門と稱す文化元年七月朔日歿す本庄靈山寺に葬る

雅邦〔畫〕橋本氏、名は雅邦、幼名千太郎、後に長卿と改む七歳より書道に志し十三歳にして狩野勝川院雅信の門に入り勝園雅邦と號す夙夜激勵終に儕輩を凌ぎて粉本掛に進み更に塾頭に舉げらる時に年二十三從來狩野の塾頭は多くは老成の人なり年少くして此に昇進せるは實に異數とす安政六年年二十六獨立して一家を成す而かも海内多故世繪事風流を顧みず困究艱苦を嘗む明治二十年文部省に繪書取調所を置くに當り狩野芳崖と共に所員となり次ぎて東京美術學校の設立するや舉げられて教授となる又た内國勸業博覽會の審査員及び帝室技藝員たり三十一年日本美術院を創立し邦書の新生面を開

く門下には觀山、廣業、玉堂、大觀、春草等の秀才を出だせり四十一年一月十三日歿す年七十五

雅谷〔書畫〕島田氏、四條派の畫家なり文政年中の人なり

雅喬〔書畫〕島田氏、雅喬は雅容の子、書を父に學ぶ安政年中

雅經〔書畫〕木村氏、立嶽と號す越中富山の人、書法を狩野勝川雅信に學び後ち江戸に住し書を以て一家をなし殊に樓閣圖に於て精緻を極む明治二十三年五月歿す年六十四

雅方〔書畫〕佐久間氏、雅方は仙臺の人書法を狩野某に學ぶ天保年中

雅章〔書畫〕林氏越後の人書を狩野勝川雅信に學ぶ能く其法を得たり明治廿一年歿す年五十八

雅信 狩野勝川の名

琴谷〔書畫〕松山氏、名は鎬、淸の長子にして名聲父に讓らず箕裘を紹ぎて家聲彌々揚る博學にして詩文を能くす又書畫を善くし尤も好んで梅を寫す庭前に梅樹數株を移し植え雲朝月夕之を愛觀し興至れば則ち毫を揮へり嘗つて藩主の命を受けて越前に使せしに越前侯召して書畫を書かしめ賞歎の餘り自から座右の蒔繪の硯箱を取て賜ふ時人これを榮とす鎬字は大成通稱察右衛門琴石また觀堂消夏樓の號あり

琴谷〔書畫〕山本氏、名は謙、石見津和野龜井侯の繪師なり渡邊華山に學びて妙手に至り最も人物を能くし椿山の花卉半香の山水と並稱せらる明治初年歿す

琴峰 長町竹石の別號

琴泉〔書畫〕岸氏、六藏と稱す大阪の人、南宗書家なり明治年中

琴泉 岩瀨牛麿の別號

琴渚 田柴義董の號

琴陵〔書畫〕島勝と稱す南宗の畫家なり文久年中

琴堂〔書畫〕山本氏、名は子益、五竹と號し謙藏と稱す南宗畫家なり文政年中

琴雷舍 三世歌川豐國の別號

琴後翁 村田春海の號

琴鶴堂 古賀穀壁の別號

萬里〔書〕帆足氏、豐後日出の人なり別に文簡と號す藩主木下俊敦擧用して藩政を釐革す水戶景山其名を聞きて聘せんとするに際し躬幕譴を受くるを以て果さず其後また官家の招聘ありしと雖も當時公武の間圓滑ならざるを以て固辭して出でず學術文章は三海梅園、廣瀨淡窓と併して九州の三偉人と稱せらる藩侯の信任亦た甚だ厚し嘉永五年家に歿す年七十五

萬里〔書〕渡邊氏、名は廣萬里は其號、享保頃

萬里〔書〕名は瑞九、字は萬里、漆桶と號す一號梅花無盡藏と云ふ相國寺に住す詩を善くして其名高し

萬仞〔書〕名は宗岱、字は萬仞、一字東明、黄檗山の僧たり、詩文書に名あり

萬年〔書〕長萬年は紀伊の人、片山兼山の門に學ぶ儒にして書を能くす

萬山〔書〕名は道白字は万山、學識の名高し

萬庵〔書〕市河氏、名は三兼、字は昇六、萬庵は其號、天保九年三月江戸に生る米庵の男なり父の書法を受け最も篆隷の長ず

萬禳 奥文鳴の字

萬江〔書畫〕釋春屋の法嗣にして大德寺百三十回世たり書畫を能くす慶長十九年寂す年九十三

萬玉

亭 三井親和の號

碎巖【書】高森氏、通稱有造、自知齋、菊梁、朶香等の別號あり弘化四年十月上總に生る年十七書を山本琴谷に學ぶ山水花卉に長ず

落日庵 與謝蕪村の別號

紅村 岡本豊彦の號

葦庵 釋百拙の號

葎齋 北尾政演の號

萩山【書】福島氏、通稱敬齋播磨の人、天保年中

葭庵 池大雅の別號 **葭洲**【書】賀氏、周防の人、安政年中

葫蘆子【書】雪舟の門人、墨鷹に巧みなり文明年中

葡萄和尚 釋天龍の稱

蛻巖【書】梁田氏、名は邦美、字は景鸞、新六と稱す蛻巖、又た鶴毛と號す初め人見鶴山に學び長ずるに及びて山崎闇齋の學を喜び其所著に就きて研究す年二十六鶴山に介して新井白石を見る白石其才を異とし之と交る室鳩巣、三宅觀瀾等の諸名士と相周旋す年四十八赤石侯の文學となる詩才巧妙一世に冠たり書も亦巧み也寶曆七年七月十七日歿す年八十六

睡庵 浦上春琴の別號 **睡雲子** 高嵩溪の別號

蜀山人 太田南畝の號

蜂窓【書】小津氏、通稱新兵衛、慶應年中

痴翁 高寸田の別號 **痴角**【書】濱崎氏、通稱角彌、安政年中 **痴齋** 谷文一の號

痴仙 濱田杏堂の別號

矮梅 野呂介石の別號

遍井齋【書】島田氏、通稱義輔、常陸の人、鳥居派の書風を能くす明治十七年歿す年六十有餘

暉眞 酒井抱一僧たりし時の名也

罽粲 桑山玉洲の名

煙龍舍 高嵩谷の別號 **煙波釣叟** 春木南華の別號

感和亭【畫】前野氏、兵學劍法に通ず後ち市井の間に隠れ谷文晁に從ひて畫法を學ぶ文政年中の人

閑上老隱 甲賀玩鷗の別號

煌 古賀侗庵の名

煥圖 安東東野の名

十四畫

歌麿〔一世〕【畫】喜多川氏、本姓は鳥山、名は豊章、俗稱は勇助、後ちに勇記、一窓主と號しまた紫屋と號す鳥山石燕の男なり諸書に石燕の門人とし又川越の産とし又北川豊章の門人と云へるは皆非なり天明二年板「松の旦」と題せる發句集は石燕が催しにして其挿畫は石燕及び歌麿其他門人等の畫く所なり中に鳥山豊章筆歌麿豊章筆鳥豊章筆等の落款あり即ち歌麿は石燕の子にして鳥山氏と稱し名を豊章と云ひし確證とするに足る其の何が故に喜多川氏と稱せしか詳ならず最も時世粧の美人畫に長じ一機軸を出だして浮世繪中興の祖と稱せらる嘗て俳優の肖像を畫かず笠森おせん難波屋おきく柳屋おふぢの三美人を畫き發賣して大に行はる又俳優八百藏が阿半長右衛門の狂言を演せし時似顔に據らずして其道行を畫き大に賞せらる蓋し當時歌川豊國の似顔畫盛んに行はれしを以て殊に其糟粕を甞むるを避けたるならん而して豊國の俳優畫は其顧客唯々江戸市中に止まるのみ歌麿の美人畫に至りては北は出羽奥州より西は全國に行はれざる所なく長崎渡來の和蘭人及び清朝人に至るまで皆爭うて購入す殊に秘戯の圖に巧にして多く之を畫く又善く花鳥蟲魚を寫して眞に逼る文化元年繪本大閤記中の圖を錦畫となし遊女等を畫き加へて發行す仍て罪を得て獄に下り出でゝ病歿す年五十三實に同二年五月三日なり其繪きたる繪本類の有名なるは吉原年中行事、繪本和歌夷、同汐干のつと外數種にして年中行事最も世人の賞美する所なり

熊斐【畫】熊代氏、名は斐、字は淇瞻、彦之進と稱し後ち甚左衛門と改む繡江と號す肥前長崎の人、家世譯官たり熊斐少くして畫を好み渡邊秀碩に學ぶ後ち享保中清人沈南蘋德川氏の命を受けて長崎に來る時に熊斐年十九官許を得南蘋に就きて畫法を學び日夜切磋遂に其奥旨を極め一家を成す是に於て其名一時に振ふ畫を求むるもの日に絶えず又來り學ぶもの千を以て數ふ本邦南蘋の畫風は熊斐を以て權輿とす安永元年十二月二十八日歿す年八十

熊耳【書】大内氏、名は承祐、字は子綽、通稱忠太夫、熊耳は其號、奥州三春の人、唐津公に仕ふ徂徠の門人なり儒にして書を能くす安永五年四月歿す年八十

熊岳

【畫】岡文暉、字は世昌、熊岳と號す大坂の人也、福原五岳に學び後ち其風を變じて文人畫となる天保四年十二月二十一日歿す年七十二

種彥【畫】柳亭と號し高屋彥四郎と稱す德川氏の世臣にして祿二百石を食む本姓は横手氏、系は甲斐の猛將横手某に出づ種彥初め畫を工みにし俳諧狂歌を善くし愛雀軒又足薪翁と號す俳號を木卯狂歌名を柳の風成後に心の種俊と曰ふ後小說を以て名を得而して偐紫田舍源氏の一書は源語に根據し飜して近古の事となす文艶麗詞絶妙人情に入り大に世に行はる因て其淺草堀田原の居樓を名けて偐紫樓と曰ふ時に俳優に坂東三津五郎と云ふ者あり其伎に精し種彥容貌酷だ肖る醉後戲れに之に扮す人誤りて以て眞と爲す因て或は三彥と稱す乃ち戲文に其字を署し以て印章に代ふと云ふ天保中幕府の執政水野忠邦大に弊政を革め稗史小說を以て淫靡俗を傷ふものとし其書を毀たしむ或ひと忠邦に謂つて曰く種彥は幕府の士にして無用の文字を著はす國の蠹なり且つ其述ぶる所の田舍源氏は托して以て後殿の陰事を洩らす宜しく處ずるに法を以てすべしと吏旨を受けて糺察す種彥分疏して理あり事解くを得たり然れども言ふ者止まず憂懼して病を得幾ばくもなくして歿す實に天保十三年七月十九日なり年六十

種永 狩野永心の名

種次 狩野左近の名

種信 狩野即譽の名

種信 狩野宋仙の名

種信【畫】高力氏、歌川國勝に學ぶ文久年中

種淸【畫】歌川國勝に學ぶ文久年中

種繁【畫】歌川國勝に學ぶ文久年中

種景【畫】歌川國勝に學ぶ文久年中

種政【畫】歌川國勝に學ぶ文久年中の人

精里【畫】古賀氏、名は撲、字は淳風、精里は其の號、彌助と稱す世々佐賀藩に仕ふ精里少にして學を好み日夕勉磨す初め福井小車に從ひ後西依成齋の門に入り最後に大阪に寓し尾藤二洲賴春水と友善し學成り國に歸るに及びて擧げられて機密に參與す侯學校を幷設す精里命を受けて其規制を定む兼て敎授の事を行ふ是時國田給せず諸吏手を束ぬ精里建議して官女の冗濫を汰し公室の美食を減ずる等の數件を列擧して其の行はれんことを請ふ侯之に從ふ未だ匝月ならずして治綱粗々立ち遂に衆弊を釐革して財政を整備す侯嘗つて吏の罪ある者に命じて自首せしむ咸な以爲らく自首せば必ず免れんと爭ひて自首す既にして皆其祿を奪ふ精里曰く是れ吏を誣ゆるなりと力爭すれども聽かれず因て其の職を辭して專ら敎授を掌どる寬政三年侯に從つて江都に來る幕府命じて經を昌平黌に講せしむ藩臣黌に入りて經を講ずるは精里より始まる人以て之を榮とす七年擢ぞられて幕府の儒員となり林祭酒、柴栗山、尾藤二洲等の諸儒と力を戮せて學政を振興す既にして昌平黌の敎官に陞る文化八年林祭酒と共に對馬に往て韓使に接す韓使其の學德に服す晩年齒德共に尊し海內仰で泰斗とす列侯貴顯の贄を執る者甚だ衆し書法を喜み夙に松雪を學ぶ後ち南宮玄宰の諸家を參用し

晋唐に遡る雅健老蒼一時に冠たり兼ねて槍術を善くし妙奥に臻る射御亦た略々習熟せり文化十四年五月四日歿す年六十八

精菴【書画】殊に墨畫に巧み氏名年代詳ならず

精英【書画】加藤氏、岡本豊彦に學ぶ天保年中

精齋【書画】澤渡氏、山脇廣成に從つて畫を學ぶ天保年中

彰信【書画】狩野氏、名は彰信、後ち章信に改む初の名は仙次郎、素川と號す書法を信政に學び後ち法眼に叙し奥畫師に列せらる常に好んで手巾を蒙り(世に素川の米屋被りと云ふ)貴客に對するを喜ばず其畫同輩畫院中に超え畫風自ら一流をなす當時稱して妙手となす然れども性游蕩を好みて常に花街に出入す吉原越前屋の妓和國と狎る故を以て門下に吉原廓裡の娼妓輩甚だ多し田沼侯嘗つて章信を招く侯は幕府の寵臣なり章信招に應ぜずして曰く小子性甚だ寒を恐る故に頭上巾を脱するを得ず侯若し之を聽かば則ち召に應ぜん然らざれば請ふ辭せんと侯之を許す是より諸侯章信を召すに皆此の例に習ふ其の貴顯の爲めに愛せらるゝ概ね此の如し家は深川扇橋に在り宅地方六十間高樓を結構して之れに居る文政九年十月二日歿す年六十四

彰甫 丹羽嘉言の號

輔實【書画】九條氏、關白兼晴の男、從一位關白太政大臣に至る政治を見るの餘暇繪事を嬉しみ其蘊奥を極む其の遺墨世に稀なり京師寺町なる五善寺の辨天十五童子の幅のごとき斯道の高手といへども及ぶべからざるものあり享保十四年十二月十二日薨ず年六十一

遠忠【書】十市氏、書風鳥飼流より出でゝ別に一家をなす弟遠勝も亦た能書家なり

遠澤【書画】加藤守行、遠澤と號す奥州會津の人狩野探幽に學びて一格を出す

漸齋【書】大森秀祐、初め安右衛門と稱す、玉川と號す、石川丈山に從ひて儒學及び書法を學び又た里田正玄に就いて茶道を修む寛永三年三月晦日歿す年八十二

嘉言【書画】丹羽氏、彰甫、聚珍堂、又福善齋と號す名古屋の人、書畫を能くす京師に在りて大雅堂を友とし明畫を學び氣韻高逸なり晩に謝庵と號す天明六年三月十六日歿す年四十五

嘉陵【書画】上松氏、尾張笠寺の人、畫を松村景文に學び其風格を得たり天保年中

嘉徳【書画】戸川氏、才次郎と稱す江戸の人、書法を小栗寛令に學ぶ明治十八年歿す年七十一

嘉外【書画】雪舟に學び山水を能くす八十八才の模本あり文安年中

嘉内【書画】花澤氏、吉村周山の門人、安永年中

榕堂【書画】呉氏、北汀の弟、兄に學びて梅菊の畫を能くし又た書に巧なり天保年中

監物【書画】狩野元信の門人、筆法能く師に似たり元祿年中

監[illegible]【書画】墨竹に巧なり、宋人の風ありといへども其畫甚だ稀なり

維明【畫】京師相國寺中光源院に住す名は周奎字は維明、羽山と號す伊藤若冲に書法を學びて梅花及び鷄の圖を能くす文化年中に歿す

維明【畫】廣島氏、字は士廣、鶴皐と號す、維明は其名、書法を五十嵐俊明に學びて能くす

維岳【書】荒木氏、字は嵩夫、呉井と號し八郎と稱す江戸の書家なり明和四年七月二十六日歿す

維久【畫】巨勢派の畫人なり、飛彈守に任ぜらる當時の能書にして武裝の圖に巧なり元享年中の人

維寧【書】源維寧は江戸の人、眞淵に學びて古學詠歌を能くす安永中歿す

維範【書】僧維範紀氏、紀伊國雜賀の人、南院を高野山に肇む嘉永三年正月廿八日小恙あり自ら癒えざるを覺り法華經一部を摸し又た不動尊髙體を畫き衆僧に請て供養し三月三日寂す年六十六

維禎 伊藤仁齋の名

圖南【畫】淺井氏、名は惟寅、通稱頼母、圖安は其號、平安の人なり家世醫を業とす圖南傍ら畫に巧に最も墨竹に妙なり宮崎筠圃、山科李蹊、御園仲梁と共に平安の四竹と稱せらる天明二年八月五日歿す

禎山【畫】岡本氏、玉山と號す奥州の人、山水を能くす文化年間

綾山【畫】黑田氏、名は良、字は忠良、綾山は其號初め福原五岳に學び後ち林閬苑を師とし畫を能くす讃岐高松の人にして備中玉島に住す

綾岡【書畫】池田氏、通稱奈良屋吉兵衛といふ書畫の板下等を書く其意匠亦巧なり明治二十年五月二十四日歿す年七十一

綾足 建部凌岱の別號

綾阿【畫】池田氏、江戸の畫家なり嘉永年中

稱齋【書畫】尾崎脩平、字は子平、鳩居と號す江戸の人、中村侯に仕へて儒官となる金峨の門人なり書を能くす

福賢【畫】奉松を師として學び佛像人物及び花鳥に巧なり

福信 狩野洞春の名

臺嶺【畫】河田寛宏、字は文饒、尾張の人初め中林竹洞に畫を學び後ち元明の古蹟を慕ひて之を修む殊に山水花鳥に巧み也

臺山【畫】廣瀬氏、名は淸風、字は穆甫、臺山は其號、通稱雲太夫、津山藩士なり壯に及び京邸監となり後ち召されて近侍となり家を粒して江戸邸に徙る邸の留守居となり又た目代に遷る幾ばくも無くして致仕し麻布永坂に居をトし畫を以て自ら樂しむ筆法一に古に遵ひ新秀掬すべし晩に郷に歸る文化十年十月十三日歿す年六十三

臺石 野呂介石の別號

綱政【畫】池田氏、備前岡山の藩主なり新太郎少將光の政子にして從四位下左少將兼伊豫守に任ぜらる武事の餘暇專ら風流を嗜み畫に巧なり曾て宇治平等院に源三位賴政の像を納む其家祖たるを以て特に力を盡せるものなるべしといへども其の筆力を窺ふに足る

綱政【畫】朽木氏、土佐守と稱す丹波

福知山の城主也好みて狩野風の畫を作る筆力温雅文化年中

綱吉【書畫】徳川大將軍常憲公、畫法を狩野探幽に受く寶永六年薨ず年六十六

綱方【書畫】朽木氏、綱方土佐守と稱す丹波福知山の城主なり狩野派畫家なり文化年中

端倪【書】名は元辨、字は端倪、詩名高し

碧湖【書】名は元達、碧湖と號す釋氏なり

碧雲洞 與謝蕪村の別號

碧海【書畫】中村氏、彌藏と稱す名は宗錫、別に佛菴と號す江戸の人なり能書を以て世に名あり兼て畫技を能くす天保年中

碧海【書】柴野氏、名は允升、字は應登碧海と號す讃岐の人、栗山の弟貞穀の二子にして兄允常と共に栗山に養はる碧海阿波侯に仕へて儒員たり能く家學を格守し尤も詩文に長ず法度謹嚴を以て勝る天保六年七月十六日歿す年六十三著す所机上集十七卷あり初集十卷世に行はる

翠溪【書畫】小松原貞、字は廓大、貞四郎と稱す江戸の畫家なり天保十五年十二月晦日歿す年五十四

翠湖【書畫】小松原誠美、字は行源、希唐菴と號す翠溪の男にして江戸の畫家なり

翠雲【書畫】山本氏、名は紅英、字は瘦菴、通稱は彌蘇、綠陰の女なり畫を善くし最も墨梅に妙を得たり

翠岩【書】名は宗眼、似玉栖芦子と號す大德百九十五世寬文四年七月寂す年五十七法雲大仰禪師

翠軒【書】立原氏、名は萬、字は伯時、甚五郎と稱す翠軒は其號、別に東里と號す水戸藩の儒員なり父を蘭溪といふ亦た儒を以て世に名あり翠軒好みて書を讀み學を餘熊耳に受け唐音を紀德民に學び傍ら飛彈守公に就きて書を修し久保盅齋、柴野栗山、大塚顧亭、伊勢安齋等と親しみ善し學成り水戸に還りて儒員となる文公の時擧げられて侍讀となり遂に史館總裁に累遷し又た政事に參預す時に松平定信幕府の執政たり翠軒數々上書して時弊を濟ふ夫の定信が大老の次諸老の上に昇進し古賀精里、尾藤二洲の幕府に薦むる亦皆翠軒の陰に議する所に出づといふ人其卓識を稱す武公始めて國に就くや翠軒既に致仕して家居す武公其學行あるを以て特に召して論語を講せしめ待遇甚だ厚し翠軒平生古書古物を愛し珍寶のあるを聞けば遠近を問はず必ず訪問す最も新井白石の書を好み新安手簡及び白石遺文の輯あり

翠雲【書畫】川崎氏、通稱恒藏、下野の人、安政年中

翠蘭 林幹々の號

翠松 大岡春朴の別號

翠塢【書畫】女史は齋藤氏、名は柳之、字は淑英、通稱とよ、文政中

翠雲齋 高嵩谷の別號

翠雲齋 片山尚榮の號

翠蓑翁 英一蝶の別號

榮川【書畫】狩野氏、名は古信、榮川は其號、周信の長男、法眼に叙せらる其畫祖父常信の風格あり名手と稱せらる享保十六年正月九日歿す年三十六木挽町狩野氏第四世

榮川【書畫】狩野氏、名は

典信、白玉齋と號す法眼に叙せられ榮川院と稱ふ榮川の男、父に書法を學びて能手たり德川家治に寵遇せられ旗下に列す寛政二年八月四日歿す年六十一、木挽町狩野氏第五世

榮澤【畫】狩野雪信、榮澤と號す

榮順【畫】狩野親信、通稱主水、榮順と號す

榮賀【畫】宅磨榮賀其の父子傳統詳ならず宅磨の家名を繼いで法眼に叙せらる其佛畫の如き筆意從來に見ざる所元の顏輝に酷似せり蓋し和畫の古風を變じて漢畫の風格を加へしもの此に始まるか正和年中の人也

榮之【畫】細田氏、鳥文齋と號す名は時富、浮世繪を能くし美人畫に巧みなり天明寛政中の人

榮昌【畫】細田氏、榮之の門人にして浮世繪に巧みなり

榮理【畫】細田氏、榮之の門に入りて學び浮世繪を以て名あり

榮春齋【畫】櫛橋氏、名は正盈、大坂の人也狩野派の畫人なり明和二年歿す

榮普齋【畫】姓名を知らず牧溪を學びて其源は周文より出づといふ畫くところのもの多くは文珠及び布袋の圖なり

榮春【畫】福島氏、通稱政右衛門武藏の人なり安政年中

榮興　松野梅山の號

榮翁【畫】狩野氏、一翁の二男、初名は重政式部と稱す榮翁は其號なり池田氏に復し重賴と云ふ畫を狩野休伯に學ぶ慶安年中の人

榮閑　藤田友閑の初號

榮女【畫】葛飾北齋の第三女畫法を父に學ぶ三世等琳門人南澤船二に嫁せしが故あり去りて寡となる嘗て一文人形を造る世人傳稱爭うて之を購ひたりと云ふ文化年中

榮岳【畫】狩野彰信の門人、文化年中

榮山【畫】春川氏、浮世繪を能くす文化年中

榮西【畫】建仁寺の開祖なり備中の人、書畫を能くす建保三年寂す年七十五

蓊【畫】三枝蓊、名は眞洞、本派本願寺末、和州郡山浄專寺の住職なり詩書を好む幕末の際攘夷を唱へて中山忠光の南山義擧に加盟し名を市川靜一郎と改め各所に奮鬪す軍敗れて後ち逃匿し繪事を能くするを以て畫工となる德川氏の大政を返上するや直に上京して朝廷の親兵に加はる明治元年二月英使の初めて入朝するや慷慨の餘り同志と謀り途上に之を要擊し數人を傷く身も亦重創を被りて捕へらる同三月二十二日刑死す

豪信【畫】藤原信實六世の孫、法印となる畫を能くす或は曰ふ洛西梅津長福寺に在る所の花園天皇の宸影は豪信が命を奉じて寫す所なりと

豪谷【畫】衣笠氏、名は濟、通稱延太郎、薰明と號す備中の人なり、東京に住す初め畫を石川晃山に學ぶ嘗て清國に航し畫を研究すること數年にして歸る山水に長ず明治某年歿す

對山【畫】日根氏（一に日根野に作る）名は盛長、字は小年、和泉堺の人京都に居り畫名高く星巖海屋等と友たり資性豪放にして酒を嗜む嘗て雪ふる日島津久光の宴席にあり毫も怖れ憚るの意なく身を横

さまにして醉うて放歌す席上劉玄德が雪中に孔明を訪ふの圖を畫く筆力氣韻精妙也一座驚嘆す歌人景常なるものあり興に乘じ一首を其上に題す對山忽ち眼を瞋らして曰く汝何ぞ我畫を汚すや汝が歌我畫に題するの筆に非ずと罵りて止まず人の宥に依て僅かに解くと云ふ明治二年三月十三日歿す年五十七

壽昌【畫】雪村に學びて畫を善くす多くは蘆雁を畫きて巧み也

壽茱【畫】京師妙心寺の住僧なり既白、又た長德寺山主と號す畫を善くし筆法甚だ松花堂に似たり

壽卜【畫】狩野元信に學びて能くす相模小田原の人永祿頃

壽石【畫】狩野氏、名は秀信素川信政の子、畫を父に學びて能くす享保三年二月歿す年八十

壽石【畫】名は敦信、外記と稱す狩野永德の門人なり安永七年十月二日歿す年六十二

壽信【畫】狩野氏、行信の子、素川と號し又潮音齋、三龍等の號あり明治三十年十一月歿す年八十四

蒼海【書】副島種臣、初名は二郎、舊佐賀藩士、明治中興の初め參與となり三年參議に任せられ尋きて外務卿に任ず六年特命全權公使となりて清國に駐剳し後ち復た參議に任じ征韓論の起るや西鄕隆盛等と開戰を主張し容れられずして朝を退き詩賦吟詠以て樂む後ち樞密顧問官、內務大臣となり正二位に敍せらる明治三十八年一月三十一日薨ず年七十八

蒼雪狩野之信の別號

榲邨【書】小杉氏、杉園と號す、舊德島藩士なり文部屬、博物館技手、古社寺保存會委員等を歷任し廿八年御歌所參候を命ぜられ尙美術學校、文科大學、學習院等に敎鞭を執る有職故實に長じ和歌を善くし書に巧みなり明治四十三年三月二十九日歿す年七十七

鳳洲【書】久野俊明、字は彥遠、鳳洲は其號、(洲一に淑に作る)晩に老餐生と號す父は圓法、母は中井氏、元祿九年東都に於て俊明を生む俊明幼にして詩及び書に巧みなり年甫めて十二圓法に從ひて水戶侯に謁す侯因て詩を試む立ろに賦して献ず侯其背を撫でゝ大に嗟賞し即ち自ら書若干卷を賜ふ圓法爲めに益々師儒を擇び業を卒へしむ正德元年年十六弟子員を以て韓使に接し唱和の際敏捷迅速を以て特り諸子に先ちて成る時に韓客の請に應じて敬の字を大書す其人重ねて其傍らに書せられんことを請ふ韓客筆を閣めて擬議す俊明輙ち筆を採りて主一無適の四字を寫し以て示す坐皆驚嘆す名聲噪ぎ交通ひろく最も雨森芳洲、祇園南海、梁田蛻巖、倉八江と善し四子は當時の碩儒而して皆推して及ぶ可からずと爲す享保元年尾侯に筮仕す頃ありて書院郎に補せられ擢でられて顧問に充つ寬保中命を奉じて書を東都外山別館に校す凡て三千餘卷尋ぎて又た尾城の秘府に在りて經傳史子箋疏より以下百家、衆流、醫卜、曆法、輿地、樹藝、浮屠に至るまで傳ふる所無慮二萬卷悉く校讐して以て藏す明和三年歿す年七十

鳳岡【書】林氏、名は戇、一の名

は篤信、字は直民、春常と稱す、鳳岡は其號又た整宇と號す春齋の第二字、梅洞の弟なり幼にして聽明經書に通曉し詩律に耽嗜し兄梅洞に從ひて學ぶ寬文丙午春梅洞歿す鳳岡年甫めて二十六父に代りて諸生を統べ詩禮を以て任となす延寶庚申春齋歿す鳳岡職祿を襲ぎ大藏卿法印に任せられ弘文院學士の號を賜はる天和新政の時に當りて夙夜公に在りて殆んど虛日なし初め羅山私に書院を忍陵に建て弘文館と號す孔子及び十哲の像を安置して之れを奉祀す元祿四年鳳岡旨を奉じて之を湯島臺に移して官祀とす其經營規畫更らに壯麗を加ふ將軍綱吉親から大成殿の三字を書して之を提げ祀田千石を附し館を設けて學士を延き併せて宅地を此に賜ひ以て朝に便にす蓋し保元以降天下擾亂士大夫皆な金革に從事し文藝浮屠に墜ち其事一に五山に歸す國家隆平を致すに及びて儒者別に家を立つ然れども猶ほ目して制外の徒とす其顱を禿して士品に列せざる此れ戰國の頽俗未だ革むるに及ばざるなり鳳岡人と爲り豪俊雄萬慨然以爲らく儒の道は則ち人の道人の外儒の道あるにあらず然るに之を付けて制外のものとなすは不可なりと是の時綱吉大に儒道を崇む遂に命を受けて髮を蓄へ大學頭信篤と稱し從五位下に敍せらる是に於て世皆な儒敎は世用を主とするを知る鳳岡五君に歷事す凡そ六十年元祿中最も信任せらる正德中新井白石專ら事を用ゐ議頗ぶる合はず數々致仕を乞ふ免るされず其の名望の隆を以てなり其專ら掌る所のもの三あり曰く官爵曰く系譜曰く喪服此れ事體の最も大なるものに屬す其餘の機務預り聞かざるなし故に鳳岡の門には客常に塡し勢朝野に振ふと云ふ天和壬戌命あり子信充をして孔廟を掌らしめ大學頭に任じ鳳岡を以て大內記となす明年致仕す時に享保九年なり鳳岡自から拙々翁徐干子と號す後ち八年にして卒す時に享保十七年六月朔日なり年八十九私して正獻と曰ふ

鳳洲【書】竹安定、字は鼎甫、通稱伊三郎、大阪の人、書に巧にして一特賞揚せらる

鳳洲【書】森鳳洲、名は充、加州の人、岸駒に學びて能くす

鳳水【書】岡村徹、通稱左膳、書を能くす伊勢の人

鳳潭【書】名は濬、字は鳳潭、菊潭と號す又華嶺道人と號せり華巖寺の住職知識の名高く又詩文を能くす

鳳梧【書】一井光宣、字は桐助、出雲の儒者なり門戶を浪花に張り諸生に敎授す書を能くす享保年中歿す

鳳陽【書】神山氏、美濃の人、別に三野と號す詩書を能くす京都に住す明治二十二年歿す年六十六

鳳山【書】辻氏、讃岐の人、天保年中

鳳岳【書】內藤氏、通稱嘉右衛門周防の人安政年中

鳳岡　關思恭の別號

鳴門【書】鈴木氏、名は積、字は一善、鳴門は其號別に淡墨齋、小蓮、直淑齋等の號あり通稱は源兵衛、阿波の人、鈴木芙蓉の義子なり書を能くす義父に學びて山水人物に巧み也文政二年歿す

鳴鶴　森蘭齋の別號

鳴鶴【書】日下部東作、字は子暘、別に野鶴閑人と號す、彥根藩士天保九年八

月生る戊辰の役從軍功あり太政官大書記官となる後ち職を辭す幼より書を好み研精多年書名夙に鳴る又詩賦に長ず後ち淸國に遊び大に得る所あり遂に書道の蘊奥を究む書は漢魏六朝の法を唱へ篆隷眞行草皆能くす

綠雲【書】高田氏、通稱は彰一郎、壯年大竹蔣塘の門に入り書法を學ぶ後京阪に遊び橋本香坡に就き學を修む篆刻を以て世に知らる

綠堂 松岡正盛の號

遜軒【書】貝原氏、通稱兼太郎、武州忍の人文久元年生る、書を中根半嶺に受く

輌音【畫】小堀氏、通稱桂三郎、須藤晏齋の三男、元治元年下野安蘇郡小中村に生る川崎千虎に就いて有職故實を研究し大に大和風の繪を能くす

熙庵 釋玉翁の別號

熙常 山田芳洲の名

熙々堂 大沼枕山の別號

暢齋【畫】前田氏、名は碩南宋畫家也安政年中

暢園 岡田新川の別號

蟯叟 谷文晁の別號

塵遠草堂 皐橋杏村の別號

蒹葭堂 木村巽齋の別號

蓑洲【畫】岡氏、大阪の人、鎌田巖松に學ぶ明治八年歿す年八十四

聚珍堂 丹羽嘉言の號

碩淵【畫】金室氏、通稱太市、安政年中

碩田【畫】後藤氏、豐後の人なり文久年中

蜻洲【畫】佐々木氏、初め畫を中井藍江に學び後ち鎌田巖松を師とし山水花鳥人物を能くす安政三年三月歿す年五十四

槐園【畫】尾崎氏、大阪の人漢畫を能くす安政年中

鼓岳【畫】伊藤氏、名は淨濤、肥前の人、畫を熊斐に學ぶ享保年中

漁樵齋 雪舟の別號

齊昭 德川景山の名

畸庵【畫】齋藤氏、但馬豐岡の人、南宋派の畫家なり殊に山水を善くす明治十七年歿す年七十餘

慥々齋 伊藤東涯の別號

魁堂 柳生柳塘の號

蒲汀【書畫】横川氏、通稱源藏、彦根藩士なり明治初年裁判所に歷任し後ち農商務書記官となる詩文書を善くす身體豐肥なるを以て自ら蒲汀と稱す明治二十一年六月歿す

夢牕 釋疎石の號 **夢軒** 十時梅崖の別號 **夢中庵** 小川笠翁の別號なり **夢清樓** 加藤龔山の別號

十五畫

賣茶翁〔畫〕柴山氏、名は元昭、月海と號す又高氏、名は遊外肥前蓮池の人、幼にして僧となり禪學に通す後ち故ありて僧行を止め京師に住し茶を售りて口を糊す嵐山春花の晨通天秋楓の昏自ら茗具を荷ひ席を設けて賓を待つ風流雅客愛玩す人目して賣茶翁と曰ふ晩年岡崎に居り携ふる所の茗具を火に投じ偈を作りて曰く劫火洞然毫末盡、青山依舊白雲中と門を杜ち客を謝し以て天年を養ふ寶曆十三年七月十六日歿す年八十九

輿以〔畫〕狩野定信、初め彌左衛門と稱し後彌兵衛と改む輿以は其號（一に輿意に作る）下野足利の人、（一說に伊豆の人）法橋に叙す初め光信に學び能く其技に通ず後牧溪雪舟等の畫風を慕ひ更に一格をなす殊に人物花卉に長ず探幽、尙信、安信の三人幼なるとき輿以己れの家に養ひ意を盡して畫法を授く後三人各々畫事に達して世の稱譽を得たるもの實に輿以の力多きに居る故を以て三子狩野氏を贈りて其功勞に報ゆ延寶年中歿す **輿碩**〔畫〕狩野氏、輿以の門人にして書を能くす **輿甫**〔畫〕狩野氏、彌右衛門と稱す輿以の弟、紀州侯に仕ふ寛文年中 **輿伯**〔畫〕狩野氏、輿以の門人也 **輿也**〔畫〕狩野氏、初め理左衛門と稱し後ち刑部と改む伯甫又た輿屋と號す輿以の子なり書を父に學び法橋となる後ち水戶侯に仕ふ元祿年中の人 **輿益**〔畫〕狩野氏、通稱は彌兵次、後ち彌左衛門と改む宗仙政信の子なり書法を父に學びて能くす寶曆年中の人 **輿儔** 釋心越の名 **輿義**〔畫〕近江三井寺の住僧にして頗る書名あり其の門人生光鷄を閑院の障子に書く生鷄來りて之れを蹴るといふ年代不詳 **輿伯**〔畫〕狩野氏、輿以の門に學ぶ、元祿頃 **輿國**〔畫〕村瀬氏、阿波の人、天保年中 **輿悅**〔畫〕偸閑齋の名 **輿有**〔畫〕狩野氏、名は輿有通稱は九兵衛、輿甫の子、書を父に學ぶ、元祿頃 **輿用**〔畫〕狩野氏、通稱は理左衛門、輿之の子、寶曆頃 **輿之**〔畫〕狩野氏、通稱は助左衛門、宗仙政信の二子也書を父に學ぶ享保頃

閲苑〔畫〕林氏、名は新、字は日新、通稱秋藏閬花と號す大阪の人、資性英敏夙に明人の書法を慕び和泉の豪族某の許に至り家に藏する明書を摹し大に得る所あり美人書の如き筆法纖勁着色鮮明略仇英に似又水墨人物の如きは剛勁を尙びて張平山に似たり齡未だ四十に至らずして歿す

慰俊【畫】狩野元信に畫を學びて人物花鳥を能くす

遯齋【畫】井戸弘梁、字は九如、遯齋、又廣川と號す幕府に仕へて扈從番となる淸人沈詮に設色の花鳥畫法を受け晩年輕墨淺彩を用ゐ山水の畫太だ風韻あり畫を請ふもの常に絶えずといへども名流韻士にあらざれば敢て其請を容れず故に其聲價遠近に鳴る享和二年七月二十三日歿す年五十九

墨澤【畫】雪舟の畫法に法りて束帶天神の畫像を畫くに妙なり

墨[illegible]【畫】駒澤氏、右山と號す周山に就いて畫法を學ぶ天明六年八月二十日寂す

墨齋【畫】名は紹等字は沒倫墨齋と號す又止瓅、自樵、靑松江、月婿、拾墮、禿樵黒隱漢等の別號あり大德寺一休和尚の高弟にして蛇足に畫を學びて師の一休に相伯仲す明應五年五月十六日寂す

墨心【畫】雪舟の畫法を學びて能くす

墨徵【畫】脇坂徵、字は元明、通稱文吉、湖山と號す、南畫を能くす京師の人

墨仙【畫】八木氏、嘉永年中

墨仙【畫】名古屋の人、葛飾北齋の門人也文政年中

墨湖【畫】齋藤氏、出羽の人、天保年中

墨堂【畫】小栗氏、通稱は仁右衞門、遠州の人天保年中

駕龍【書畫】大塚里譽、字は駕龍、江戸の人、書畫を能くす、天保年中の人、横井天翁の室なり

儀陳【畫】橋井義陳、字は古隆、葛山と號す花鳥を能くす文化頃の人

醉月【畫】大西氏、京師の人、畫を玉蟾に學びて山水人物を善くす又元明の古跡を模して頗る風致あり安永年中

醉雪【畫】名賀谷氏、通稱は文七、大西醉月の門人なり文政年中

醉晉齋 韓大年の號

遮莫【畫】月船と號す、畫を周文に學びて能くす人物花鳥山水を畫く又た其畫風眞相に似たる所あり遺墨世に少なからず

蓬平【畫】信濃の人、大雅に學んで山水を能くせり

蔡徵【畫】紀氏、紀伊の人、介石に學びて山水を作る諸書蔡徵に作るは誤り

適園【書】香山氏、名は彰、字は吉甫、大學と稱す京都の儒者なり村瀨栲亭の門人書を能くす寛政七年七月十八日歿す年四十七

適處【書】正垣氏、因幡の產、安政年中の人

適山【畫】熊坂氏、奥州伊達郡の人、元明の古法を探ぐりて終に一家を成す最も山水に長ず天保年中

適圃【畫】佐藤氏、岩代若松の人、南宗派の畫人にして世に名あり天保三年生る

適齋 田中柳所の號

樂山堂【畫】築山忠右衞門と稱す伊賀上野の人なり、畫風一家を成して山水を善くし世に

賞せらる嘗て芥子園書傳を飜刻して世に公にす

樂醉【畫】仲原氏、備前の人、狩野派の書家なり嘉永年中

樂只齋 高嵩谷の別號

樂山【畫】吉城氏、通稱藏人、安政年中

樂翁 松平定信の號

緱山【畫】野々山氏、名は正禎、字は子祥、通稱は彌兵衛、江戸に住す書を狩野美信に學び法眼に叙す緱山面に痘痕あり狀貌太た醜なり人呼で蠖緱山といふ又點茶を止々庵、默齋に學ぶ弘化四年十二月十八日歿す年六十八

撝謙【書】中野繼善、字は完翁、通稱善助、撝謙は其號、長崎の人、林道榮に學び十二三歲にして書を能くし尤も草隷に工なり時人稱して神童といふ弱冠江戸に來り廣く諸名士と交りて益々習學す遂に帷を下して敎授す後關宿侯に仕へて文學となる享保五年十月二十三日歿す年五十四

稻嶺【畫】士方廣邦、稻嶺と號す因幡侯の畫員なり宋紫石を師として畫法を修め技大に進む設邑の花鳥に巧みなり

諸垂【畫】大鏡に樂府の屛風を書くこと見えたり然れども大鏡には假名を以て其名を記せり故に其正字は斯くの如きか或は師足なりや後考を待つ

諸葛監 淸水靜齋の別號

諸

元【畫】姓氏不詳、左兵衛佐に任せらる書に名あり寛德年中

蓼村【書】椿氏、書家なり名は眞和、字は荷齋、通稱亮左衛門、江戸の人

○園 矢野常方の號

層城【書】富士谷氏、名は成章、字は仲達、專右衛門と稱す本姓は皆川、淇園の弟なり故ありて他姓を冐す養父の號を繼で層城と號す後ち居所の名を取りて北邊といふ三歲にして書を能くし七歲にして詩を能くす長ずるに及んで學經史に涉る兼ねて本邦の學を修む國史より已下諸令式等の書及び名人家乘遺集に至るまで遍ねく究めざるなし又和歌を苦攻し幼より死に至るまで幾千萬首たるを知らず一日兄淇園及び其友淸田儋叟等と家に會して百題を出し午時より子刻に至るを期として各々五律を賦するに淇園先づ成り儋叟之に次ぐ獨り層城遲る然るに終に其の出だす所を見れば百題に各々和歌一首を副へたり是に於てか諸子大に驚き座を叩て賞賛す其の爲す所多く斯の如し業を受くるもの亦四方に遍ねし又た言語音便の說に精し嘗て釋詁を爲りて其徒に口授す又た揷頭抄及び脚結抄あり世に行はる其他撰著せんと欲して未だ稿を脫せざる者無慮數百種柳川侯に游事す安永八年十月二日歿す年四十二

養朴【畫】奧州の人、事歷詳ならず正保頃

養拙【畫】狩野氏、元信の養子、父の誰た

るを詳にせず山水人物花鳥に巧也筆力稍鈍きが如しと雖も亦庸手に非ず **養員**【書】長谷川氏、書法を狩野常信に學ぶ筆意相似たり **養拙**【書】寺井子共、京師の人、志頭磨の門に入りて書法を學び後ち一家の風をなす世に養拙流と稱す當時招牌等を書くに皆此流を用ゐたり名聲喧傳來り學ぶもの多し正德元年七月二十五日歿す年七十二 **養意**【書】笹山氏、狩野常信に學びて書を能くす **養竹**【書】神山氏、狩野常信に學ぶ人物花鳥等に善し **養仙**【書】山本氏、狩野常信に書法を學びて能くす **養鐵**【書】荒井氏、狩野常信に書を學びて能くす工なり **養元**【書】木村氏、書法を狩野常信に學びて能くす **養雪**【書】荒井氏、寒雪の男なり書を父に學ぶ **養琢**【書】鶴澤氏、書法を狩野常信に學び能く其法を得たり **養和**【書】片山氏、狩野常信に就いて書法を修む **養溪**【書】竹澤惟房、江戸の書家にして文化五年正月二十一日歿す **養月齋**【書】畵人なり專ら祥啓を宗としまた兼ねて宗堪の風格を學べり **養朴** 狩野常信の號 **養圓**【書】有田氏、名は養道、狩野勝川の門人なり嘉永年中 **養川** 狩野惟信の號 **養信** 狩野晴川の名 **養道** 養圓の名 **養長**【書】狩野氏、肥後の人、勝川に學ぶ嘉永年中 **養齋**【書】寒川氏、江戸の人、勝川に學ぶ天保年中 **養淸**【書】林氏、狩野常信の門人元祿年中 **養竹山人** 木下逸雲の別號

寫樂【書】齋藤氏、東洲齋と號す、俗稱は十郎兵衞阿州侯の能役者なり、江戸八丁堀に住し俳優の似顏を書くを以て業とす而して其似顏畵は皆半身のものにして周圍に雲母を摺り込みたり時人以て肖像眞に過ぎたりとなし行はれず幾ばくもなくして廢止す技敢て妙と稱すべからざれども明治に至り歐洲人これを珍賞し其價甚た貴し **寫山樓** 谷文晁の別號 **寫照** 原在明の別號

慧門【書】名は如沛、字は慧門、黄檗山の僧たり來舶の人 **慧極**【書】名は道明、字は慧極黄檗山の僧たり來舶の人木菴の弟子なり河内法雲寺開山 **慧龐**【書】名は德鼎、初め周文に學ぶ筆意稍似て粗筆なり後ち牧溪玉磵を追慕す殊に人物を書くに長せり **慧源**【書】名は關山、信濃の人、妙心寺の開祖なり延文五年十二月寂す年八十四

慶耀【書】大和の人、淨辨律師の男なり幼時園城寺の慶暹法師に從ひて薙髮し勤學多年遂に高德となる筆札を善くす後ち宋に入り梵字の曼陀羅を寫す三藏法師之を見て大に歎賞せりと指書も又た其の能くするところ宋僧大に之れを珍重すと云ふ和歌を善くし父の意を繼ぎて出藍の譽れあり **慶舜**【書】芝氏、佛畵師なり世に芝法眼と稱す南都に住し春日の畵所となる佛畵多し文明年中の人なり **慶**

竹【畫】永井氏、狩野常信に學びて畫を能くす

慶山【畫】大原氏、京師の人、雪舟の畫法を學びて之を能くし後ち別に一格を出して人物花鳥を能くす嘗て明人傳ふる所の十八描法に基き自ら一書を爲くりて之を學者に傳ふ文化年中の人

慶恩【畫】住吉氏、姓は藤原、春日隆親の二子にして光長の弟なり播磨住吉の里に住し其繪所たり依て氏とす畫を以て法眼に叙せらる

慶羽【畫】栗田口氏、隆光の後裔なり其詳を知らず

慶忍【畫】住吉氏、文永頃の人、或は云ふ住吉慶恩の子なりと

慶舟 板谷廣當の號

慶至 住吉廣安の號

細桃【畫】名は如雲、江戸の人、山本北山の配なり畫を善くし四君子を寫すに妙を得

潮音【畫】名は道海、字は潮音、黄檗山の僧たり

潮湖 英一蝶の別號

潮音齋 狩野素川の別號

潮湖【畫】葉山氏、通稱二介、肥前龍造寺の臣なり、雪舟の畫法を學びて能くす嘗て加藤清正に招かる熊本城の屏壁に畫くといふ慶長年中

實如【畫】名は光兼、本願寺九世の僧なり僧都に任じ恩報院と號す蓮如上人の嗣、畫くところの佛祖の像多くは諸處の末寺にあり大永五年二月歿す年六十八

實傳【畫】名は宗眞、實傳は其字、大德寺五十六世の住職なり畫を好みて山水人物花鳥を能くす永正四年四月八日寂す年七十四

實惠【畫】佐伯氏、讃岐の人檜尾僧都と稱す佛像を畫けり承和十四年十一月十一日寂す年六十二

實堂【畫】名は宗傳、如倚子と號す大德二百二世延寶四年九月寂す年六十四法雄眞德禪師と諡す

實晴【畫】西園寺實晴は內大臣公益の男、從一位左大臣に陞る能く佛祖の圖を畫けり寛文十三年正月十日薨ず年七十四

實資女【畫】藤原氏、大政大臣實資の女、朱雀天皇の女御たり畫を能くす天曆元年薨ず年僅に十五

實如【畫】本願寺第九世、畫く所の佛祖像多く末流諸寺に遺存す大永五年二月寂す年六十八

隣松【畫】加藤茂銀、隣松と號す狩野榮川に從ひて學び名當時に振ふ時に支鹿、圓乘と專門家外の三巨手と稱す貴客の招致甚た繁く賜賚甚た多し

隣樵庵 英一蝶の別號

○堂【畫】高田定、字は子保、通稱幸十郎、竹泉居と號す浪花の人、山水花鳥に巧なり文政年間の人

○香【畫】菊地氏、橋本雪蕉の門人、安政年中

樗墩 林東舟の

篆癖【畫】島氏、名は駿、字は千里、篆書に工みに又た篆刻を能くせり文化二年八月七日歿す年六十二

徹山【畫】森守眞、字は子立、徹山と號す祖仙の義子なり應擧に學びて人物花鳥を能くす天保十

二年歿す

徹【書】名は徹、字は巴陵、釋氏なり

窮樂【書画】龜田氏、名は曳尾、無悶子と稱す通稱久兵衛、京師の人、書體一家をなす兼ねて書を能くす風格飄遊にして氣韻あり寶曆八年二月九日歿す

德應【書】木村氏、法橋に叙す京都錦小路室町に住し佛畫師なり殊に諸宗の祖像を摸寫するに妙を得たり京師諸宗に多く所藏せり貞享年間の人

德門【書】名は普叔長衆院の住持たり

德濟 釋鐵舟の名

德俊【書画】名は祖溪、春育の法嗣となり建仁寺に住す畫を能くす永享頃

德基 蔀關月の名

德保 黒川龜玉の字

德信 狩野休山の名

履軒【書】中井氏、名は積德、字は處叔、德二と稱す、履軒は其名、甃菴の第二子、竹山の弟なり竹山と共に宋學を五井蘭洲に學ぶ然れども好みて群言を折衷し意に合はざる所あれば名賢鉅儒と雖も辨駁避けず故に經義に於て別に一格を構へ必しも宋學を墨守せず又た文章圓活にして甚だ奇致あり近代の巨匠と稱せらる兼て草隸を善くす然れども容易に書せず人となり姿貌魁秀器宇曠達一世を睥睨す然れども平生妄りに戸外に出でず自から幽人と號し吃々經旨を考索して手に卷を釋てず始て七經雕題略を著はして經旨を發明す晩に七經逢原を著はして益々精緻を致す竹山の死後每月數回尚書を懷德書院に講して弟子に聽かしむ文化十四年二月十五日歿す年八十六

篁【書画】小野氏、參議岑守の子なり、弘仁中岑守陸奧守となる篁父の赴任に隨ひ日に馳馬に慣る後京師に還りて復た學業を事とせず嵯峨帝聞て歎じて曰く斯人の子にして猶ほ弓馬の士となる乎と是に由りて慚悔し始めて學に志す十三年文章生の試を奉じて及第す天長中巡察彈正少忠大內記式部少丞を歷從五位下に進み太宰少貳に任ぜらる東宮學士となり彈正少弼に拜せられ清原夏野等と令義解を撰す承和の初め美作介に任せられ後ち刑部大輔より陸奧守に任ぜらる又入りて東宮學士兼式部少輔となり從四位下に叙し藏人に進む十四年參議兼彈正大弼に任ぜらる嘉祥の初め左大辨兼信濃守に轉じ班山因使長官兼勘解由長官となり歲餘にして從四位上に進み病を以て家に歸る文德帝の位に即くに及び正四位下に叙し近江守に任ず明年病癒えて復た左大辨となる未だ幾ばくならずして病動て朝せず帝甚た之を愍み屢々使を遣はしてこれを視しめ錢穀を賜ひ家に就て從三位を授く病篤きに及び諸子に命じて曰く氣絕すれば則ち殮し人をして知らしむる勿れと卒する時年五十一仁壽二年十二月廿三日なり世に野相公と稱す篁母に事へて至孝家素と清貧俸入は皆な親友に施す文章は當時に冠絕し草隸は二王の迹あり後世之に摸揩す詩は往々樂天と句格相似たる者あり世之を以て之を重んず又書を善くして巧妙神に臻る特に佛書に長ず然れども人となり不羈にして直言を好み當世の爲めに容

れられず其の才を忌む者は呼びて野狂となす篁狂音相通ずるを以てなり

篁齋〔書〕皆川允、字は君獻、篁齋と號す淇園の男父に就いて學び家業を繼述して先旨を耻しめず文政二年七月十八日歿す年五十八

篁洲〔書畫〕榊原氏、名は玄輔、字は希翊、篁洲は其號、小太郎と稱す後ち玄輔を以て通稱とす和泉の人、本と下山氏、幼にして孤なり外父の爲めに養はる因て其氏を冐す少うして奇氣あり平安に遊び仕を縉紳の家に求む更に遇ふ所なし因て木下順庵に從て學ぶ其家に寓する三年にして鄕に歸り門を閉ぢ書を讀み將に文學を以て一世に振揚せんとし專ら志を經義に留む後ち外父に從つて江戸に來り講說して業とす是より先き順庵幕府に擢んでられて江戸に在り因て再び其門に遊ぶ學術大に進む順庵の薦を以て禍を紀藩に釋き儒官となる篁洲傍ら星曆、鎗術、射御、醫卜より茶香書畫、圍碁、猿樂の類に至るまで該通せざるなし平生雨森芳洲、新井白石、室鳩巢と交り最も善し順庵此四人を稱して我門の手石とす寶水三年正月歿す年九十一

篁村〔書〕島田重禮、篁村と號す甞て昌平黌助敎たり維新の後ち東京帝國大學文科大學敎授となり正四位に進み文學博士の學位を受く明治三十年歿す年六十一

篁石〔書畫〕佐々布氏、肥後の人、嘉永年中

節庵〔書〕宮原氏、名は龍、字は士淵、謙藏と稱す易安、又た潛叟と號す賴山陽晩年の門人なり書を能くす明治十八年十月六日歿す年八十

節齋　森田氏、名は益、字は謙藏、節齋と號す大和五條の人、壯歲にして賴山陽に師事し後ち三備の間を漫遊す山陽逝後又た京師に歸りて門戸を張る能文を以て名聲遠邇に噪ぐ年五十にして始めて妻を娶る無該女史と稱す女子は實に其門人なり痘痕滿面醜惡比なし而かも博學にして和歌俳諧發句を巧みにし且つ詩を能くす當時稱して海內第一の女學士と曰ふ德川氏の末姬路侯に召されしかど官を喜ばずして去る後ち備中倉子城に往きて徒に敎授す節齋門下に奇士多し松田松陰其魁たり明治元年歿す年五十八

蔣塘〔書〕大竹氏、名は培、字は漣夫、心靜堂と號す又た小舫と曰ふ通稱斧八、菱湖の門人なり安政五年三月十六日歿す年五十八

蔣潭〔書畫〕淺野氏、名は長祚、字は胤卿、一に池香といふ蔣潭は其號、又梅堂と號す赤穗侯の支派にして三千五百石を領し德川幕府麾下の士なり從五位中務少輔に敍任す詩文を好み書畫を愛す書は栗本翠庵に學び後ち椿椿山を慕ひ技大に進む明治十三年二月十七日歿す時に年六十五

潭香〔書〕石井氏、石は徽言、字は士厲、唯一と稱す潭香は其號、後に移韓と改む、江戸の人、二歲にして父母に從ひて蝦夷に從る文政四年歲十六江戸に還る初め書を市川朱庵に學ぶ天性筆札に長じ將に

之を以て世に立たんとす尤も清人の書法を好み其口訣を得んと欲し乃ち母を尾藤水竹に託して崎陽に遊び清容江芸閣に就きて悉く其法を受け歲餘東に歸る書未だ售れず會々連年凶饑頗る生計に苦しむ時に人の松前藩に筮仕するを勸むるものあり潭香喜びて仕へて日に賤役に服して自若たり既にして士大夫に交遊し藩人始めて其の常人に非ざるを知る相議して曰く彼れは名士なり之を卒伍に置くは藩の辱也と躋せて徒士と爲す時に藩主年僅に十餘潭香をして傅たらしむ且つ書を敎ふ潭香甚だ親昵を得侯逝きて子なし軒公立つ是に於て潭香進んで士班に列す然れども薄俸多累後遂に債を市人に負ふて償ふ能はず債主將に官に訴へんとす公之を聞き有司をして藩士の外債を負ふものを檢し金を內庫に取り悉く之を償はしむ事蓋し潭香を恤むに出づ後ち又俸を增す最後復た役するに吏務を以てせず優遇想ふべし潭香人と爲り廉直寡慾未だ名利に汲々たらず唯性太た酒を嗜み財を視ること土泥の如し硏に臨む每に必ず盥ひ且薰し而後筆を執る文具淸潔にして一物も人の手に觸るれば拭はされは措かず平生傘を支ふる未だ嘗て右手を用ひず行くときは則右手を將て懷中に架す蓋運筆に害あるを以て也晚年從學愈々多く四方の筆を索むるもの給するに暇あらず明治二年徵命を蒙りて大政官の大錄となる翌年病で歿す年六十五

魯齋【書】赤松氏、名は通綸、字大經、通稱五郎八赤穗の人、滄洲の第二子なり業を父に受く出で丶藩の大夫河野氏を嗣ぐ詩文に長じ兵法に通じ傍ら書を能くす天明六年五月父に先ちて歿す年二十三

魯山【書畫】名は播、字は魯山、山舟又竹香居と號す詩書をよくす

魯仙【書畫】平尾氏、名は亮致、初三郎と稱す陸奥弘前の商人、幼より慧敏衆に優る書を毛內雲林に俳歌を內海草坡に國典を平田鐵胤に學ぶ其の書を學ぶや家貧にして炭火を供する能はず乃ち手を以て冷水に投じ稍久しうして熱の發するを待ち筆を執りて練磨する事數時其の讀書するに燈油なきを以て火を線香に點じ之れを以て書を照し琅々誦するもの深更に及ぶも倦む事なし壯年に及んで書法大に進み常に好んで山中を跋涉し實物に付きて花鳥泉石を寫すを以て娛とす明治九年車駕東巡の擧あるを聞き歡抃措く能はず齋戒沐浴して瀑布の圖三帖を寫し之を行宮に獻じ幸に乙夜の御覽に供すといふ戊辰の變藩內勤王佐幕の論囂々一定せず時に魯仙大に王事に勤むべきを論じて憚る所なし魯仙文學に長じ深く本居平田の學風を慕ひ身を委して之を硏究す幽府新論、鬼神論、谷の響、說敎採要等を著はして其の意を祖述す明治十三年二月十七日歿す年七十三

熾仁【書】熾仁親王は有栖川韶仁親王の子なり文化九年正月生る文政五年光格天皇の猶子となり六年親王となる明治十九年一月二十四日大勳位に叙せられ是の日薨ず世に有栖川家と曰ふ世々書法を傳へしが親王に至つて最も其の妙を極む

盤珪【書】名は永琢、字は盤珪、播州網干の人道德の名世に高く又た書を善くせり

盤溪【書】大槻氏、名は清崇、字は士廣、通稱は平次、盤溪は其號、仙臺藩の人なり盤水の第二子、盤星の弟、幼にして穎敏業を家庭に受く長するに及んで昌平黌に學び後東海畿內及び長崎に歷遊す天保三年藩侯擢んじて儒員に列し季子を以て別に家を起さしむ頗る異數となす時に年三十二江戶に住して侍講となる盤溪素と犖犖俊邁にして毫も腐儒の態なし嘉永年間夙に西洋砲術を講じて其蘊奧を窮む是に於て闔藩之を師とす嘉永癸丑米國使節伯理始めて至る盤溪建議して開港を主張す是時議者多く攘夷を主として朝野囂々人或は盤溪の爲めに之れを危む盤溪夷然たり文久二年仙臺に移りて養賢堂學頭と爲り尋で致仕す明治戊辰の亂に奧羽諸藩合從して兵を擧ぐ仙臺之れが盟主と爲り盤溪を起して軍國文書の事を司らしむ事敗るゝに及んで此を以て獄に下され餓にして赦さる時に年七十明治四年復た江戶に來往し文酒談讌優遊自適す世騷壇の老將を以て之れを目す明治十一年六月十三日病を以て家に終る時に年七十八

盤谷【書】古曳愿と稱す信濃の人、安政年中

毅堂【書】鷲津宣光、字は重光、一字は毅堂、九藏と稱す尾張丹羽郡丹羽邑の人、伊勢の猪飼敬所に學び又江戶に出でゝ昌平黌に入る尾張藩に仕へて侍讀となり又其督學となりて學政を董釐す維新の後權辨事に拜し大學少亟宣敎判官等を歷て司法權大書記官に任じ東京學士會員に列す從五位勳五等に叙せらる明治十五年卒す年五十八

蓮如【書】名は兼壽、本願寺八世の僧にして小字布袋丸、一名幸若丸、書を能くす多くは佛書なり明應八年三月二十五日寂す年八十五

蓮行【書】貴族なり筆法宅磨に出で稍々優柔なり

蓮海坊【書】名は心敬、十住心院權大僧都と稱し蓮海坊と號す又心惠の號あり文明中に寂す勅筆流の書を善くし又連歌に巧なり

蓮仙【書】戶川氏、名は安清、字は興蓬庵又蓮仙と號す、初め雄三郎後ち播磨守と稱す德川幕府に仕へて目付勘定奉行等の職を奉し從五位下に叙す文久元年命を奉じて皇妹を京に迎ふ時に右兵衞督持明院基政を訪ひ之に就きて書法の奧秘を受く資性文事を好み最も筆翰に工み也其古隷體の如きは遒勁奇健世の嘆賞する所となる嘗て論語一部を屛風に書して將軍家茂に獻ず家茂之を昌平學舍に藏めしむ慶應四年三月四日歿す年八十二

蓮月【書】連月尼は小名は誠、父は太田垣傳右衞門、光吉といふ京都智恩院の廣間侍なり近江國彥根の人近藤某の子を養ひて誠にめあはせ男女四人を生む皆早世し夫もまた歿す誠剃髮して尼となり連月と號す時に年二十の頃なり千種有功の門に入りて和歌を學ぶ四十歲の頃父傳右衞門死せしかば手づから陶器を製し之に自詠の和歌を描き以て之を

販ぐ書風幽雅愛すべし四方傳稱詠歌を乞ふの繁なるを厭ひて家居を定めず遂に西加茂なる神光院の茶所に住めり故に都人呼で屋越の連月といへり自詠の歌に「宿貸さぬ人のつらさを情にて朧月夜の花の下臥」明治八年十二月十日歿す年八十五

蓮齋【畫】大沼氏、名は譲、字は良卿蓮齋は其の號、別に聽松居士、蓼舟、鐵娑の號あり會津藩士幼より書を好み明治十一年清國に航し研究三年歸朝後技益々進み名大に揚る

廣周【畫】土佐行秀の次子（一説に元重の子に作る）畫所預となり從五位下土佐守に任せられ彈正忠を兼ぬ薙髮して經增といふ畫を父に學びて家法を善くし遂に妙手に至る應仁中の人

廣成【畫】紀廣成、字は菩提、東暉と號す京師の人、畫を呉春に學びて後ち一家の風をなす最も佛畫に長ず天保十三年八月二十三日歿す

廣重【畫】歌川氏、一立齋と號す安藤氏幼名德太郎、後ちに十右衛門、一に十兵衛、又德兵衛と改む寛政八年八代州河岸の火消屋敷に生る其父は定火消の同心なり德太郎幼より師なくして善く畫く長して浮世畫に志し一世歌川豐國の門に入らんとす門人多くして入ること能はず去りて歌川豐廣の門に入らんとす亦入る能はず偶貸本屋其の周旋をもて强て豐廣の門に入るを得たり文化九年九月師名廣字を讓られ歌川廣重と稱す時に年十七文政三年東里山人作音曲情の糸道三冊を畫くこれ廣重が草艸紙の初筆なり同十二年豐廣歿す廣重これより獨立して一機軸を出さんとす天保の初め幕府の内命を奉じ京師に至り八朔御馬進献の式を拜觀し細に其圖を畫きて上る其の東海道を往來するや行々山水の勝景を探り驛々の景況を察し深く感する所あり其より專ら山水を畫くの志を起せりかの有名なる五十三驛の錦畫は此の時既に腹稿成れりといふ後ち數々諸州の山水を探討す廣重人となり謹愼にして俠氣あり業餘狂歌を好み狂名を東海堂歌重といふこゝを以て當時狂歌摺物の畫多くは其筆になれり廣重の所長は浮世繪山水にして其の世に行はれたるは東海道五十三次の錦畫あり圖を換へ出版せしこと前後數回なり中に就き横畫最も精妙なり之に次ぎては木曾街道九十九次諸國名所江戸名所百景富士三十六景等なり三十六景廣重が絶筆なり出版を見ずして歿せり其の山水畫法は一家の畫風にして古人の未だ曾つて畫かざる所なり蓋し豐春豐廣の浮き畫を本とし四其及び南宋の畫法に據りたるものならん其の彩色は自から發明する所多きが如し其他風俗美人畫鳥羽繪狂歌發句の摺物讀本草双紙類を畫きたれど其行はれしこと錦畫山水に及はさるなり安政五年コロリに罹り九月六日歿す年六十二淺草新寺町の淨土宗東岳寺に葬る法名顯巧院德翁玄齋居士辭世「東路へ筆をのこしてたびの空にしの御國の名ところを見ん」と

廣重〔二世〕【畫】歌川氏、一世廣重の門人にして重宣と稱せしが廣重の歿するや一女に配して師家を繼ぎ二世廣重と稱す初め立祥といひ喜齋と號す山水花鳥に長じ善く一世の筆意を守りて失はず其落款も亦殆んど一世と異なることなし故に人皆一世二世を辨するに苦しむ後に故あり

家を出て横濱に赴き再び重宣と號し繪畫を業とせしが幾ばくならずして病歿せり其の月日詳ならず

廣重〔三世〕【畫】歌川氏、一世廣重の門人にして重政と稱す二世廣重の家をつるや重政代て家を繼ぎ二世廣重と稱す實は三世なり專ら錦畫山水を畫かく二世に及ばざること遠し明治二十七年三月二十一日歿す年五十三辭世「うか〱と五十三とせの春を迎へしことの面ぶせなれば滊車よりも早い道中すこ六は目の前を飛ぶ五十三次」

廣通【畫】住吉廣通は土佐光吉の二子、幼名を光陳、後ち忠俊と改む德川秀忠の寵遇を受け江戸に住む嘗て内勅を奉じて住吉慶恩の家を興し内記と稱す後薙髮して如慶と號し法眼に敘せらる住吉家中興の祖なり寛文十年六月二日歿す年七十二

廣澄【畫】住吉廣澄、初名は廣純、内記と稱す廣道の子、薙髮して具慶と稱す父に就て畫を學び家法を得たり人物鳥獸に至つては父に勝る所あり寛永二年四月四日歿す年七十五

廣保【畫】住吉廣保、初め名は廣芳内記又た内藏允と改む廣澄の子なり晩に薙髮して至石と稱す畫風父に似たり寛延三年歿す年八十五

廣守【畫】吉住廣守、廣保の二男、家を繼ぎて内記と稱す德川幕府の繪所たり晩年薙髮して慶至と號す法眼に敘せらる安永六年十月歿す年七十三

廣行【畫】住吉廣行、通稱内記、景金園と號す板谷廣當の子、廣守の門人、廣守嗣なし因て出でゝ師家を繼ぐ又古畫の鑑定を能くす德川幕府の繪所たり文化八年某月日歿す年五十七

廣尙【畫】住吉廣尙は廣行の子、頑中と號す通稱を内記といふ畫名あり又古畫の鑑定を能くす文政十一年歿す年四十八

廣當【畫】板谷廣當、畫風土佐より出でゝ一轉し大に和風を唱へて當時を動せり住吉家に次で柳營の師となる寛政九年歿す

廣長【畫】板谷廣當の子、桂意と號す江戸の人、畫を能くし殊に人物に巧み也

廣年【畫】百々廣年、菱花と號す京師の人にして畫を能くす

廣政【畫】山名氏、通稱大助、初の名は行雅、後ち廣政に改む畫を能くす安政四年歿す

廣夏【畫】住吉廣夏は廣通の二子、鶴洲と號す、父に從つて學ぶ夙に僧となりて諸國を游歷し讃州高松に至り一寺を開創す之を祥福寺といふ享保十八年歿す年九十二

廣海【畫】大江氏、越後の人、江戸に出でて春海の門に入り專ら和歌を學ぶ後ち平安に至りて歌道を唱ふ書を能くす天保五年六月二十三日病みて歿す

廣勝【畫】加藤氏、畫家なり住吉廣通の門人にして延寶年間の頃の人

廣武【畫】梅澤氏、字は夢龍、文川と號す播州姫路の人文化頃の畫工

廣澤【畫】細井氏、名は智愼、字は公謹、廣澤は其の號、又た思貽齋、蕉林庵、玉川、奇勝堂等の號あり次郎太郎と稱す京都嵯峨の人、其の先は源賴朝の庶流八田知家より出づ知家は武巧を以て建久朝の武者所となる故に廣澤所用の印章に建久朝武者所の裔といふものあり父玄佐遠州掛川侯に仕へて廣澤を其地に生む故に或は亦廣澤を掛川の人とす後ち侯封を播州

明石に移す玄佐之に從ふ廣澤年十一江戸に出でゝ儒を坂井漸軒に學ぶ又文衡山の書法を北島雪山に受く長ずるに及びて儒を以て河越侯柳澤吉保に事へ大に擢用せらる後ち讒に遭ひ致仕して青山に隱居す是より益々刻苦書法を修め文衡山の法を唱ふ列侯往々延致し大に貴重す後幕府の登用に遭ふ程朱の學を修め又陽明の說を悅び百家に通貫し淹雅博聞傍ら射騎劍槍の藝より天文算數の法に至るまで兼綜せざるなし兼て圖歌詠歌に及べり人許すに國器を以てす而して咸な書名に掩はる識者之を惜む享保二十年十二月二十三日歿す或は云ふ七十九と明治三十年四月從四位を贈らる

廣業【畫】寺崎氏、宗山と號す羽後秋田の人、初め小室秀俊に就きて狩野派の畫法を學び後東京に上り平福穗庵の門に入りて圓山派の畫法を修む

廣定 住吉弘貫の初名

廣隆【畫】板谷氏、廣長の子、薙髮して桂意と號し法眼に敘せらる文政年中

廣川【畫】渡邊氏、駿州の人なり天明年中

廣川 董九如の號

廣恒【畫】內田氏、住吉廣行の門人、文政年中

廣恒【畫】歌川豐廣の門人、文久年中

廣政【畫】歌川豐廣の門人、文久年中

廣實【畫】遠藤氏、通稱伴助、住吉廣行の門人、文政年中の畫家

廣通母【畫】久我大納言廣通の母は好みて畫を能くし筆致淸麗なり慶長年中の人

廣昌【畫】歌川豐廣の門人、安政年中

廣近【畫】安藤氏、江戸の人、畫を歌川豐廣に學びて能くす安政年中

廣賢【畫】住吉氏、內記と稱す弘貫の子、畫を文に學ぶ明治十年六五月歿す年四十九

廣信【畫】狩野氏、成信の二男圓俊と號す元祿年中夭す

廣成 山脇東暉の名

廣胖窩 藤原惺窩の別號

範俊【畫】興福寺の權別當にして畫に巧みなり康和年中

範俊【畫】世に小野僧正と稱す密宗小野派の一員なり又た鳥羽僧正と稱す圖書を能くするを以て覺融と誤るものあり隨身門跡第十世保安二年閏五月四日寂す年六十九

輝興【畫】小澤氏、通稱は豐太郎、阿波の人、天保年中

輝人【畫】歌川國信の門人、安政年中

輝雄 曾我蕭白の一名

輝一 曾我蕭白の一名

輝鷹 曾我蕭白の一名

輝松 池田綾阿の名

輝久 寒川雲晁の名

磊々居士 釧雲泉の別號

痩梅 大窪詩佛の別號

痩庵 山本翠雲の字

駒嶺【畫】福澤氏、信濃の人、岡本豐彦に從つて畫を學ぶ天保年中

輞隱子 狩野之信の號

潤聲 尾形光淋の別號

播磨法橋【書畫】名は實圖、法隆寺太子書傳を修補すといふ建武年中

嘯川【書畫】大岡氏、春朴の門人、書を以て法橋に叙せらたり天保六年十二月歿す年六十七

嘯甫【書畫】大岡氏、嘯川の子、書を父に學ぶ天保年中

嘯亭【書畫】釋鶴亭の門に學ぶ文政年中

嘯翁 服部天游の別號

磐梯【書】加須屋氏、磐梯は其號、別に時鳴と號す通稱は孝藏書を以て世に名あり天保年中の人

嘿軒【書】京都の人、和歌を能くして時に稱せらる蘆門四天王の一人なり文政元年十二月十日歿す年七十四

確堂【書畫】松平氏、作州津山の藩主なり國事を執る暇書畫を翫びて巧みなり明治二十四年三月歿す年七十餘

輪池【書】屋代氏、名は弘賢、太郎と稱す初名は詮虎、詮賢、後ち弘賢と改む七十以後詮文と改む輪池は其號、江戸の人、父は五太夫佳房と云ふ世々幕府に仕ふ輪池和學を嗜む本と塙檢校の記室たり博識多聞檢校に類す後ち遂に一家を立つ文化中局を開きて古今要覽千卷を著はし僚吏書寫日夜筆を擱かず平生自から奉ずる儉素にして餘あれば則ち書を購ふ晩年に書庫三字を築く有つ所の典籍萬卷に踰ゆ考據を資くる者最とも多し又筆札を善くす專ら皇朝の上代を修し又自ら一家の風を成せり故に幕府の祐筆に擧られ祿を加へて百俵を賜ふ其の門に入りて敎を受け法を傳ふるもの殆と三千人に至る天保十二年五月十九日歿す年八十四

震菴【書】藪氏、名は弘篤、震菴は其字、後ち愼菴と改め久右衛門と稱す幼にして父を喪ひ年十五父の祿三百石を受け藩士より鐵砲隊長に進む少にして好みて書を讀み程朱の學を崇び文學要義を以て聞ゆ嘗て江都に來り物徂徠に從ひて文辭を問ふ然れども其學術に於ては心に之を疑ひ卒に從はず延享元年に歿す年五十七

寛祐【書】鈴木寛祐、字は仲舒、壽伯と號す浪花の人、儒家にして書に巧なり

寛齋【書】服部保庸、字は紹卿、寛齋と號す木下順庵の門人なり幕府に召されて侍講となる享保六年六月三日歿す年五十五

寛信法務【書畫】東寺の長者を兼務す繪畫に堪能にして碩德の名高し遺跡天滿宮の一幅は東寺に傳來す

寛哉【書畫】坂内氏、蒔繪の巧手なり柴田是眞の如き此の門下より出づ天保六年四月二十日歿す

寛齋【書】市河氏、名は世寧、字は子靜、一の字は嘉祥、寛齋は其號、又半江及ひ江湖詩老等の別號あり通稱小左衛門上毛甘樂郡の人、父好謙蘭堂と

號す書を好み業を細井廣澤に受く寛齋少うして學に志し笈を負ひて江都に遊ぶ林祭酒正良の門に入りて修學す業成るに及びて名聲藝苑に顯はる會々昌平黌の學員長闕く正良寛齋を擧げて之に補す居ること五年病を以て辭し去る寛政三年富山侯其の名を聞き辟して黌舍の敎授とす職に居ること二十餘年老を以て致仕す寛齋學博く才敏に最も詩に長ず淸麗奇峭兼ね有せざるはなし初め樊川を學び一變して香山再變して劍南終に又諸家を鎔淘して別に機軸を出だす後進の徒推して領袖とす其指畫を受けて能く家をなし世に名あるもの小島梅外柏如亭、大窪天氏、菊池無絃等の數人あり、又性山水を好む上毛は桑梓の地にして佳勝多きを以て屢々游渉探討して上毛志を編す晩に長崎に游ぶこと一年吳容と唱和して其の敬重を受く文政三年七月十日歿す年七十二私に諡して文安先生と云ふ

寛齋【畫】森氏、畫家なり、養父徹山に就いて畫法を學び四條風の畫に長ず京都の畫學校の敎授となる明治二十七年六月二日歿す年八十一

寛畝【畫】荒木氏、名は吉、達庵と號す天保二年生る繪所預狩野素川の門系荒木寛快の門に入り畫を學ぶ後ち其養子となる諸家の畫法に參し南北派を折衷し今派を起す帝室技藝員に列す

寛一【畫】荒木氏、名は繩、梅隱齋と號す文政十年生る南宋派を能くす

寛友【畫】荒木氏、名は鐸、寛一の後なり幼より畫を好み一家の風格を出す最も山水花鳥を善くす嘉永元年生

寛信 狩野融川の名

寛信【畫】狩野氏、倍之助と稱す休山是信の三子、安藝淺野侯に仕ふ年四十一にして歿す

寛耕齋 狩野古川の別號

寛齋【畫】江崎氏、江戸の人、文政年中

寛令【畫】小栗氏、江戸の人、文政年中

寛快【畫】荒木氏、彌次右衛門と稱す江戸の人畫を江崎寛齋に學て遂に一家の名手たり安政二年歿す年七十五

寛仙【畫】早瀬氏、名は宣孝、幼にして畫を好み細密なる地圖を作ることを自得せり後ち江崎寛齋の門に入り專ら心を芳鳥彩色に用ゐ遂に其妙を得たり海軍省に奉職して四等屬に在す常に四方に遊歷して山水社寺の寫眞を研究す明治二十一年十月上野榛名山に遊び遂に病を得て歿す年六十

寛空【畫】文屋氏、河内の人、僧となり神日の弟子となる又た寛平法皇の密灌を受く京都北山上品蓮臺寺に自畫の像あり天祿三年二月寂す年八十九

寛之【畫】狩野氏、寛信の女なり畫法を父に受け畫を以て名あり一生嫁せず明治十六年歿す年七十七

寛耀【畫】高雄山に居りて僧都に任ず最も繪圖を能くす氏名詳ならず元應年中

寛所【畫】德田氏、加賀の人、畫事を能くす明治十七年歿す年六十餘

寛柔【畫】渡邊氏、京都の人、文久年中

檉 林檉宇の名

賞雨 館柳灣の別號

潛叟 宮原節庵の別號　**潛窩** 古賀穀堂の別號

蝶洞 林羅山の別號

餘齋 上田秋成の號

儋叟 清田君錦の號

穀堂【書】古賀氏、名は燾、字は溥卿、幼名文太郎敬一、太郎右衛門、一左衛門、修理等と改め最後に藤馬と稱す穀堂は其號、又た清風堂琴鶴堂潛窩堂等の號あり幼にして聰穎業を父精里に受く精里藩より幕辟に就く穀堂年二十餘始て江戸に學び便ち父の家塾に棲す時に柴野栗山尾藤二州二博士及び阪の中井竹山藝の賴春水諸先輩は世推して老碩となす穀堂其間に周旋し深く稱許せらる又た奥羽越の諸州に遊びて才俊に酬應し才識益々著はる尋で藩に歸り教諭に任じ足輕隊長に進む時に館中人才盛夥一に穀堂の門に出でざるなし文化元年進物役兼教授となり尋で檢隊長に陞る十四年世子傳に轉じ江戸邸に住す時に邸に明善堂講武場を設け以て文武を督勵す俗吏屢々之を沮む穀堂力辨して廢するなきを得是に由て中外目を側て誹謗麕至す穀堂毅然として動かず二公の間を調護し卒に能く世子を翊成し其身を保つ先侯老を告げ世子立つに及で年寄相談役となり番頭に遷り年寄役に轉じ祿五百石を食む天保七年歿す年五十九

十六畫

澧水【書】增島信通、字は子篤、初め物徂徠の學に歸す然れども亦訓詁の廢すべからざるを知り常に十三經註疏を校正す史をよむに唯務めて大なるものを識り細事に屑々からず天文、曆法、音韻、算數より皇朝の舊典古言、古音に至るまで皆悉く之を討究す、寛政七年德川幕府の書物奉行となる能く其識に稱ひ前後襃賞を受くること四回文化九年歿す年七十子蘭園昌平黌の教官となる

融川【書】狩野寛信、閑川の男、法眼に敍せらる資性強硬苟も人に屈せず德川家齊のとき朝鮮人來朝す幕府乃ち畫院の名家に命じて屏風を畫かしめ以て來朝の使を授けて朝鮮王に贈らんとす融川亦之に預り近江八景の圖を屏風に畫き其遠景金砂を施し漸次濃より淡に及びて隈なし其の間樹屋隱顯遠近分つべし自ら謂へらく宜しきを得たりと一日諸有司列坐其落成の可否を檢す阿部豐後守金砂はなはだ薄しとなし之を咎む融川曰く遠景は之を薄くし近景は之を濃くし以て濃淡宜しきを得たり是れ臣が殊に意を加ふる所なりと豐後守聽かず漫りに陳辯するものとなし嚴に補繕を命ず融川勃然として聲を厲して曰く良工の手段俗眼の知り

得る所にあらずと豊後守憤怒面に顯る傍人皆汗を握る融川乃ち病と稱して下城す途に輿中に在りて屠腹して死す聞くもの悼惜せざるはなし時に文化十二年三月十九日年三十八

融思【書】石崎氏熊斐の門人安永年間

融泉【畫】野崎氏、小柴守直の門人、寶暦年中

賢信【畫】大夫阿闍梨と稱す、醍醐理性院の仕僧なり後ち上野阿闍梨賢心の嗣となり名を靜聖と改む大藏卿宗時の男正和二年正月理性院本堂燒失す本尊大元明王亦亡ぶ賢信齋戒沐浴し心を凝らして巨大の本尊二幅を畫く今の本尊即ち是れなり然に寺僧等誤り傳へて弘法大師の筆と稱す

賢眞【畫】慈雲房賢信は巨勢金岡の弟子、延喜年中の人

賢淨【畫】姓氏を詳にせず元祿の頃紀伊の國高野山の寺院に住す專ら佛畫を書く遺跡多からずと雖も筆力勁逸なり

賢初【畫】狩野元信の門に入りて學び畫を能くせり

賢物【畫】狩野元信の門人にして畫を善くし設色殊に巧みにして殆ど元信に似たり

賢慶【畫】法眼に叙せらる門人中に能畫の人多し

賢正【書】梵樣の墨筆を善くす其筆法凡ならず

賢信【畫】狩野氏、梅笑の男了承と號す、書を父に學ぶ寶曆年中

横川【書】名は景三、字は横川、相國寺の住持能書の名殊に高し

横塘【書】名は有則

泉州の人、書風一家をなせり

曇徵【畫】高麗の僧なり推古帝の十八年三月高麗國之を貢す沙門法定之れに衣食を給す曇徵外學に涉り五經に善く又伎藝あり始て碾磑紙墨を造り彩畫に工みなり

曇芳【畫】字は周應、天龍寺開山夢窓國師の弟子なり建長寺の住職たり牧溪の風を覺びて花鳥竹石を能くす

曇華一休和尚の別號

叡麓【書】猿山秀盈、字は季明、一の字は進々、篠田行休の門に入り大橋流の書を善くす安永九年正月八日歿す

叡尊【畫】思圓房と號す、好みて畫を能くす嘗て嵯峨栴檀佛を摸す今大和大三輪寺に藏するもの其遺蹟の一なり正德三年八月寂す年九十興正菩薩と諡す

叡夫鳥羽台麓の字

頤齋【書】高玄融、字は雙玉、頤齋は其號、天滿の男、書を父に學びて明の王履吉の筆法を能くす其の門に入りて業を受くるもの頗る多し明和六年正月五日歿す年八十

遷齋【畫】池田氏、名は隣、字は德鄉、通稱は彌十郎江戶の書家なり文化七年二月十三日歿す

噲堂【書】佐竹貞吉、字は應謙、東山の麓に住して書を能くす

新水【畫】勝川氏、春水の男、父の業を受けて浮世繪を能くす寛保年中の人、江戶銀町に住居す

蕭山〔書〕加賀山氏、名は花章、瀧本流の書法を善くす嘗て白川を過ぎて深川親和の書する所を見て曰く書佳は則ち佳なり然れども廢人の筆也と側に人あり告げて曰く是れ本藩第一流の書家と親和之を聞き驚きて曰く余彼れを筆する時横臥して筆を下せり此評ある所以也而して此評を下すものは必ず會津の加賀山ならんと天保頃の人

蕭白〔書畫〕曾我輝一、又師龍一に輝鷹といふ、蕭白は其號、又如鬼、鷲山鬼神齋、蛇足軒、飛鸞等の號あり初め書法を高田敬甫に學び後ち雪舟の風を得て遂に一機軸を出せり明和年間の人

憲乘〔書畫〕瀧本坊憲乘は乘淳の嗣にして昭乘三世なり俗姓は藤堂氏、初め鐘樓の坊に住す書畫を能くす元祿五年正月六日歿す

憲梅〔畫〕曹洞宗の僧にして越前の人、丹青を雪舟に學ぶ間々墨畫をなす

憲齋〔書〕中川文彭、字は聃卿、田儀の男、書家なり通稱文四郎、日本書堂と號す慶應三年正月十日歿す年七十七

憲信〔畫〕狩野季信、後ち永信と改め後又憲信と改む通稱四郎三郎、主信の長男享信十六年九月十七日歿す年四十、狩野氏第十世

憲長〔畫〕長尾氏、景長の男、但馬守と稱す嘗て己の像を描き之を長林寺に藏す天文年中

憲章 藤田呉江の名

整齋〔畫〕若槻氏、名は皜、字は子光、整齋と號す通稱菊太郎、幾齋の男なり家學を守る天保年中の人

蕪齋〔畫〕上部光濟、字は子海、雅樂之助と稱す伊勢の人、圓山派の畫師なり應擧の門に入りて其畫風を受けたりといふ

蕪村〔畫〕谷口氏、名は信章、字は春星、夜半亭と號し初め蕪菁と云ひ後ち蕪村と改む又與謝長庚三果東成四明謝寅巴人落日菴老々菴淳風菴臥龍碧雲洞紫孤菴白雪堂阿南趙居老雲等の數號あり攝津天王寺の人京師に住す初め東都に出で俳諧を内田沾山に學び後ち早野巴人に從つて二世夜半亭と號す嘗つて丹後に遊び因て姓を與謝と改むと云ふ天明三年十二月二十九日歿す年六十八

獨知〔書〕名は性機、字は慧林、明人なり來朝して黃檗山に住す

獨湛〔書〕名は性瑩、獨湛と號す黃檗山四代の住職後獅子林に居す

獨本〔書〕名は性源、字は獨本黃檗山の僧たり

獨照〔書〕名は性圓、字は獨照、黃檗山の僧なり洛西嵯峨直指菴の開山なり詩文に名高し

獨痴〔書〕名は浄養、字は獨痴黃檗山の僧たり

獨吼〔書〕名は性獅、字は獨吼、黃檗山の僧たり書名あり

獨菴〔書〕名は玄光、字は獨菴知識の名高し

獨麟〔書〕字は獨麟、醉竹と號す黃檗山の僧なり

獨松樓 岡田半田の別號

獨醉舍 歌川貞信の別號

辨舜【畫】芝氏、是れ亦芝法眼と稱す奈良に住居して春日の繪所となる世に遺りたるもの概ね佛畫なり文明年中の人

辨作【畫】津田氏、辨喜門と號す小笠原家の臣なり近衛信尹の門に入りて書法を學べり寛永年中の人

辨喜門 津田辨作の號

辨藏【書】內田氏會津の人、瀧本流の書法を善くす日新館書學敎授となる文化年中

龜玉【畫】松田氏、名は英、清風館と號す江戶の人、文化十一年正月二十一日歿す

龜岳【畫】松本日觀、梅之坊と號す交山の養子、書を能くす文久二年正月二十七日歿す年四十九

龜玉【畫】黑川安貞、字は子保、通稱觀五郎、龜玉は其號、沈南蘋の畫風にして山水花鳥を善くす指頭畫は蓋し此人に始まると云ふ寶曆六年六月十一日歿す年五十八

龜玉【畫】黑川氏、龜玉の子にして名は子慶、字は德邦、通稱右膳、畫法を父に學び、指頭畫を能くす

龜水【畫】田中氏豐後の人、安政年中

龜毛 梁田蛻巖の別號

曒一【畫】龜井氏、字は東白、鎬溪と號す載一の男、草花を善くす文化頃の人

髫輝【畫】名は奐頂、字は髫輝黃檗山の僧たり

頭光【畫】通稱を岸宇右衛門といひ、名を誠之といふ、東都龜井町の町代なり中年の頃より狂歌を好み桑揚菴と號す酒を好み頭の早く禿げたる故に戲れに頭光と稱す後ち蜀山の門に遊びて遂に巴人亭の號を受け四方側の判者となり名聲海內に聞ゆ高名の門弟多し俳優似顏に長じ最も善く二代目八百藏を畫きたり類考別本齋藤月岑が書入に女繪は鈴水春信が畫風を似せたりとあり又古畫備考に其似顏畫を評し佳氣園を引きてなるほど少し拙き所あり春草の方世門にて多く用ゐし故に似顏畫を止めて尋常の浮世繪をかきし樣子なりとあり嘗て春草と共に繪本舞臺扇二冊を著はす書中は即ち俳優の似顏畫也寛政八年四月十二日歿す年七十

澹如【書】菊地氏、名は敎中、字は介石、通稱佐野屋孝兵衛、澹如は其號、下野宇都宮の人、父を淡雅と云ふ商を營み家道富裕なり澹如幼にして穎悟書を善くしまた詩書を好む多く古今の名績を蓄ふ年僅かに弱冠其畫く所能品に入り觀るもの之を嘆賞す常に客を好み賓客堂に滿つ詩酒談笑毫も倦色なし天資慈惠に富み常に窮乏孤獨を恤む嘗って鄉里に在るとき一夜僕を率ひて潛かに貧家を窺ひ金を投して去る安政萬延の間世故多難澹如姊夫大橋訥庵と謀り四方有志の士と畫策する所あり事顯れて幕吏の捕ふる所となり獄中暴瀉を患ひ病勢峻劇一夜にして歿す時に文久二年八月八日年三十五

澹泊【書】安積氏名は覺字は子先覺兵衛と稱す澹泊は其の號蓋し諸葛武侯が澹泊に非れば以て志を明すなしの語に取るなり又た老圃常山の號あり晚に老年居士と號す舜水甚だ其才を愛して特に敎授す居ること三年痘を疾みて還る故に親しく句讀

を受くるものは僅に孝經小學論語其他數部の書のみ然れども長ずるに及んで博學能文にして尤も史學に長ぜり初め義公四方の英俊を招集して日本史編修の擧あり澹泊之れが總裁に任ぜらる享保中幕府屢々促がして史を獻せしむ時に論賛未だ成らず義公乃ち澹泊に命じて之を撰せしむ是より先き澹泊新井白石室鳩巣と交りて互に學事を切磋す澹泊虚心物を容れ能く人の善に服す然れども事に遇へば一に義を以て斷じ凛乎犯すべからざるの節あり是を以て二子稱して益友とす論賛を撰むに及びて屢々鳩巣に示す鳩巣曰く安部仲麻呂は覊旅の臣を以て唐の諸名家と交り名譽を天下に擅にす而して論中一語の褒稱なきは何ぞや澹泊曰く仲麻呂は異朝の官爵を受け大義闕くるあり世人其才に眩して其罪を知らず甚だ謂れなしと鳩巣深く愧服す史亭保庚子の歲初めて稿を脫す全編二百四十六卷前後之に與るもの數十百人而して澹泊の功多きに居る史成りて義公之を幕府に進む將軍吉宗有馬某をして之を褒賞せしむ義公大に喜び物を賜ふ差あり澹泊亦鳩巣の功を上進す乃ち亦物を贈りて其勞を謝す人滋々澹泊の其功に伐らざるを歎す初義公の世に當りて史館人を得る尤盛なり公薨するに及びて一時の名彥相尋で凋喪す澹泊獨存して世に仰がる老に至りて氣力衰へず其命を奉じて烈祖成績を著はす時に七十二歲なり元文二年病を以て家に終はる年八十二明治卅五年十一月正四位を贈る

澤水【書画】訓谷氏、薩摩の人家に多くの法帖名書を貯へ終日一室に閑居して之を臨摹し以て無上の樂とす故に書畫共に秀潤なり

澤菴【書】名は宗彭、明暗双之春雨桑宿玄之冥之且過子嘖嘖子東海暮翁等と號す大德百五十三世正保二年十二月寂す年七十三

澤雉 細井九皐の別號

鴨涯【書】頼鴨涯、名は醇、字は子春、鴨涯は其號三樹三郎と稱す山陽の第三子なり年十七後藤松蔭の門に入る後ち江戶の昌平黌に學ぶ嘉安の際梁川星巖、梅田雲濱等と共に尊攘の大義を唱ひ力を國事に盡す終に幕府の爲めに捕らはれ斬に處せらる時に安政六年十月七日年三十五書は初め父の風を學び後ち祝枝山を學べりといふ

鴨水漁夫 圓山應擧の別號

篤胤【書】平田氏、幼名正吉、通稱大角、大壑、又は氣吹廼舍と稱す本居宣長歿後の門人なり八歲にして中山菁莪に就きて漢學を脩む十一歲叔父柳元老に就きて醫術を學び二十歲の頃奮然として志を起し遺書して國を去る江戶に上る流離の間精勵刻苦遂に一家の學風を立つ其名大に震ひ一時を風靡す博覽強記世に平田學を唱ふ門に入りて業を受くるもの數百人、著書千卷に餘る天保十四年閏九月十一日歿す年六十八諡して靈廼御柱靈神といふ

篤敬【書】中島氏、京都の人、文化年中

篤平【書画】富尾氏、大阪の人、小柴守直に從つて書を學ぶ安永年中

篤所【書】北村氏、名は可昌、小字伊兵衛篤行と號す洛下に講學す嘗て上皇に侍講す敕して深衣道服及び名硯を賜はる享保三年七月歿す年七十三

錦城【書】太田氏、名は元貞、字は公幹、錦城は其號、才佐と稱す加賀大聖寺の人父玄覺陰陽草木の說に精し錦城生れて穎異五歲にして字を識り十一にして詩を作り十三にして經史を講說す鄕里號して神童と曰ふ蚤に其兄伯惟に從つて家學を爲さしむ然れども方枝の人となるを甘んせず遂に四方の志あり是の時京師に皆川淇園あり江都に山本北山あり一時並に大儒と稱せらる錦城初め淇園に學び後北山に從ふ皆な其の意に滿たず是に於て慨然之れを古人に求めんと欲し勵精刻苦す時に年甫めて弱冠後ち北山の人となりを惡み大島無害山中恕之と倶に書を投じて交を純つ後ち惟を下して敎授を業とす當時幕府の醫官多紀桂山博學洽聞名山東に震ふ一時知名の士多く之に從ふて遊ぶ而して特に錦城の才學を嘉みし其の子弟をして業を受けしむ錦城の名都下に顯はるゝは桂山實に之れが後を爲すなり錦城學問淵博百家の書讀まざるなし而して尤も經術に長じ考據に密なり上先秦の古文より下後世の雜言に至るまで苟くも經義に關するものは旁引曲索其の異同を審かにし其是非を辨ず其の漢唐宋明及び近時の淸人及び我國諸儒の說に於ては會萃演繹以て其の衷を裁す雅に宋學を崇むと雖も其の說己が意に合はざるものに至りては糾駁避くるなし竟に自から一家の學を建つ所謂折衷學是れなり又老釋の書占相の說に至るまで亦粗々其の歸趣を究む四方の士風を聞き門に登る者甚だ多し初め水戶文公其の奇材を聞き將さに之れを辟せんと欲す適々之れを沮む者あり止む老中吉田侯幣を厚ふして之れを招き世子の爲めに經書を講說せしむ而して待遇甚だ厚し文政二年世子嗣で封に就くに及んで錦城從ふ其の明年休暇を乞て再び京師に遊ぶ縉紳學士其の論說を聽いて驚歎せざるなし是の時加賀侯錦城は本州の產にして境外の賓師となるを惜み屢々使を吉田侯の邸に遣し之れを請ひて已まず吉田侯已むを得ず之れを聽す錦城亦其父母の邦なるを以て其の聘に應ず加賀侯祿三百石を賜て斑上士に列す頃はすに職事を以てせず文政八年四月二十三日江戶に歿す年六十一

錦里【書】伊藤氏、名は縉、字は若夏、莊治郎と稱す錦里は其號、又鳳陽と號す平安の人龍洲の子夙に家庭に學ぶ經藝を以て聞ゆ資性愼重名聞を求めず謁見を請ふものと雖も贄を執るものに非れば槪ね之れを謝絕す越前に仕ふる殆んど四十年數々役に江都若くは福井に祇ると雖も奉職謹愼外交を爲さず休暇家に在れば則ち生徒を敎督して門外を踏まず志士溝壑に在るを忘れずの語を書して之れを坐隅に揭げ以て自から警しむ子弟を誡しむる亦是れを以てす錦里博く交らずと雖も其の弟江村北海、淸田儋叟と各一時に高し錦里は則ち經、北海は則ち詩、儋叟は則ち文を以て顯はる博士淸原佩蘭目して伊藤氏の三珠樹と云ふ安永元年三月九日歿す年六十三私に諡して文恪先生と曰ふ

錦川【畫】仁科盛、字は子明山水を善くす江戶の人

錦賀【書】江越氏、名は龍、字は紋穀、繡浦と號す書法を熊斐に學びて能手の稱あり天保年中

錦袋舍葛飾北齋の號、後ち之を門人柳川重

政に讓る

錦隣子 久保田米僊の別號 **錦屛山人** 新井白石の別號

錦鷄 金井金洞の別號

華岡【書】伊藤氏、名は益道、字は子行、通稱善藏華岡と號す伊勢の人、江都に寓す初め書を細井廣澤に學ぶ又た關鳳岡に從ひて師說を研究し六書に於て大に發明する所あり後ち趙文敏を慕ひ一家の風を成す安永五年十一月二十九日歿す年六十八

華山【畫】橫山氏、名は一章、字は舜朗、畫法岸駒を師として松村月溪を慕ひ一家を成す殊に人物を描くに長じ筆勢雄奇也其の他鳥獸に至りては天眞に逼るものあり又た山水を善くす曾て花洛一覽圖を作りて大に世に賞せらる一說に華山家貧うして米鹽屢々空しく遂に北野天神の社內に於て砂畫を書きて行人に錢を乞ふ圓山應擧偶々之を過ぎり其狀を愍みて携へ歸りて門人となすといふ然れども此事固より非なり天保八年三月十七日（一に天保十年八月）歿す年五十四

華山【畫】渡邊氏、名は定靜、字は子安、一字は伯登、通稱は登、又た寓繪堂、全樂堂、昨非居士、金暾居、隨安居士等の號あり田原侯三宅土佐守に仕ふ少ふして藩儒鷹見爽鳩に學ぶ頗る書史に涉獵し又た畫を喜くす一日友人某來り談して曰く子儒たらんと欲す誠に善し然れども今也子は貧なり儒を學ばんよりは寧ろ畫を學びて早く生計の裕を得るに如かずと華山性至孝父母に事ふる甚だ努む遂に其言に感じて曰く儒となりて天下に爲すあらんとす父母の飢寒を奈何にせむ姑く憾みを呑みて畫に從事せんと谷文晁に從て畫を學び刻苦幾年技大に進む晩に諸派を折衷し古法に法りて一家を成す精巧人に冠せり殊に鑒識に長じ古書畫一たび目に觸るれば眞贋立ろに判す藩主歿して二庶子あり國田匱之上下大に困む家宰等議して嗣子を大藩に迎へ以て國難を救はんとす事略ぼ定まる登固く執りて可かず曰く先君兩塊肉あり嗣を他姓に取り吾死して何の面目かありて先君に地下に見えむと因りて同僚に說き胤子を擁立す各俸半を減じて以て國用を贍らす同僚多く謂へらく華山畫を售り家貧に饒かに吾輩の俸祿是賴る苦きに非ずと然れども其議正しく奪ふ能はざるを以て藩士亦背華山の議に同じ遂に庶子を立つ華山既に畫を以て名を著し諸家を涉獵し泰西の畫法に非れば以て眞を寫すに足らずと乃ち刻意之を學ぶ又た其の書に通じ海外の事に習知す蘭學者高野長英と善し長英瑞皐と號す俊邁多智醫を以て業となすと雖も頗る治體に明なり會ま英人モリソン我が漂民を送りて長崎に來り好を通ぜんと欲す議者外事に昧く以爲らく我　窺窬すと邀擊を請ふものあり長英之を憂ひ夢物語を著し其非策を論ず幕士花井寅吉奸譎變詐奇功を建て美官を取らんと欲す謂へらく奇貨居くべしと長英に抵り時事を論じ故らに激論痛快以て之を誘ふ長英乃ち示すに夢物語を以てす寅吉取り去り之を市尹鳥居耀藏に呈す曰く長英禁を犯して外事を縱談し人心を惑亂すと耀藏亦人の陰事を摘發して以て功と爲さんと欲し乃ち長英を遣捕して獄に下す

長英憤悶獄を越えて逃る事華山に連る藩主に命じて之を藩に錮す諸士の華山と善からざるもの益其罪を増飾し盡く奉祿を褫ひ計口給食す華山乃ち自ら耕し母妻は紡績し僅に饑るなきを得門人の都に在るもの月に金貳分を醵して貧と爲す華山大に喜ひ書を作りて之を謝す居ること幾ばくもなく幕府要路黜免せらるゝもの數人あり侯の家宰侯に告げて曰く諸侯伯外事に關するを以て罪を幕府に獲主公何ぞ之を慮らざると蓋し意華山に在る也華山之を聞き憂懼已まず窃に書を門人に馳せて其實を探ぐる門人の復書に曰く幕朝黜陟外事と相關せずと書未だ達せずして華山遽に自及す時に天保十二年十月十一日年四十九明治二十四年十二月朝廷正四位を追贈す

華陽【書】八田氏、名は繇、字は靖民、小字大二郎、華陽は其號、三河の人、江戸に住す資性質實にして浮華を喜ばず終身窮菴に僻處し葆光自ら晦ます其名世に顯はれずといへども經說に於ては有用凱切のこと多し又た臨池の技を能くして稱せらる文政初年歿す年七十餘

華陽 岸駒の別號

華陽【書】白井景廣、字は士淵、華陽は其號、越後の人、岸駒に學びて鳥獸を能くす其著す所畫乘要略あり天保中

華沼【書】岩瀨氏、名は行言、字は子言、通稱は勘平、華沼は其號、島原侯の儒員たり江戸の人、河口靜齋に學ぶ書を能くし殊に草書に巧なり文化七年十一月歿す年七十餘

華隱【書】初め周文に從つて學び後ち牧溪を慕ふ觀の像太だ佳なりと云ふ文安頃の人なり

華亭【書】上田氏、奧州の人、名は立、字は子誠、華亭は其號、書を細井廣澤に學び尤も草書に巧みなり享保十八年五月歿す年六十八

華亭【書】五十嵐氏、通稱相模越後の人美人及び花鳥に巧なり

華岳【書】小澤定信、初め畫を岸駒に學び後華山に從ひ人物を能くす京師の人

華堂【書】上田氏、近江の人なり畫を白井廣士に學びて能くせり

華堂【書】喜田氏、美濃の人、岸岱に學びて京風の畫を能くす特に櫻花を畫くに巧なり名古屋に住し畫を以て稱せらる明治十二年二月病みて歿す

華谷【書】椿氏、椿山の男なり畫法を父および渡邊華山に學びて夙に名手の稱あり惜しい哉不幸父に先ちて死す

華谷【書】角谷氏、通稱金八郎、三河の人なり天保年中

華岳【書】飯島氏、雲岳の子なり文政年中

華陰【書】河邊氏、基輔と稱す京都の人、横山華山に從つて畫を學ぶ安政年中

華堂【書】磯野氏、松村景文に學ぶ文政年中

華谿【書】横山氏、華山の子なり京都に住す父に畫法を學び山水花鳥を善くす天保年中

華濱 華谿の子、父の畫風を善くす安政年中

華溪 松村景文の號

燕石【書】日柳氏、名は政章、字は士煥、長次郎と稱し耕吉と改む、別號を柳東と云ふ初草薙氏と稱す父總兵衞の時に至て日柳と改む讚岐那珂郡榎井の人燕石にして神童の稱あり長じて史に通じ詩文に

巧みに慷慨の氣あり西郷隆盛木戸孝允高杉晋作等と交はり志士と往來す幕府い嫌を蒙むり高松藩に囚へらるること四年明治元年免されて京に入る朝廷賞して御盃を賜ふ木戸孝允と朝命を奉じて鎮西に赴き東征の役史官を以て總督宮に随つて越後に入る途に病んで柏崎に歿す時に八月二十五日年五十二

靜齋【畫】清水靜齋、字は士文、諸葛監又た古畫堂と號す三五と稱し又た又四郎と曰ふ江戸の人師を求めず元明清人の畫を臨模して自ら一家をなす花鳥甚だ巧みなり一筆私意を出さず畫く時は必ず古圖を臨し專ら花鳥を能くす寛政二年歿す年七十二

靜仙【畫】栗本氏、字は東河寸松と號す大和の人、人物を能くす文化年間

靜夫【畫】古屋氏、字は子淵謙齋と號す土佐の人なり

靜院【畫】木村氏　薩摩の人、初め畫法を狩野家に學び後ち雪舟を追慕して別に一家をなす

靜尊【畫】七重阿闍梨と號す藤原道長の末裔なりといふ畫を能くす最も草花に長ず

靜齋【畫】平林氏、名は淳信、字は明義、靜齋と號す又た桐江山人、清日居士、東維軒等の號あり學を佐藤直方に受け尤も性理に精し人と爲り簡默にして草隷を學びて自ら娯しみ專ら二王を以て宗となす時に細井廣澤と其同異を論ず既にして歎じて曰く書豈に學び易からんや然れども一途を執りて達せざれば則ち趣きあるも亦た唯だ土苴と奚んぞ別たんと是に於て漢魏より下隋唐に至み諸名家を取て遂に一家を成す論者或は當世の冠と稱す從學するもの幾んぞ二千人寶暦三年八月二十一日歿す年五十八

靜逸【畫】山中氏、名は獻、字は子文、別に東浦釣容、信天翁と號す三河の人、篠崎小竹、齋藤拙堂の門人なり晩に京都に住す明治十八年五月二十五日歿す年六十三

靜齋【畫】伊藤氏、東京の人、一勇齋國芳に就きて畫を學ぶ明治二十年歿す

靜齋英一珪の號

靜山【畫】岡田氏、加賀の産、安政年中の人

靜古【畫】森氏、文平と稱す豐後の人、嘉永年中

靜閑子狩野安信の別號

靜慮庵【畫】名は慈隆、日光山安養院慈禪大僧都に從て法を受く諸處を遊歷す文學に長じ善く和歌を詠じ墨畫を作る相馬中村藩の爲めに大に弊政を革む明治五年十二月寂す年五十四

靜舎加藤美樹の號

曉谷【畫】溝口成曉、字は子謙、又衆妙舘、自玄堂又た墨齋と號す千谷の子、寛政八年四月三日歿す年六十九

曉臺【畫】名は道收、字は曉臺、釋氏なり

曉齋【畫】河鍋氏名は陳之、俗稱は幼時周三郎、長じて洞郁といふ惺々狂齋と號し後ちに狂の字を改めて曉に作る又た周麿、畫鬼、畑狂者、酒亂齋、雷酔、惺々庵、賣畫狂者、賣畫道人、猩々狂者、如空入道等の數號あり下總古河の人幼より畫を好み七歳にして歌川國芳の門に入り浮世畫を學ぶ後ち前村洞和に就き畫法を學ぶ後ち又狩野洞白に從ふ狂畫を以て著はる畫風飄逸筆力渾勁一家の生面を開く明治二十二年四月二十六日歿す享年五十九

曉

峰【書】三尾氏、美濃の人、文久年中 曉雲 英一蝶の別號 曉翠 岡本亮彥の號 曉天 釋寂譽の稱 曉辰【書】河鍋氏、曉齋の女、畫を父に學ぶ 學海【書】依田氏、名は朝宗、字は百川、學海と號す幼名は幸造、後ち七郎、又右衛門二郎に改む下總佐倉藩士、少うして藤森天山に學び文名有り安政五年以來藩校に教鞭を執る明治九年太政官修史館に出仕し後ち文部少書記官となる十八年職を辭し優遊自適す詩文に長じ書を能くす明治四十二年十二月二十七日歿す年七十七 學樵【書】二村氏、尾張の人、畫を張月樵に學ぶ嘉永年中 學山【書】淺見氏、武藏の人、安政年中 學叟 藝阿彌の稱 學魯 石原鼎庵の名 親當【書】蜷川氏、新左衛門と稱す足利氏に仕へ伊勢守に任ぜらる武藝に精通し和歌を善くし當時の歌人に就いて其の蘊奥を究む畫を好みて善くす其畫く所の自像及び龐居士の像並に山城壬生寺の緣起等世に傳はれり嘗て一夜鳥邊野を過ぎる一婦人の茶毘の火に向ひて坐禪するものあり親當大に怪みて之れを問ふ婦答へて曰く「夏せみのもぬけ果てぬる身となれば何かのこりて物をぢをせん」親當之れを聞きはじめて悟道の尊むべきを了得し遂に一休和尚の門に入りて其の弟子となる文明五年五月二日卒す 親元【書】蜷川氏、通稱新右衛門後ち薙髮して公壽と號す和歌を能くし又た書に巧なり 親和【書】三井氏、名は親和、字は孺卿、龍湖又た萬玉亭と號す江戸の人、廣澤に學びて書を能くせり名聲當時に高く從ひ學ぶもの甚だ多し又た射を廣澤に學びて悉く其傳を得たり或は曰ふ親和の射藝書よりも高きこと一等と天明二年三月七日歿す年八十三 親信【書】松野氏、伯照軒と號す安永年間の人浮世繪の名手なり 親信【書】狩野氏通稱主人、永俊の子、畫法を父に學べり 親愛【書】多田氏、東京に住す上代樣の國朝書法に精通し特に平假名の名手なり明治三十八年四月十八日歿す年六十六 親信 雛屋立圃の名 親信 狩野榮順の名 親信 狩野周譽の名 頼藝【書】土岐氏、源頼光十八世美濃守成頼の次男にして左京太夫となる兄政房を追ひて家督を押領し次で一城の主となる武藝に長じ又た傍ら文事を好む書を善くし和歌に長じ又た畫は最も其の奧秘を究む意匠非凡專家といへども及ぶ能はず殊に鷹は其の得意とする所にして山水之れに次ぐ多くは皆墨畫なり其臣松波庄九郎齋藤道三の奸佞に謀られ遂に國を追はる後ち上總に流寓し天正十一年十二月四日卒す年八十一 頼圓【書】法眼に叙せらる 頼增【書】佛畫を能くす 頼與【書】畫を善くし法眼に叙せらる 頼源【書】筑前法師と號す佛繪師なり壽永二年二月十四日歿す 頼國【書】井上氏、幼名次郎、後大學と改め又肥後と云ひ鐵直と更む伯隨、又厚載と號し家號を神習舍と

曰ふ天保十年四月一日江戸神田松下町代地に生る漢籍を高崎藩儒大塚義章に學び平田鐵胤に就きて皇典を攻め權田直助に就きて皇國醫道を修む明治二年大學中助敎に拜し爾后敎部權大錄大神々社少宮司等の數官を經歷し華族女學校敎授、宮内省等に奉職す博覽强記を以て推さる文學博士たり

賴母【畫】永岩氏、寶永年中の人

賴經【畫】藤原氏、中宮大進たり中宮い稿本により經意を色紙經卷及び標上に書けりといふ

賴方【畫】狩野氏、季賴の門人、元和年中

賴如【畫】京都に住せる繪佛師はり大治年中

龍洲【書】伊藤氏、名は道基、一の名は元基、字は支崇、龍洲は其號、又宜齋と云ふ播摩赤石の人、京師に遊び伊藤坦菴に學ぶ坦菴嗣なし遂に養ひて子とし妻すに其の女を以てす因て伊藤氏を冒す後職を襲ひて福井侯の文學となる學術操行共に家聲を墜さず著書數十部あり三男を擧ぐ伯は錦里仲は北海叔は儋叟とす

龍溪【書】巖垣氏、名は彥明、字は亮卿、龍溪と號す三善氏長門介と稱す博士清原家に學んで古學に通じ後ち大舍人に擢んでらる篤厚謹信の士なり寛永中七十餘にして卒す著はす所論語集解標記十八史略補正松蘿館隨筆龍溪見聞志松蘿館文集等あり

龍登【畫】周文及雪舟の畫風を學び山水水仙梅竹を能くせり年八十八の落款あるものあり何の頃の人なるを知らず

龍山【畫】張龍山名は龍道字は子基梅花山人と號す詩に巧にして傍ら墨梅に妙なり

龍澤【書】松本就章、字は知道、通稱主膳玉潤堂と號す江戸の書家なり天保五年九月二十三日歿す年五十一

龍池【書】猿山氏名は周曉、太平山人と號す江戸の書家なり寛政四年十月二十五日病歿す

龍齋【書畫】山本維碩、字は松甫龍齋は其號、建部巢兆の子、江戸の書家なり又た畫を善くす天明五年六月六日歿す享年五十七

龍田【畫】中野煥、字は季文、儒を以て業とし傍ら畫を善くす先哲の遺法に法りて山水に巧なり尾張の人後ち京師に住す

龍杏【畫】中安氏、字は直康、九華山人、又たは意足道人と號す佛像人物を能くす其畫風啓書記に似たり

龍椿【畫】[illegible]川氏、平安の人、松村景文に學び四條派の畫を能くす殊に寫生に勉め人物花卉鳥獸蟲魚悉く寫精せざるなし

龍淵【畫】水尾氏、初名は墨龍、大坂の人中村藍江の門に學ぶ畫法正しく墨畫を能くし彩色も亦可なり天保二年歿す年四十四

龍水【書】勝間定安、新泉と號す池永道雲に從ひて書を學び又た篆刻を巧みにし又た書及び俳諧を能くせり寛延延寶の間其の名甚だ高し

龍湫【畫】名は周澤龍湫は其の號天龍寺の住僧なり夢窓の法嗣畫を善くす嘉慶中に寂す

龍澤【書】片倉氏、名は孝達、字は箕明、武藏の人

龍統【書】名は元棟字は龍統、黄檗派の知識たり

龍谿【書】名は牲潛、字は龍谿、釋氏なり

龍峰

【書】青木氏、名は脩、字は此三、龍峰は其の號なり舊の福井藩士、書を正木龍眠に學びて篆隷を善くせり

龍淵【書】安藤氏、名は宣、通稱傳藏、幕府の吏なり老いて後ち下谷根岸に隱栖して其居を晩翠塾と稱す御行の松に近きを以てなり夙に書を好み市河米庵に學び殊に隷體に妙を得たり小野照崎神社の扁額を書す筆力秀潤にして雅致あり又古器物を嗜み鑑定に精し明治十七年八月三十日病歿す年七十九

龍山【書】近衞前久の號

龍山【書】山田氏、紀伊の人、書を岸駒に學び隨心院宮より法橋を賜はる明治中歿す

龍山【書】岸氏、書を能くす天保年中

龍淵【書】山田氏、岡本豐彦の門人、天保年中

龍庵【書】中村氏、通稱太玄、醫を以て對馬侯に仕ふ書を好み谷文晁の門に入りて學び其の書格を得たり常に龜を愛し庭池に數百の龜を放ち其の附仰伸縮の狀を見て之を寫し以て娯みとす故に其の龜の書最も巧み也天保年中

龍閑【書】大森氏 嘉永年中

龍谷【書】山田氏、通稱重次郎、江戸の人、文政年中

龍谷【書】矢野氏、通稱右膳、肥後の人、文久年中

龍川【書】清川氏、名は勳、字は公績、龍川は其號なり北海の第三子、幼より他家に養はる兄江村愚亭の死後家に歸る伯父君錦子なし因りて其の嗣となる通稱大太郎

蕃山【書】熊澤氏、名は伯繼、字は了介、蕃山又た息遊軒と號す通稱は次郎八、後ち助右衞門と改む、厚と野尻氏、外祖父熊澤氏に鞠はる因りて其氏を冒す年十六備前岡山の芳烈公に仕ふ五年致仕して中江藤樹に從つて學ぶ正保二年芳烈公擢して國政を委し祿三千石を賜ふ時に年二十七國中大に治まり政績一々擧ぐべからず其人となり容姿婀娜として美婦人の如し而して神宇英邁經世の略あり人に接する温厚に家人奴婢と雖も嘗て喜慍の色を見ず君に從ひて江戸に至るや侯伯權貴より士大夫に至るまで欽慕して弟子の禮を執るもの多し將軍家光亦豫ねて其名を聞く將に延見せんと欲す會々薨ずるを以て果さず明曆二年芳烈公に請ひて其季子池田輝祿を以て嗣とし自ら祿を辭して京都に歸る年三十九更に了介と號して雅樂を學び國典に習ふ京に居ること十年名公鉅卿來りて道を訪ふもの甚だ衆し時に京尹牧野親成讒を信じて蕃山を憎む又た其才を妬むものあり流言益々行はる寛文六年乃ち潜に芳野に隱れ又た山城の鹿背山に栖む九月徙りて播州明石に棲遲す其軒を名つけて息遊といふ門人遂に之を稱す城主松平信之待遇殊に厚し延寶七年信之の封を大和郡山に移さる蕃山從つて矢田山に據る貞享四年將軍綱吉命ありて了介を下總に移す信之既に封を此に移すを以てなり元祿四年七月二十七日歿す年七十三

默翁【書】土肥政平、又た字に用ふ默翁は其號、堪齋又た自觀居士と稱す通稱左仲、越後糸魚川の人、長じて江戸に來り坂井漸軒に從て學ぶ業成りて徒に授く又た筆札を善くす其書法を受る者多し終身仕

へず享保十一年四月二十九日歿す年六十七

默雲〔書〕名龍澤、字默雲、延仁寺の住職

默鳳〔書〕前田圓、字は士方、龍野人の別號あり播州龍野藩士嘉永六年三月生る書肆を營み鳳文館と稱し佩文韻府資治通鑑康熙字典等其他浩翰なる書を飜刻して學者に便にす後ち清國に遊び篆隷六朝の奥儀を極めて歸朝す書法の著述多し

默雷〔書〕釋默雷は高久靄崖の門人、安政年中

默堂 釋風外の別號

默成堂 菅井東齋の別號

默堂〔書〕菊池氏、名は寛信、陸中の人、南宗畫家なり

默軒 中江藤樹の別號

環翠〔書〕松岡光訓、通稱橘四郎、別に蓮凝と號す津山の藩士、光亨の子、東京に移住す五十嵐沙竹の門に入りて學ぶ墨蓮畫に巧みなり明治二十年七月十四日歿す年五十八

環齋〔書〕玉置氏、通稱清之進、江戸の人、戸塚茗溪の門人、明治某年歿す

醒齋 北尾政演の別號

醒也 北尾政演の別號

醒々老人 北尾政演の別號

積德 中井履軒の別號

豫齋 加藤文麗の別號

豫章亭 西村楠亭の名

縉齋〔書〕菅野氏、仙臺の人、安政年中

錄文〔書〕勝山氏、琢文の子、書を以て法橋に敘せらる安政年中

醍醐僧正〔書〕名は仁海、眞言小野派の開祖にして小野僧正と號す曾て雨乞の經法を修して雨僧正と稱せらる佛書を能くす長德元年寂す

遵眞 釋楊眞の一名

璘潮 林閑齋の號

衛居〔書〕山田氏、菊地客齋に從つて畫を學ぶ明治某年歿す

憩石〔書〕富山氏、南宗畫家なり文政年中

蕉中 釋大典の號

蕉林庵 細井廣澤の別號

穎洲 石島筑波の別號

隨古堂 上田素鏡の號

勳 津田龍川の名

十七畫

檉宇（書）林氏、名は皝、字は用韜、檉宇（一に檉藏と稱し又三郎と改む述齋の第三子なり母は側室前原氏檉宇幼より學を講じ詞藻を善くし筆札に妙なり初め大郷信齋に從ひて句讀を受け後に佐藤一齋に就き經業を攻さむ後復た松崎慊堂を邀へ以て異聞を博くす蓋し皆な師門の傑なり既に長じて自ら能く樹立して家聲を墮さず文化四年元服す父述齋平戸侯に請ひて加冠上賓と爲す五年三月始めて將軍に謁す文政二年蔭仕して學職と爲り廩米三百苞及び歲俸百金を賜ふ十二月布衣に敍せらる十二年敍爵し左近將監と稱す天保九年大學頭に任せらる十年入りて侍講となり班を進めて小姓組番頭に亞ぎ廩米千七百苞を加賜せらる前秩を併せて二千苞とす時猶ほ嫡嗣たり殊に異數と爲す十月儲子侍講を攝す十二年家秩を襲ぐ人となり恭儉自ら率ひ事に趨く苟くもせず侯伯以下社に入りて敎を請ふ者少なからず天保の末官適々文學を崇尙す檉宇議數條を獻じ學政大に振ふ生員の盛なる殆んど寛政初載に比す曩きに父編修の實記地誌を繼ぎ又命を奉じて官家系譜を撰す時に又た朝議に參して啓沃心を盡す特り文學を督するのみならざるなり弘化三年十二月六日歿す年五十四諡して恭恪先生といふ

戴斗（畫）葛飾氏、北齋の門人なり戴斗の號を讓受けて二代戴斗と號す通稱半左衞門小笠原家の浪人にして遠藤氏初め北泉と號せりといふ其の技精巧を極め殆んど師に讓らず一見之れが判別に苦しむものあり多くは大坂の板刻を畫けり故に之れを稱して大坂の北齋といふ文化文政年間の人なりといふ

戴笠（書畫）明國の人なり承應年中我國に歸化す書畫を能くす

翺之（書畫）名は惠鳳、翺之は其字、東福寺の僧にして書畫を能くす岐陽秀の法嗣にして嘉吉年中に入寂す

霞洲（書）土肥氏、名は元成、字は允仲、霞洲は其の號又た新川、松巖と號す通稱は源四郎、江都の人、默翁の子天資穎悟六才にして書を善くし詩を賦す水戸義公嘗て之を聞き召し見て稱して神童とす將軍德川家宣潛邸の時新井白石之を薦む試みに經籍を講ぜしむるに論辯爽明且つ其作る所の詩を書するに筆力勁遒老成の如し乃ち擢てゝ侍讀とす時に元祿十六年の秋八月霞洲年十一なり家宣白石をして之れを敎育せしむ霞洲因て白石の家に寓居して修學既に久し學術操行啻に白石に髣髴たるのみならず其の行草に於ても亦た筆意氣韻眞に逼る既に當時に在りて人白石の書と識別する能はず家宣入りて大統を繼ぐに及で儒員となる正德元年韓使來聘す霞洲新井白石三宅觀瀾室鳩巢等と韓使に應接し譯官李邦彥が大坂城の五十韻に和す時に年

十九聘問ありてより妙齡の唱和する者律絶に過ぎず是を以て聲價一時に著はる霞洲職に在る二十餘年病と稱して致仕す寶曆七年八月十四日歿す年六十五

霞亭【書】通稱元信、武田梅龍の弟なり故ありて他姓を冒す美濃の人、兄と同じく明霞に學びて京師に講學す書も亦佳なり

霞山【畫】土佐の人にして畫僧なり浦上春琴に學びて畫を能くし最も山水に長じ世に稱せらる傍ら詩に巧みなり

霞舫【畫】舘氏、名は儁、字は昆陽、通稱俊藏、霞舫は其號、又松籟畫人の別號あり柳灣の男にして畫を善くす嘉永六年正月二十六日歿す

霞江【畫】錦織氏、出雲の人、天保年中

霞樵池大雅晚年の號

霞峰【畫】箕田氏、京都の人、安政年中

霞岳【畫】藤吉氏、伊豫の人安政年中

霞亭宋柴石の別號

霞山【畫】釋氏、日野日生と稱す美濃の人、嘉永年中

霞山釋等舟の號

霞崖頼春水の別號

濟時【畫】藤原氏師尹の子なり少うして畫を善くす應永年間繪所の別當となり丹青の事に預る官左近衞大將に至り正二位に至る世に小一條大將と稱す長德元年薨ず年五十五

濟翁【畫】名は景樹明雲子と號す又た紫塞逸氏と稱す畫法を明兆に受く東福寺開山士雪の弟子にして萬壽寺の住職なり

隱元【畫】名は隆琦、明人なり承應中來朝して黃蘖山萬福寺の開基たり大光普照國師を賜ふ

謙光【書】名は寂泰、字は謙光、士笠と號す黃檗派の僧たり

謙齋【畫】清水氏、斧右衞門と稱す安濃津の人南宗畫家なり嘉永年中

謙齋【畫】庄司氏、水戸の藩士、文學を以て弘道館教授となる醫術に通じ又南宋の畫法に精しく山水に巧み也明治十九年歿す年九十餘

皞々【畫】白神氏、初め畫法を柴田義童に學び後其の風格を變ず山水人物花卉等頗る清人の風ありといふ

應擧【畫】圓山畫流の祖、藤原氏、後ち源氏に改む字は仲選、初名は仙嶺、後ち應擧と改む仲均僊齋、又た漁水漁夫と號す通稱は主水、丹波國桑田郡穴田村の人、家世農を業とす幼にして畫を好み父母に隨ひ田圃の間に耕すも竹片木頭を以て田塍沙壤に草木鳥獸の形を畫き以し樂しみとなし農作を事とせず父母因りて里中の金剛寺に托して僧となさんとす應擧復た肯せず隣近一商家あり脂粉を鬻ぐを以て業とす應擧屢々其家に至り一日稚松を脂粉の袋に畫く一士人之を視て奇とし携へ歸りて龜山侯に献ず侯大に嘆賞す是より畫名始めて顯るといふ京師に出でゝ畫法を狩野流の畫家石田幽汀に學びて出藍の譽あり多く古名蹟を模して敢て規傚に泥まず自から機軸を出して一家をなす其の畫く所の人物花草鳥獸蟲魚等皆な其の寫生にして眞に逼る殊に我戯の圖幽靈の圖水吞の虎伏猪狗子或は鷄の圖玄宗貴妃望觀の圖等は有名のものなり就中最著名の

者は三井寺圓滿院に藏する七難七福の卷物とす故を以て其の名海内に振ひ天下の諸士競うて其門に入る又其の門に入らざるものと雖ども自から應擧の風を帶ぶるに至れり此に因て京攝の畫家多くは一變すと云ふ實に狩野探幽以來の大家と謂ふべし世上此の畫風を稱して圓山風と曰ひ又後世四條風又上方畫と曰ふ寛政七年七月十七日歿す年六十三

應瑞【畫】子なり父の敎を受けて能く家法を守る殊に砂子を散するに妙を得たり文政十二年三月十九日歿す

應震【畫】圓山氏、字は仲恭、應震は其號、應瑞の子、實は受の子なり家法を守りて山水花鳥を能くす天保十一年二月十七日歿す

應受【畫】木下氏、君賚と號す圓山應擧の次男にして應震の父也故ありて木下氏を嗣ぐ父の畫風を學びて一家をなす文化十二年九月六日歿す年三十九

應爲【畫】葛飾北爲の女なり通稱榮美、父に學びて畫を善くす嘉永年間に歿す門人には北周、北雅北龍、北園、北牛、北明、北南等あり

應祥【畫】圓山氏、應瑞の子畫法を父に學ぶ天保年中

應春【畫】圓山氏、應瑞の二男、天保年中

應立【畫】圓山氏、通稱主水應震の子、安政年中

應昇【畫】女史は鎌田氏、巖松の女、名は梅、畫法を父に學び山水花鳥に巧み也嘉永五年正月歿す年二十三

應心 川村雨谷の名

應擧門人十哲 駒井源琦、吉村蘭陵、長澤蘆雪、森徹山、奧文鳴、山口素絢、福地白瑛、山崎鶴嶺、龜岡規禮、木下應受、

應道 篠崎三島の名

彌九郎〔二代〕【畫】齋藤氏、篤信齋の長子なり、名は龍善、初めの名は新太郎、後ち父の稱を襲うて彌九郎と云ふ文久三年幕府に仕ふ維新の後固く歸農の論と把り從來の關係を謝して大に製茶の業を試み後遂に側産に歸せり初め麴町三番町に居りしが其招魂社敷地となるに及んで牛込門內に移り明治二十一年八月五日本郷御茶の水（元町）に於て歿す年六十人と爲り溫厚武術の外又文學を嗜む學を赤井源藏に受け書を卷菱湖に畫を渡邊華山椿椿山に學び皆な之を善くす東洋子淵、雲水老樵、猶存、菟存等皆其別號なり

彌三郎【畫】森村氏畫を以て東國に業とす伊豆權現の縁起二卷を畫く今猶ほ般若院の什物たり

彌左衛門【畫】小林氏、京都の人、畫を以て世に名あり文化年中

檀山【畫】小泉斐、字は子璋、また青鸞齋文道人と號す下野鹿島の祠官木村氏の子なり初め畫を雲圃に學び後江戸に遊びて當時の名家に交り詩歌雅樂を好み又陶畫油畫盆畫蒔繪をも巧みにせり嘉永七年歿す年八十九

檀林【畫】檀林皇后は嵯峨天皇の妃なり繪畫に巧なり而かれども世に傳ふるもの唯一品のみ嵯峨大覺寺中の什物にあり喪斛三年五月薨ず

謦牙【畫】土井氏、名は有恪、字は士恭、謦牙は其號齋藤拙堂に學び文章を以て名あり雄辯縱

横經史を講ずる聽者をして倦を覺えざらしむ旁ら能く墨竹を畫く紀州高野山に僧大鵬畫く所の墨竹の横卷を藏す砮牙竹を畫くは此圖に因て習熟すと云ふ又筆札に工みなり然れども晉唐諸家に於けるは一も師宗とする所なし壯年の時嘗つて三十餘金を捐てゝ端溪の方硯を購ひ又作製の松煙三笏大純羊毫十枝及び湖紙數束を買ひ其の人に謂つて曰く吾將に字を學ばんと欲すと是に於て日に墨を研し筆を潤して揮灑縱横す此くの如き月餘にして墨全く盡く乃ち曰く我書已に成ると是れより絕好の紙縑に書するに毫も艱難の色なし蓋し先づ貴品を浪費して以て其の豪氣を養ふなり然れども性放蕩不羈軀幹肥大にして最も暑を畏る盛夏家に居る率ね裸體嘗つて夏日に其の母を喪ひ弔者至る砮牙父子皆な裸體急に衣を取らんと欲して靈幃前を過ぎり遽かに拜跪して曰く大慈居當初兒を裸生す正さに自から恕せざる可らずと其の子父の後に在りて亦拜して曰く誠に家君の如しと弔者觀て失笑す其の厠に行くに坐中紙なき時は机下冊子の餘白を擘て之に充つ書畫を乞ふ者席にあれば厠より出て紙に跨りて揮寫す餘便滴して紙上に點汚し墨暈痕をなす乞ふ者駭然面色沮む砮牙少しも顧みず其の磊落なること概ね此の如し明治十三年六月十一日歿す年六十四

穗庵【畫】平福氏、名は芸、通稱順藏、羽後角館の人、幼より畫を好み年十一毗沙門天天台大師等の像を畫く武村文海に就き畫法を學び文池と號す後ち穗庵と改む明治二十三年十二月歿す享年四十七

鴻山【書】平林氏、名は可儀、字は子羽、鴻山は其號、又た虛實菴の號あり東岳の子にして書法を父に學びて能くす

鴻齋【書】石川英、字は君華別に芝山外史雪泥居士等の號あり天保四年三河國豐橋に生る史子經典に通じ詩文書畫を善くす其の著書の多き幾千百卷に上る

螺山人 木下逸雲晚年の號

孺皮 高芙蓉の別號

謝寅 與謝蕪村の名

鍾秀齋 森貴信の別號

朦朧齋 墨江武禪の別號

擧秀【畫】田村氏、伊勢介と稱す京都の人、圓山應受の門に學ぶ安政年中

稺龍 龜田鵬齋の字

簣秦 推古天皇の畫師なり

濯纓山人 草場佩川の別號

駿々亭 有坂北馬の別號

聲泉【書画】八木氏、通稱鍬太郎、出羽の人、狩野派の書家なり嘉永年中

篷雪亭 小堀政尹の號

膽齋【書】莊田氏、名は坦、字は君平、半藏と稱す膽齋は其號、初め書を星研堂に學び後巻菱湖の門に入り出藍の稱あり藩擢して右筆となす明治の初め職を福島縣及び文部省に奉ず晩に家を携へて清國に遊び書法を研究して歸る明治九年三月東京に歿す年六十二

濱臣【書】清水氏、名は濱臣、通稱玄長、泊泊舍に號す江戸不忍の池邊に住す村田春海の門人にして國學に邃く歌文に長ず文政七年八月十七日歿す年四十九

闇齋【書】山崎氏、名は嘉、字は敬義、小字は長吉後ち清兵衛と改め又た嘉右衛門と改む闇齋、垂加又た梅庵と號す京師の人、父淨因針醫を業とす闇齋幼にして狡悍無賴、淨因之を患ふ因て妙心寺に入れ僧となし絶藏主と號す天資豪邁、一意禪を修して懈らず然れ共性行猶ほ悛めず嘗て倫輩と論義す闇齋詞理塞る即ち其夜竊かに彼の寢に就て紙帳に火す衆議之は遂はんと欲す是の時に當りて土佐の公子某妙心寺に在りて僧たり聰明にして藻鑑あり嘆じて曰く此の兒神姿凡ならず當に爲すあるべしと乃ち之を遣はして土佐の吸江寺に學ばしむ是の時土佐に谷時中野中兼山あり共に儒を業とす闇齋見て亦深く之を器とす其異端に陷るを惜み勸みて經籍を讀ましむ闇齋乃ち四書及び朱子文集語類等の書を讀む大に之を喜び盡く舊學を棄てゝ學小闢異一巻を著はし寺門に貼着して去る遂に髮を蓄へて儒となる時に年二十五土佐侯乃ち其乞はずして擅まゝに還俗するを責む闇齋恐れて京師に歸り帷を下して道學を講説す從ひ學ぶもの日に衆し會津侯保科正之、美作侯加藤泰義亦禮を厚うして闇齋に師事す而して會津侯最も厚く終始一の如し闇齋も亦感奮恩に答ふるを思ひ知りて云はざるなし會津侯卒する後ち又た京師に歸る上、臺閣公卿諸侯より下布衣閭閻の士に至るまで其門に入るもの無慮數千人闇齋程朱の學を始め孤峻偏隘堅く畛域を設けて博覽を悦ばず又た詩文を好まず片言程朱を犯すものある毎に起ち勃怒咆哮肯て異同に就て旨趣を究むるをなさず是を以て其弊往々膠漆にして通せず竟に支離に淪み固陋に墜るに至る晩年吉川惟足に從て大に神道を唱ふる若きは識者甚た之を譏る高足の弟子中佐藤直方淺見絅齋其餘之に反する者甚た多し天和二年九月十六日歿す年六十五

十六畫

歸春【書】田中五英、字は清友、喜左衛門と稱す江戸の書家なり文化九年十一月七日歿す

禮才【書画】東福寺の住僧、書畫に名あり寶德年間に寂す

禮和【書】西宮氏、通稱

喜三郎、秋田の人、平福穗庵の門に學ぶ

禮卿 菅茶山の字

雛龜【書】桃江園と號す畑木氏、俗稱は津國屋藤四郎京橋山城河岸に住む世に津藤と稱す青年の頃より華奢風流を巧む書を星池翁に學び師と伯仲の評あり又俳諧を嗜み俳名を仙塢と云ひ狂歌は初代彌生菴の社中にて桃江園と號す後に源僊（ミナモトノヤマヒト）と改む別に鶴の門又は一鱗堂と云へり後年自ら彌生菴の稱したる桃の本の號を名乘りて桃の本鶴廬と云ふ安政三年九月病歿す

雛屋 野々口立圃の稱

額輔【書】繪馬屋、松下氏、江戸赤坂一ツ木町泉屋覺之丞の長子、幼名を虎之助といふ後ち賀久輔と稱す初代北斗菴の兄たり幼少文事を好み嵩谷の門に入りて書を學び號を嵩濤と稱す稍工みなるに至りて英一蝶の書風を慕ひ遂に其の門人となりて英一翠と號す又朱樂菅公に就いて狂歌を學び初め時雨菴繪師空言と云ふ後ち故ありて御藏前書替役奥田氏の株を贖ひ移りて淺草新堀に住す故に繪馬屋額輔と稱す北斗側の棟梁たり且つ自から書き自から贊するを以て別號を書贊人とも云へり老後六樹園の門に入り其の名聲益々世に鳴る毎年二月初午祭に自畫贊の燈籠を住地の稻荷社に献ずるを常とす嘉永七年病床に臥し奉燈の畫贊を詠ずるに當り『すて古し古き繪馬屋の額輔も最早今年がをはり初午』と口吟めり同年正月二十七日歿す年七十四

雙桂【書】原氏、氏は琦、字は公瑞、小字は三石衞門、雙桂は其の號、又た倚庵と號す平安の人初め伊藤東涯に學び後ち一家をなす又醫を善くし書に巧なり明和四年閏九月四日歿す年五十北諏訪山の子院洞宗寺に葬る

雙橋【書】林氏、名は英、字は俊仲、淡路の人、學洛閩を宗とし詩書を能くす明治二十九年三月二十日歿す年六十九

雙松 荻生徂徠の名

甕江【書】川田剛、字は毅卿、幼名竹次郎、後城三郎と稱す備中松山藩士なり業を山田方谷に受け後ち江戸に出でゝ昌平校に入り又藤森天山に學ぶ維新後大學博士に任じ宮内省四等出仕より諸陵頭東宮御用掛に累遷し宮中顧問官從三位に至る又貴族院議員に勅選せられ文學博士の稱號を受け學士會院の會員たり明治二十九年二月一日歿す年六十七

鷺溪【書】服部保孝、又誠之、字は清助、鷺溪は其の號、江戸の書家なり享保十四年十一月二十三日歿す

鷺湖【書】鈴木氏、名は雄、字は飛雄、鷺湖と號す通稱漸造、文晁に學びて書を能くす明治三年四月二十二日歿す年五十五

鷺堂【書】小野氏、通稱潤之助、斯花廼家と號す文久二年二月生る駿河國田中舊藩士也幼より書を好み恩田豹隱熊澤猶龍成瀬大域等に就いて學ぶ后專ら力を國字書法の復興に盡す明治二十二年十二月歌牌を書し皇后陛下に献納す後華族女學校習字科に教鞭を執る

藍江【書】中井直、字は伯養、藍江と號す又別に師古の號あり通稱養淸初め關月に學び後ち一格を出せり又た茶道に精し元保元年七月二十三日歿す年六十五

藍田【書】岩城書、字は文琦、通稱甚四郎平安の人なり中漸を師とし後元明の古跡を模法し眞の風致を一變ぜり

藍田【書】股野琢、藍田は其號、舊龍野藩士なり太政官宮內省等數官に歷任し文事秘書官となり從三位勳二等に至る東京帝國博物館長となり詩文を能くし兼て書に巧みなり

藍田【書】藤井氏、阿波の人、書を中江藍江に學ぶ文政年中

藍溪釣徒 田能村竹田の別號

豐國〔世一〕【畫】歌川豐國は江戶の人、倉橋氏、俗稱は熊吉、人形師五郎兵衞の男なり夙に歌川豐春の門に入り浮世繪を學び師名の豐字を讓られて豐國と稱し一陽齋と號し歌川氏を稱することを許さる後に英一蝶が畫風を慕ひ又浪華の玉山江戶の春英が風を慕ふ善く當時の風俗を畫きて行はる最も俳優の似顏畫に長せり享和四年俳優相貌鏡一冊を畫き世に賞せらる其の後專はら俳優の似顏を畫き終に獨立して一格を畫き出し文化十四年役者似顏早稽古一冊を畫き永く世の俳優の似顏を畫くものゝ標本とせり又善く肖像を畫けり肖像は俳優の似顏と異なり眞を寫すを旨とせり謂へらく肖像を畫くには先づ其の人の心を寫し而して其の形を畫くにあらざれば眞を得ること能はざるものなりと嘗つて一商あり豐國の家に來り己が肖像を畫かんことを請ひ美酒佳肴を贈り懇に囑托して去る豐國其の請ひを容れて數日を過ぐれども畫かず某數々人を馳せ促すも聞かざるものゝ如し一日某又小奴を遣り促せしが既に肖像のすがきを終りて彩色せんとする所なりき小奴熟視して豐國に謂て曰く余も亦師匠に請ひ余が肖像を畫かんと欲す然れども小奴の身其の報酬を如何にせん豐國曰く儞は儞の肖像を何の爲めにするや小奴曰く余は越後の產なり家を出でゝ既に三年定省を缺くこと甚だ久し嗚呼父や母や今奴を思ふこと如何一年兩回の賜暇に他人は皆其の父母を訪ふを得れとも奴は國遠くして行くこと能はず庶幾くは奴が肖像を父母に送りたらんには父母の喜び如何ばかりならんと語り了りて淚下る豐國これを聞き忽ち感淚を催し深く其の意を憫み直に小奴をして正坐せしめ筆を採りて美麗なる絹本に其の肖像を畫き忽ち彩色を了りて之れを與へたり小奴大に喜び携へ歸りて某に告ぐ某見て之れを恠しみ一日豐國の許に來り謂て曰く嘗つて囑托せし余が肖像は實に數月前なりそを畫き給はずして小奴が囑托せる肖像は忽ち之れを畫かれたるは如何なる故ぞ豐國曰く余決して等閑になし置くに非ざるなり畫かんとして筆を採ること屢々なれども實に畫くこと能はざりしなり凡そ肖像を畫くには先づ其の人の性質品行如何を察し而して後畫くにあらざれば眞を寫す能はざるなり假令は忠臣なれば忠臣の意をもて畫き孝子なれば孝子の意をもて畫くの類なり今君が平生の品行を察するに平凡にして可もなく不可もなし仍て其の意を注ぐの所に苦しみ遂

に遲々今日に至れるなり線點は既に終はりたれども猶ほ意の如くならざる所あれば未だ彩色を施さずして此にあり彼の小奴の如きは孝子の眞情其面に溢るこれを畫く最も容易なれば直ちに畫きて與へたるなりと某首を掻きて去る又多く讀本草双紙の類を畫く文化の初合巻讀本盛んに行はれ豐國の畫く所最も世に賞せらる依て畫を請ふ者踵を接きて來り應接暇あらず唯日に延期の責めを塞ぐのみなり當時讀本の作者は京傳、三馬、馬琴の徒にして其の挿畫は大低豐國なり豐國にあらざれば實に行はれざれば也又多く俳優の肖像及び風俗美人畫を畫がく東錦繪の華美なるは實に豐國を以て始となす彩色精巧にして燦爛目を射る摺板の數二十有餘遍の多きに至れり文化元年豐國繪本太閤記中の圖を錦繪にして出版せし罪をもて手鎖の刑五十日に處せられたり文政八年正月七日歿す年五十七三田聖坂の曹洞宗功運寺に葬る法名得妙院實彩麗毫信士其の歿するや門人等深くこれを悼み後に相謀り追悼の爲めに筆塚を柳島妙見の境內に建てたり撰文は狂歌堂四方眞顏なり門人多し其の出藍の譽れあるは國貞、國芳、國政、國長、國丸、國直、國安の徒なり

豐國〔二世〕

【畫】歌川氏、俗稱源藏、一世豐國に就き浮世繪を學び夙に師名豐字を讓られ歌川豐重と稱せしが豐國歿するに及び一女に配して家を繼ぎ二世豐國と稱す一龍齋と號し又後素亭と號す柳島妙見にある豐國が筆塚に豐國の義子今の豐國とある即ちこれなり錦畫をよび草双紙を畫く何の故にや後に家を出でゝ本鄉春木町に住し名を改め再び歌川豐重といふ世にこれを本鄉豐國又た源藏豐國といふ歿年詳ならず

豐國〔三世〕

【畫】歌川氏、もと國貞と稱し一世豐國の高弟なり角田氏、俗稱庄藏、一に庄三郎、後に肖造、一雄齋、五渡亭、香蝶樓、月波樓、富望山人、桃樹園、富眺菴、北梅戸等の數號あり武州葛飾郡西葛西領本所五つ目渡船場の舟師の子なり五渡亭の號蓋し是れより出づ幼より浮世繪を好み師なくして善く畫く十五六歲の頃一世豐國の門に入り幾ならずして師名の一字國字を稱するを許され一雄齋國貞と稱す文化五年式亭三馬作吃の又平大津士產名畫の助太刀八冊を畫き大に世に行はるこれ國貞が草双紙の初筆なり是れより年々草双紙を畫くこと多し其の双紙は大抵京傳、京山、馬琴、三馬、焉馬、種彥等の戲作及び讀本なり同七八年の頃より俳優似顏畫を畫きて發行せり最も善く中村歌右衞門の似顏を畫きて大に喝采を得國貞の名愈世に顯はる劇場の興行每に必五六枚の似顏畫を畫くに至れり文政八年一世豐國歿す國貞深くこれを悼み師の肖像を畫き追善の句を誌し之れを發行せり天保二三年の頃國貞英一蝶の畫風を慕ひ終に其の裔一珪の門に入りて學ぶ一蝶と稱し香蝶樓と號す香蝶は蓋し一蝶が名の信香の香字と一蝶の蝶字を取りて號とせしならん弘化元年國貞師名を繼ぎ二世豐國と稱す實は三世なり一世豐國歿して門人豐重後を繼ぎ二世豐國と稱せしが何の故にや家を出でしを以て國貞代りて師家に入り後を繼ぎたるなり即三世なり同二年豐國俗稱を改めて肖造といふ一說に肖造の造

は像に通はせ肖像繪師といふを意味せるなりと同三年門人二世國政に一女を娶はせて國貞の名を與へ龜井戶の宅を讓り家を繼がしめ己は柳島に隱居せり其の居宅は天神川を前にし構造頗る美麗なり高樓あり西南に面し眺望絕佳遙かに芙蓉峰を望むべしよりて富望山人富眺菴等の號あり豐國人となり溫順にして且つ謹愼なり壯年の頃は頗る放蕩なりしが晚年に至りては常に言語動作に注意し漫りに人に接するを喜ばず朝飯を喫すれば直ちに繪畫に從事し終日飽くことなきが如し曾つて人あり婦人賊に遇ふの圖を製せんを請ふ豐國諾して意匠動かず一夕外に出て久うして歸らず其の婦坐して俟つ夜半盜あり戶を排して入る婦狼狽して爲す所を知らず既にして盜面を露はし徐に言つて曰く懼るゝなかれと婦廻睇これを視れば即夫なり驚きて又泣く明くる頃豐國遂に圖を作り之を遺る圖樣巧妙其の人大に悅ぶ用意の極こゝに至る誠に感ずべきなり或人これを評して一なかるべからず二あるべからざる事とす大に然り天保年間幕府錦畫の華美なるものを禁せしが歲ならずして舊に復し嘉永安政の頃に至りては愈精細を極め愈華麗を極め彩色摺五十餘遍の多きに至り中には金銀螺鈿など嵌入せしものあるに至る彩色摺の精巧三世豐國に至りて極まれりと云ふべし元治元年十二月十五日歿す年七十九

豐國〔四世〕（畫）歌川氏、幼より三世豐國に就き浮世繪を學び二世國政と稱し後ち國貞の名を讓られ家を繼ぐ豐國の歿するや三世豐國と稱す實は四世なり明治十三年七月歿す

豐春（畫）歌川氏、名は昌樹、俗稱は庄次郎（一に庄三部）後ちに新右衛門、薙髮して昌樹を音讀にしシヤウジユと呼び家號を但馬屋といふ一龍齋は其號、江戶の人、鳥山石燕豐房に畫を學ぶ劇場の繪看板、顏見世番附を畫きて其名世に顯る又西洋の畫法に據り浮き畫を畫き錦畫にして發行し大に行はる寬政年間日光神廟修繕の時狩野家に從ひ町繪職人の頭となり門人等を率ゐて廟內の彩色に從事せり時人之を榮とす文化十一年正月十二日歿す年八十

豐廣（畫）歌川豐廣は岡島藤次郎と稱す一柳齋は其號、江戶の人、豐春の門人なり草双紙讀本の類を畫きたるもの多し浮世繪に從事すと雖も常に狩野派の畫風を學び又た一蝶の風を慕ひ一格を起さんとし草筆の墨畫即ち張交畫を畫けり門人には豐廣、豐淸、廣昌、廣重、廣政、廣恒等あり廣重最も世に顯る文政十二年十二月二十一日歿す年六十五辭世の句に『死んで行く地獄の沙汰はともかくも跡の始末は金次弟なり』

豐秀（畫）歌川氏、豐春の門人、大阪の人

豐淸（畫）歌川氏、通稱金藏、豐廣の男、浮世畫を書く、寬政の頃

豐熊（畫）歌川氏、通稱熊吉、浮世繪を畫く、文化年中の人

豐丸（畫）歌川氏、豐春の門人にして壽亭と號す後ち勝川春朗と改む浮世繪師也寬政年中

豐久（畫）歌川氏、豐春の門人、寬政年間の浮世繪師なり

豐年（畫）歌川氏、一世豐國の男、文化頃の浮世繪師なり

豐宣（畫）歌川氏、香蝶樓と號す三世豐國の孫なり浮世

繪を書けり明治十九年歿せり

豐信【畫】石川氏、通稱は糠屋七兵衞、六樹園の父、江戸小傳馬町に住し旅舍を營む西村重長に就き浮世繪を學ぶ常に花街又は酒樓に遊び其の風態を熟視して畫く故に男女の風俗を寫すに巧なり天明五年五月二十五日歿す年七十五

豐彦【畫】岡本氏、名は豐彦字は子彦司馬と稱す蘐村、鯉喬、澄神齋等の號あり備前の人なり京師に住す松村月溪の門に入りて畫法を學び後遂に一家をなす殊に山水に巧にして其の名大に振ふ弘化二年七月十一日歿す年六十八

豐信【畫】川枝氏、浮世繪を以て名あり、享保年中朗詠狂舞臺なるものを出版して名を博せり

豐後【畫】豐後法橋、氏名を詳らかにせず巨勢派の畫家なり阿闍梨覺玄に學びて畫を善くすといふ康安年中の人

豐山【書】長野氏、名は確、字は孟確、豐山は其號、積學紡文を以て名海内に噪ぐ天保八年八月二十日歿す年五十五

豐頴【書】本居氏、幼名稻楠、後中衞、又た平造と稱す秋の舍の號あり和歌山藩士天保五年四月生る國學歌道に精く書を善くす明治二年宣教權中博士に任じ爾來教官を經歴し後ち東宮待講及び御歌所寄人となる文學博士たり

豐重【畫】一世豐國の門人

豐春【畫】加藤氏、通稱佐兵衞、伊勢の人、菱川派の畫家にして風俗繪に巧み也安政年中

豐水【畫】小栗氏、伯圭の子、岡本豐彦の門人、天保年中

豐水【畫】高木氏、豐前小倉の人岡本豐彦の門人、天保年中

豐山【畫】山内氏、通稱源太夫、會津藩士なり江戸に出でゝ田代塾に入り書法を學ぶ安政年中

鯉喬堂 岡本豐彦の別號

瞻西【畫】和歌に巧に又畫を能くす雲居寺の僧なり年代詳ならず

繡山【畫】熊代氏、名は章、字は斐文、通稱は利左衞門、繡山は其號、熊斐の子なり

繡江 熊斐の別號

蟠龍洞 林閬苑の別號

蟠龍齋 水谷正村の號

蟠龍【書畫】津宮氏、下總の人、書畫を能くし詩に巧み也最も墨竹に長ず嘉永年中の人

舊草堂 英一蝶の別號

舊松軒 池田孤村の別號

叢春朗 葛飾北齋の別號

織錦舍 村田春海の號

燾 古賀穀堂の名

十九畫

關月【書画】蕐氏、名は徳基、字は子温、通稱源二、關月は其の號、又た黄楊齋と號す大阪の人、初め月岡雪鼎に畫を學び後ち益々和漢の畫法を學びて人物山水に長じ遂に一家を成す又詩書に巧なり法橋に敍せらる著すところの圖畫數部あり寛政九年十月二十一日歿す年五十一

關山【書画】福島氏、名は之、字は仲貫、關山は其の號先哲の古法を模して山水を善くす

關牛【書画】蕐氏、關月の子、名は徳風、字は子偃、畫法を父に學ぶ文化年中

櫟壽堂【書】水口氏、通稱を隼人といふ京師の人なり御家流の書を能くす

櫟叟【書画】久須美氏、通稱安宅越後の人、嘉永年中

櫟屋【書画】南都の人、佛像を畫く天文年中

櫟同 牲川充信の號

藝阿彌【書画】畫僧なり眞能の子、名は眞藝學叟と號す畫風父に同じ文正中の人

證覺【書画】京師の人にして出で丶阿波國興願寺の住職たり大雅堂の門人にして書畫を巧にせり

願行【書画】畫僧なり常に不動尊を尊信し且つ其像を畫けり初め泉涌寺に住し後東寺遍照心院に住せりといふ

懷慶【書画】常に佛像を畫けり法眼に敍せらる

懷月堂【書画】安慶と號し源七と稱す享保年中の人にして浮世繪師なり

繪式部【書画】畫を善くし和歌の意を畫くを以て名あり平繁兼の女なり

鵬齋【書】龜田氏、名は長興、字は穉龍、鵬齋は其の號又た善身堂の號あり江戸の人幼にして學を好み井上金峨に從ひて學ぶ性豪邁にして世儒を蔑視す同門の士山本北山原狂齋と相ひ善し弱冠の頃北山と共に失ふに二人文柄を乘り各方に割據して一世の雄を振ふを以てす遂に博學洽聞別に一家の言を建て名一時に振ふ北山等と歐蘇の平散流暢の文を作爲し物徂徠服部南郭等の李王修の説を排撃す江戸の文風之れが爲に一變す故あり仕進の志を絶ち詩酒に放浪す晩年臨池の技を好み特に草楷を善くす文政九年三月歿す年七十三

羅山【書】林氏、名は忠、一の名は信勝、字は子信羅山は其の號又た羅浮山、浮山、羅洞、四維長胡、蝶洞、瓢菴、夕顏巷、雲母溪、尊經堂、梅花村麝眠等の號あり又三郎と稱す、幼名菊麿（一に菊松丸に作る）其の先は加賀の人後ち紀州に徙る父信明に及びて平安に住す羅山生れて神彩秀徹粗々文字に通ず十三歳既に國字を解し演史小説を誦し且つ中華の記錄を窺ひ見聞して忘れず世稱す此童耳は囊の如しと年十四建仁寺に入りて書を諸む時喪亂に屬し書籍甚だ乏し羅山百方索借して諷誦毎に旦に達す緇流學者の輩試みに疑義を問へば則ち娓々辯析す皆稱して神童とす長ずるに及びて英邁絶倫曠世の才あり益々百家に馳聘す凡そ

字の冊を成すもの闕はざる所なし而して最も六經を尊ぶ嘗て言ふ漢唐以來の文字は皆な原く所ありて其の大要は六經に歸す唯六經の文字は原く所なし道固より此に在りと又言ふ後世能く六經の旨を得るものは唯程朱の學なり今日異端外說又之れを壅塞す是れ力めて闢かざる可からずと遂に銳意洛閩の學を興すを以て自から任ず門を開き徒を聚めて四書新註を講說す從ひ聽くもの甚だ多し是の歲僅かに弱冠を踰ゆ是の時學問湮滅する久しく民間冊子を挾むものなし故に遠近駭異傳へて以て奇事とす時に藤原惺窩あり洛北に隱る既に理學を唱ふ羅山景慕して弟子の禮を執る惺窩亦以て人を得たりとして之れを愛し推して高足とす家康雅に羅山の名を聞き時に邀て咨詢す慶長十一年召して博士となし以て顧問に備へ深く其の博識を嘉みす後ち薙髮して道春と稱し民部卿法印に敘任せらる羅山國家創業の時に際して大に寵任を受け朝議を創し律令を定む幕府の文書率ね其の手に成る四世に歷仕し即位改元行幸入朝の禮より宗廟祭祀の典及び外國蠻夷の事に至るまで預り議せざるはなし明曆三年正月二十三日歿す年七十五諡して文敏といふ

羅漢【畫】蒲生氏、奥州白河の人、谷文晁に從つて畫を學び、人物羅漢を畫くに妙を得たり天保年中

邊登 渡邊華山の稱 **邊英** 渡邊玄對の稱

寶晉齋 寶井其角の別號 **寶山** 北屋政演の別號

鏡山【畫】大平氏、鏡之助は其通稱なり信州の人、岡本豐彥に畫を學ぶ天保年中

麓谷【畫】谷氏、文十郎と稱す江戶の人、詩文を善くし畫法に通ず谷文晁の父なり文化六年九月歿す

麓齋【畫】佐々氏、通稱春造、因幡の人、安政年中

瞎驢國景 一休和尚の別號

蟾洲【畫】岩瀨氏、椿々山の門人にして畫を能くす文久三年歿す

藤樹【書】中江氏、名は原、字は惟命、藤樹は其號又た默軒、顧軒等の別號あり與右衛門と稱す近江高島郡小川村の人、祖父と共に伊豫大洲に移る時に年甫めて十一藤樹幼にして岐嶷擧止衆兒に異なり一日大學を讀み自天子以至於庶人壹是皆以修身爲本の章句に至り嘆じて曰く幸に此經今に存す聖人豈學びて至る可らざらんやと年十七京師の僧來りて論語を講ず是の時文運未だ開けず大洲の俗唯々武事を修めて文業を棄擲す故を以て講を聞く者少なし獨り藤樹日に往て業を受く居ること月餘にして去る己にして四書大全を得て大に之を悅ぶ然れども深く物議を憚り晝は諸士と武を講じ宵は燈に對して誦讀す力學多年奮然志を立て聖學を興すを以て自ら任とす藤樹至性あり恒に母の獨り鄉里に在るを憂ひ伴ひ來らんと欲す嘗て乞ひて歸省す然れども母波濤を踰て他邦に行くを欲せず乃ち獨り大洲に還り屢々情を述べて骸骨を乞ふ侯素より藤樹の德

行を重んず敢て許さず乃ち誓ふに二君に仕へざるを以てす尙ほ許されず因て遂に逃れ去る時に年二十七定省の暇徒を聚めて書を講ず初め程朱の學を修む已にして王陽明の說を信じ好みて孝經を講じ愛敬の二字を揭出して人に誨ゆ藤樹人となり温厚躬ら行を先にし文飾を後にす人賢愚となく皆な其德に服して善に興起せざるなし旅舍茶肆と雖ども客の遺物あれば必ず之を閣上に置き以て遺者の復た來るを俟つ嘗て京師に往く轎中心學を說く轎夫感動流涕す其德の人を薰する概ね此の如し故に一時稱して近江聖人と曰ふ大洲侯復た召せども就かず備前侯亦た其篤學修行を聞き幣を厚うして之を聘すれども藤樹辭するに老且つ病むを以てし其子及び諸弟子をして仕へしむ備前侯渴仰益々切遙に之を師崇す慶安元年八月二十五日歿す年四十一

二十畫

覺洲〔畫〕和泉の國堺の僧なり畫を能くす

覺玄〔畫〕何れの人たることを詳にせず豊後法橋の畫の師にして巨勢の流派なりといふ

覺鑁〔畫〕覺鑁阿闍梨は高僧なり正覺と號す肥前の人本と平氏、桓武天皇五世の孫なり父某武略あり鄕黨擧げて畏敬す天性書を善くし宅間爲遠に就いて畫傳を受け毎に諸佛の像を畫きまた已が像を圖せり今往々遺るところのものありまた梵書を能くし其の名當時に高し

覺和〔畫〕覺和阿闍梨は畫僧なり惠深（白河天皇の皇子）の上足日圓坊と號す高野山成就院の開基たり一日嶽の辨財天影寂す私に其の影を手摸す精細絶妙今猶ほ其の至寶たりといふ

覺超〔畫〕元三大師の弟子、山門阿闍梨公といふ佛畫を善くす

覺仁〔畫〕大治年中の人にして南都に住せる僧なり畫を能くせり

覺圓〔畫〕關白賴通の六男世に宇治の大僧正と稱す書畫を以て名あり承德二年四月十六日歿す年六十六

覺如〔畫〕本願寺三世の法主なり佛像を畫けり自畫佛祖の像信越の諸寺に藏せりといふ觀應二年正月十九日寂す年八十二或は曰ふ八十一なりと

覺暹〔畫〕名は覺暹、字は海山、龍河と號す

覺天〔畫〕名は元朗、字は覺天、黃蘗派指直菴に住す

露香〔畫〕三熊介堂の妹なり吳門に入りて畫を學び人物に妙なり殊に兄花顚の法を得て櫻花を畫くに眞に迫れり

巖溪〔畫〕沙門なり周文に學びて畫を能くす山水花鳥に巧に又た猿猴を畫く永享頃の人

巖信〔畫〕畫僧なり法印に叙せられ行巖と號す後白河天皇の朝に奉仕す

蘇山〔畫〕倉岡元昌、字は煥甫、通稱文三郎、江戶の書家なり細井廣澤の門人にして楷書に巧み

なり寛延三年三月五日歿す年七十二

蘇山【畫】後藤氏、通稱權藏、美濃の人、安政年中

蘇山【畫】秋尾氏、京都の人、安政年中

蘇山【畫】釋蘇山は熊本の人啓邦和尚に就きて禪を學び傍ら畫を能くす明治元年寂す年七十

蘇門 服部天游の別號

藻壁門院【畫】藤原氏、名は竴子、攝政道家の女にして後堀河院の后四條院の御母公なり性圖畫を好み嘗つて源氏物語の故事を畫けり

蘆菴【畫】小澤氏、名は玄中、蘆菴は其の號、又觀荷堂と號す通稱は帶刀、原と尾張の老職竹腰氏の家臣幼にして大坂に住す長ずるに及びて京師に徙り某公に仕ふ年三十五にして致仕す母を尾張より迎へ筆耕以て之れを養ふ後ち歌學を以て業とす東岡崎村に住す始め冷泉爲村の門に入り故ありて破門せらる後ち自ら一家をなし上田秋成、伴蒿蹊を友とし善し又劍技を善くす其の人と爲り方正端嚴邪を疾むこと特に甚だし人過ちあれば之れを面責して毫も寛假せず一夜盜入る蘆菴薙刀を執りて之れを擊つ盜怯れて逃る豪商三井氏の一族皆門に入りて業を學ぶ寛政壬子蘆菴疾病あり其の黨來り訪ふものなし蘆菴疾癒えて深く其の疎薄を怒り書を贈りて交を絶つ其の尾に和歌二首を附す其の歌に曰く『人のよのにごれるものを淸めやとてなに汲みつらん袂ぬらしに』又曰く『人のよの富は草ばに置く露の風を待つまの光なりけり』三井罪を謝すれども終に可かず山東の蒲生君平山陵志を作らんと欲し畿內に遊び蘆菴を見て之れと語る蘆菴悅びて之れを己の家に置き山陵を搜索せしむ享保元年七月十一日歿す年七十五

蘆雪【畫】長澤魚、字は主計、山城淀の藩士なり應擧の門に入りて學び後ち遂に一格を成す畫くところ緻密なるものに至りては肉眼を以て認識しがたきものあり又た洒落のものに至りては粗大にして殊に風致あり應擧門下の巨擘と稱し名聲時に鳴る蘆雪嘗て皆川淇園と謀り祇園の境內某寺に於て畫を作り贊を題す人爭ひて之を買ふ數日にして若干金を得たり輙ち相共に娼樓に上り妓を招き宴を張り劇飮痛酌曉に達す獲る所の金皆囊を盡して歸る寛政十一年六月八日歿す年四十五

蘆洲【畫】長澤鱗、字は吞江、蘆雪の義子、父に繼で圓山風の畫を能くす弘化四年十月二十四日歿す年八十一

蘆國【畫】淺山氏、通稱布屋忠三郎、浪花の人、須賀蘭林齋に畫法を學び淺山蘭英齋と號す後ち又狂畫堂芦國と改む浮世繪に巧みなり文政元年五月五日歿す年四十餘

蘆洲【畫】淺山氏、大坂の人、浮世繪を畫く

蘆洲【畫】木下氏、名は直行、蘆洲は其號、大坂の人、畫法を林文波に學び山水人物花鳥を能くす明治十二年六月二十日歿す年七十三

蘆洲【畫】淺井敬、字は德海、越後の人、南宗派の畫家なり明治三年五月歿す

蘆鳳【畫】長澤氏、蘆州の子、畫を父に學ぶ嘉永年中

蘆江【畫】金田氏、畫を森租仙に學ぶ安政年中

蘆僊

〔畫〕岩井氏、通稱順次加賀の人、嘉永年中

蘐園 荻生徂徠の別號

鐘山〔畫〕田村氏安政年中

釋阿 藤原俊成薙髪後の號

礫川〔畫〕小林氏、但馬の人、板屋桂舟の門人なり明治某年歿す

蠖齋〔畫〕海野氏文化年中

鵲巢 河保壽の別號

薔薇洞 木下順庵の別號

鐘山〔畫〕深井氏、通稱武助、南宗派の畫家なり文政年中

廿一畫

櫻水〔畫〕美馬氏、名は諧、字は和甫、援造と稱す阿波の國美馬郡々里村の人、僧となりて土佛と稱し後君田と云ふ詩文及び書畫を能くす尊攘の説を唱へ幕府の爲めに捕へられ明治維新の際に至りて赦さる明治七年歿す年六十三

櫻町成範室〔畫〕中納言局と稱す書を能くす仁安年中

櫻齋〔畫〕三河の人、狩野派の畫人なり文政年中

櫻園〔畫〕永田氏通稱道三郎信濃の人、詩歌を善くし兼ねて南宗畫に巧み也安政年中

鶯浦〔畫〕酒井氏、市ヶ谷淨榮寺住職にして抱一の歿後雨華庵に居り因て酒井氏を冐す書法を抱一に學びて其風を能くす傍ら俳諧を好む天保十二年七月二十三日歿す年三十四

鶯村 酒井抱一晩年の號

鶯齋〔畫〕梅の本と號す京都の人浮世繪を畫く安政年中

鶯一〔畫〕名は紹眞、三世雨華庵と稱す嘉永年中

鶯歌〔畫〕英一蝶の門に學ぶ

蠣潭〔畫〕鈴木氏、名は規氏、通稱藤之進、蠣潭は其號なり酒井雅樂頭宗雅の臣なり宗雅の命に因り酒井抱一に隷屬す其間畫を抱一に學ぶ人物草花を能くす文化十四年六月二十五日歿す年三十六

鶴山〔畫〕石井氏、名は砥、字は仲車、幼にして穎悟未だ父母の懐を離れざるに大學を誦讀せり鄕人以て神童とす鄕校に入るに及んで勤勉怠らず年十七にして都講となる京師に入り高葛陂に就いて學び既にして江戸に到り博く諸家と交り益々講究す聲名漸く鳴る藩侯之れを聞き召して以て侍講となす寵遇最も厚し是より後ち侯の東上するごとに必ず扈從す藩に國學の興るや敎諭を兼ぬ詩を作る敏捷酒酣なるに及べば紙を展べ筆を揮ふ纚々數百言宿搆の如し又渉覽を好む終身經る處海內に半す平素人と語りて幽勝の事に及ぶや

娓々として倦まず能く人をして傾聽せしむ寛政元年侯に從ひて江戸に出づ翌年春病にかゝり歸途大阪に至り病大に漸み四月九日歿す

鶴林【書】五松氏、通稱治右衛門、出羽國米澤の人、近衛流の書を能くす後菅家の筆法を學びて大に之れに長せしかば菅原姓及び法橋を賜はる文化十年十月二十八日歿す年七十一

鶴皐【書】倉澤和榮、鶴皐と號す書體元明を慕ひ其の風を摸せり

鶴川【畫】岡田儀字は民則、佳月と號す通稱勇藏畫を能くせり幕府の士

鶴山【畫】龜田氏、初め岸家に學び後清人の風を摸し墨梅に巧みなり又詩を能くす

鶴嶺【畫】山崎氏、名は義淵字は君魚、鶴嶺は其の號、大坂の人、京師に住す畫を圓山應擧に學び殊に花鳥に巧み也

鶴洲【畫】女史は木村氏、名は王英、字は君華、通稱は彌須、畫を能くす文政年間

鶴亭【畫】名は淨光、初の名は淨博、字は惠達、鶴亭は其號、又た如是、五字菴、南窓翁、壽米翁、白羊山人等の數號あり黃檗山塔頭雲紫雲院に住す沈南蘋の畫風

鶴洲【畫】渡邊氏、名は農、字は登穀、美濃の人鶴亭に學びて沈南蘋の畫風に巧に大に時人に賞せらる

鶴年【畫】赤松氏字は玄裳、鶴年と號す東師の人なり岸駒に畫法を學びて善くす

鶴峯【畫】名は濟悟、字は鶴峰、黃檗山の僧たり

鶴梁【畫】林長孺、通稱は伊太郎、鶴梁は其號武藏の人なり文を長野豊山に學び經義を松崎慊堂に受け文名大に鳴る徳川幕府遠州中泉の代官に任ず鶴梁惠濟倉を起し治績大に顯はる明治十一年一月十六日歿す年七十三

鶴翁【畫】名は亮、字は公明、美濃の人鶴洲の子、父に畫を學びて沈南蘋の筆意を得

鶴汀【畫】中濱氏、加賀の人、天保年間

鶴林【畫】鵠橋氏、天保年中

鶴音【畫】壽々尾と稱す大阪の人

鶴麓【畫】桑山玉洲の別號

鶴仙【畫】阪の人、安永年間

鶴洲【畫】住吉廣夏の號

鶴仙【畫】鳥山巽甫の別號

鶴仙【畫】松井半平等の別號

鶴溪【畫】渡邊季茂の號

鶴汀【書】渡邊氏、鶴洲の子、五字庵と號す宋畫に似たり天保中

蘭齋【書】佐藤氏名は國、字は子埜、仙台の人、書家なり始め下田氏後ち本氏に復す學を太宰春臺に學ぶ天明七年七月十一日歿す

蘭山【書】小野氏、名は職博、字は以文、蘭山は其の號、又衆芳軒、朽匏子の號あり通稱喜內京師の人、本と佐伯氏父職茂從四位下主殿大允兼伊勢守たり二子を擧ぐ長は職考父の任を襲ふ季は即ち蘭山なり蘭山少より喜みて書を讀み松岡恕菴に從ひて本草の學を受く年二十五意を仕進に絶ち帷を下して業を講ず藥を採るの外足戶外に出でず戌にして寢ね丑にして起き隨ひて讀み隨ひて抄す數十年猶ほ一日の如し年老ひて志愈々篤し學成り名顯はれ本草を治むるもの遠近麕集し爭て業を門下に受く蘭山人と爲り怡冲坦靜語言低小言ふ能はざるもの丶如し性最も强記耳目の過ぐる所終身忘れず人に接

する賢愚となく容色必ず恭くし弟子を教ふる孜々倦まず寛政十一年蘭山年七十一徳川幕府の召に應じて江都に赴き舉げられて醫官となり本草を躋壽館に講じ醫官の子弟に教授す又屢々藥を諸國に採る初め蘭山の閭巷に在るや資力限りあり搜索適さに及ぶ能はず是に至りて意を搜索に恣まゝにするを得山野を跋渉し欣然勞を忘る其の苦思力學壯時の如し書室の內典籍羅列珍藥寄品囊に盛り笥に儲へ碎玉怪石草木の花實根核羽尾鰹介蟲豸の屬或は盆栽にして架上に排し或は乾腊して壁間に掛け或は圖にして卷冊とす古書畫古器物洋舶諸物の如きは席上に狼藉たり蘭山僅かに身を其間に容れ兀坐披對時に或は獨酌微醺し詩を賦し長笛を吹き怡然自から娛しむ督醫學事丹波簡一見稱して曰く殆んど神仙中の人の如しと享保壬戌の冬孫子德門人と本草啓蒙四十八卷を筆記し蘭山の訂正を得て梓に上ぼす實に蘭山畢生の心力の寓する所なりと云ふ文化七年春疾みて牀にあり病を勉めて廣參說一編を著はす凡そ二千餘言稿裁かに成りて歿す同に同年正月二十七日なり年八十二

蘭石【畫】片桐隱、字は處翁、一に伯然叟と云ふ江戸の人、玄對に學びて人物を能くす天保年中の人

蘭溪【書】板倉經世、字は美淑、通稱經之丞、別に復軒と號す、江戸の儒者也能書を以て聞ゆ業を徂徠の門に受く能書を以て聞ゆ

蘭香【書】大田氏、太田錦城の女なり名は普子、字は景昭書を善くす

蘭月【畫】梶浦氏、慈聞と稱す尾張の人なり天保年中

蘭石【書】山口氏、大阪の人、中井藍江に書を學ぶ

蘭陵【畫】吉村氏、字は孝敬又無違といふ蘭陵と號すいふ圓山應擧に學び花鳥を能くせり天保七年七月十六日歿す年六十八

蘭洲【書】山本智光は佐兵衛と稱す江戸の書家なり安永七年七月四日歿す年七十五

蘭谷【書】松崎氏、名は榕之、字は子慶、蘭谷は其號、又た一に甘白と號す通稱多助、丹波の人、世々篠山藩に仕ふ父の跡を繼ぎて京師の邸監たり少にして伊藤仁齋の門に學ぶ仁齋深くこれを器とす長ずるに及んで博覽弘通時務に熟達し最も應接の言辭を善くす中年の後ち臨池の技を好み能書の聞えあり持に草隷に長せり細井廣澤其書を評して曰く筆法の整齊林道榮、高天猗、佐文山の上に在りと其の巧妙なるを知るべしまた心を文章に潛め典雅莊重、絶えて艶富に流れず時習に染まず傍ら本草を研究し稻若水と交り善し享保二十年七月九日歿す年六十二

蘭洲【書】五井純貞、字は子祥、蘭洲は其の號、又洲菴と號す通稱藤九郎、持軒の二男なり享和中中井甃菴懷德書院を攝津尼か崎に設く三宅碩菴其講席を主り蘭洲助敎となり敎授に從事す幾くもなくして江戸に出で津輕侯に仕ふ津輕の地僻陬に在りて民俗甚だ陋野蘭洲の赴くに及び始めて學に嚮ふを知る元文四年辭して大阪に歸る諸侯爭ひて召すといへども應せず懷德書院に敎授す寶曆十二年三月十七日歿す年六十六

蘭臺【畫】市川謙、蘭臺と號す上野甘樂郡の人

蘭齋【書】森氏、名は文祥、字は九江、蘭齋は其號、又鳴鶴と號

す沈南蘋の畫風を學び研鑽遂に其奥旨を極む殊に花鳥に巧なり享和元年九月廿八日歿す

蘭室【書】赤松氏、名は勳、字は大業、通稱太郎平、蘭室と號す赤穗の人、滄洲の長子なり詩文筆札に工み也天明中父に先だつて歿す

蘭齋【畫】片岡氏、字は嘉卿、蘭齋と號す浪花の人、文化年間

蘭嵎【畫】伊藤氏、名は長堅才藏と稱す仁齋の第五子東涯の異毋弟所謂首尾藏の一人なり平安の人後ち紀伊に仕ふ始めて書を君前に講ずる時案に對して說かず侍臣數々之れを促がす徐ろに對へて曰く君公褥に座す聖人の書講す可らずと侯之れを聞き遽かに褥を撤す是に於て講論す音吐朗爽辯論明晰侍坐咸な嘆じて曰く眞儒なりと又書を能くす畵名應躔と云ふ好みて墨蘭を作る後ち其の書を求むるもの多きを以て之れを止む安永七年三月二十六日歿す年八十六

蘭溪【書】名は道隆、字は蘭溪、鎌倉建長寺の住職知識の名世に高く又書を善くす

蘭室【畫】大内衡字は孟玉一に子詮、良助と號す徂徠に學ぶ蘭室は其號唐津侯の儒臣にして書に能也

蘭桂【書】名は正香、字は蘭桂、詩文をよくす

蘭亭【書】高野氏名は惟馨、字は子式、又東里と號す江號の人なり百里居士の子幼にして逸才あり物徂徠に學ぶ徂徠甚だ之れを奇とす年十七にして明を喪ひ終に百事を廢す是れより一に心を詩歌に專にす徂徠之れに教へて然らしむるなり三百篇以下漢魏六朝唐明大家の作に至るまで大抵之れを暗誦して最も意を李滄溟に用ふ特に近體に長ず物徂徠の門に詩を以て名ある者十數人服部南郭を以て盟主となす蘭亭最も晩出常に南郭に兄事す何くもなくして詩名南郭と相比し當時詩を言ふもの二家の門牆に倚らざるなし諸侯及び貴介公子爭ひ延て詩を講せしむ書も亦一家の風流あり蘭亭幼より著はす所の詩萬有餘篇其病篤きに及びて悉く之れを火く是に於て松崎名修、稻垣稺明、谷文卿等相ひ謀りて各嘗つて私錄する所のものを輯めて蘭亭詩集と名づけ世に刊行す蘭亭又俳歌を善くす寶曆七年七月歿す年五十四

蘭田【書】奥氏、名は玄寶、字は素養、蘭田、又獨飛と號す和泉の人、後ち東京に移居す詩書を能くす而して書名最も高し初め董其昌を學び後ち一家を成す明治三十年九月一日歿す年六十二

蘭涯【書】川窪氏、信濃の人なり高久靄崖に學ぶ天保年中

蘭堂【畫】本堂左登見は奥州盛岡の人、畫を能くす文政年中

英齋 淺山蘆洲の別號

蘭堂【畫】水上氏天保年中

蘭雅【畫】林氏、京都の人、岡本茂彦に學ぶ安政年中

蘭溪【畫】若芝氏、長崎の人、山水花鳥能く明人の畫法を得たり刀鐔を作るに巧みにして常に鐔面に畫く寛政年中の人、子孫相繼ぎて若芝と稱す

蘭溪【畫】兒島氏、鶴澤探鯨に學ぶ法橋に叙せらる安永年中

蘭溪【畫】鈴木氏、越後の人、嘉永年中

蘭溪【畫】西脇氏、美濃の人、安政年中

蘭溪 伊藤靜齋の別號

蘭齋【畫】佐々木氏、美濃の人、西脇蘭溪に學ぶ

蘭齋【畫】熊坂氏、適山の弟なり書を兄に學び墨蘭竹に長ず明治初年歿す

蘭鶴 田口柳處の別號

蘭隱 北島雪山の初號

鐵石【畫】藤本氏、名は眞金、鐵石は其の字、別に鐵寒士、又都門賣菜翁と號す通稱津之助、備前の藩士なり少壯にして武技を綜練し又た經史に通じ書畫を善くす屢々南海鎭西に遊び廣瀨淡窓、草場佩川、村上佛山、矢上快雨號と詩文を討論し事業大に進む嘉永の初め居を京師にトし帷を垂れて生徒に授く時ありて快書奇籍を讀む曰く五日一書を讀み十日一山を畫く只覺ふ胸間琤々として金玉の聲を爲すと都下の人士多く其の畫を請ひ以て清觀とす嘉安以降海內多故國事日に非なり鐵石憂憤措かず文久三年八月朝廷已に大和行幸及び夷狄親征の議を決す乃ち竊に有志の士松本奎堂、吉村寅太郎、竹下熊雄、那須信吾、安積五郎等と謀り將さに義兵を擧げんとす奎堂首として之れを贊成し同志三十餘人と共に侍從中山忠光を奉じて京師を脫し大阪より河內富田森に赴く鐵石猶京師に留り竊かに朝旨を窺ふ居ること三日即ち河內に至る實に文久三年八月十七日なり因て奎堂等と議し大和五條代官鈴木源內を襲殺し其の廳を焚き以て義兵の首途とす衆士踊躍奮興し鐵石及び奎堂を推して總裁とし以て軍議を決せしむ居ること數日四方の士民身を致して應ずる者殆んど千人に及ぶ屢々和歌山津彥根郡山其の他畿內近國の藩兵に接し戰ひ勝たざるなく謀中らざるなし已にして大將中山忠光を奉じ陣營を天の辻に定む鐵石天の辻の陣中に在りて爵祿に堪へず乃ち下館藩の脫士澁谷伊與作をして軍將中山忠光の使と稱し津藩の隊將藤堂高猷に大義名分を說かしむ津藩の隊將等伊與作を迎へ酒を飮ましめ其の醉を窺ひ之れを縛す鐵石大に憤恚し兵を發して津藩の陣營を破る津藩の隊將大に怒り諸藩の兵を牒合し大擧して天の辻に迫る鐵石謂らく此の役や我が軍の大事なり事爰に及ぶ終に遁るべからずと大將中山忠光に說き去て南海鎭西の義藩と力を戮せ再擧を謀らしむ忠光去る乃ち火を陣營に放ち自から壯士三十餘人と兵を部署し奮鬪激戰長槍を携へて敵數十人を斃す津藩槍隊の督長某槍を揮ひ直ちに鐵石に迫り槍鬪數合進みて鐵石の左肋を刺す鐵石重創を蒙り復た戰ふ能はず終に之れに死す時に年四十七實に文久三年九月十五日なり明治二十四年十二月從四位を贈る

鐵翁【畫】日高氏、祖門と號す長崎春德寺の僧なり稼圃に學びて南宋畫法の秘訣を得たり最も蘭竹に長ず畫名一世に噪ぎ淸人の其地に寓するものも亦多く贄を執りて從學す蓋し佛理を以て畫法を悟れる所多し其の人となり禪意に安んじ膽力に富み奇行少からず曾て久留米藩士某といへるもの其門を敲き畫を學ばんことを乞ふ鐵翁敢て面せず某再三懇請の後大に怒りて將に之を及せんとす鐵翁神色自若として冷笑して曰く余素より畫工にあらずと雖も少しく繪事を解す而して今深く之を謝絕するものは他なし今や海內多故覇府政を失し志士所在に尊攘開鎖を論ず是を以て諸藩汲々として武を講

じ兵を錬るに之れ遑あらず故に文字を以て自ら任ずるものと雖も亦た劍を學び武を講ずるの日にあらずや然るに之を是れ爲さずして將に書門に入らんとするは士人の行に悖れるのみ余此の如き人を見るを欲せず故に謁を許さゞる也例令一歩を讓りて書を學ぶを可とすとも彼は其順序を違へり藩侯實に余の書を欽賞して彼をして余が門に入らしめんと欲せば何ぞ其香華所なる梅林寺を以て紹介せしめざるか梅林寺は余が宗派の門頭にして余殊に其住職と親善なるは藩侯固より之を熟知す而して今突然來りて藩侯の命を傳ふと雖も何ぞ其請を容るゝを得むや事の條理を察せず漫りに激怒して余を及せんと欲せば余敢て命を惜まず頸を延べて其爲す所に任せむ余が頭は得べし余が書蘭は得べからずと某之を聞きて愧ぢ且つ謝し去るといふ明治四年十二月七日歿す年八十一

鐵眼【書】名は道光、字は鐵眼、黃檗山の僧たり嘗て一切經を校刻して世に稱す又浪花鐵眼寺の開山たり

鐵面【書】名は寂錬、字は錬面黃檗山の僧たり後濃州大梅寺の開山

鐵文【書】名は智、字は錬文、黃檗山の僧たり

鐵牛【畫】相國寺の僧にして玉腕子の相弟子たり畫を善くし鬪に巧なり

鐵舟【書】名は德齋、鐵舟は其號夢想國師の弟子にして嵯峨龍光院の開基なり求法の爲め元に入りて其國王より圓通大師の號を受く歸朝して五山の一字萬壽禪寺に住す法務の餘暇畫を好み水墨の山水祖師の像を畫けり其の風牧溪顏輝に似たり貞和年中の人なり

鐵舟【書】山岡氏、名は高歩、字は猛虎、通稱錬太郎、鐵舟は其の號、飛驒郡代小野朝右衞門高福の五男なり年二十二にして出でゝ山岡氏を繼ぐ幼より劍道を好み久須美順三郎祐義に從ひて槍劍術を學び井上八郎淸虎の門に入りて甲州流の軍學を學べり後ち千葉周作に就き一流を發明して之を無刀流と稱し春風館を設立して多くの門生を敎育す名海內に普しまた讀書及び習字は飛驒の郡吏富田定禮に學び後ち岩佐市右衞門に就き大師流の書を學びしが一年餘にして入木道の傳統を受け一樂齋と號す維新の際東征大總督府參謀西鄕隆盛に謀り解難の偉功あり後ち皇后宮亮宮內少輔等に任ぜられ功を以て華族に列し子爵を授けられ從三位勳二等に敍す明治二十一年七月十九日天未だ明けず病床にありて「腹いたや苦しき中に明がらす」と口吟み其の死期を知り自から白衣を着け椅子の上に坐禪の姿をなし微笑して逝く年五十三

鐵兕【書】河野氏、名は羆字は夢吉、通稱は絢夫、鐵兕と號し又た秀野と號す播州網干村の人幼にして神童の稱あり初め讃岐の人吉田鶴仙の門に入り後ち梁川星巖を師とす最も詩學に精し少時曾つて江戸に遊び諸名家を訪ひ一時才名を轟かし大に猜忌せられ日光に屏居し後ち江戸に來りて林田藩に聘せらる後西國に游ぶこと數年にして歸り家塾を開く當時諸名家游歷すれば必ず足を玆に留む闔藩文事の隆盛に赴きしは鐵兕與りて大に力ありその博聞强記人智畏服す

鐵齋【書畫】富岡百錬、字は無倦、錬齋と號す京都の人、天保七年生る和漢の

學に通じ又た詩文書畫を以て鳴る **鐵冠道人** 祇園南海の別號 **鐵道**【詩】泉守一の門人なり、寛永年中 **鐵船**【書】土田氏、通稱は全明、安政年中 **鐵山**【書】山本氏、尾張の人、南宋派の畫を能くす嘉永年中 **鐵臣** 谷如意の名 **鐵研** 齊藤拙堂の別號 **鐵寒士** 藤本鐵石の別號

灌園 增山雪齋の別號

鬢髮山人 石川晃山の別號

綵蝶 歌川國丸の別號

巍々堂 佐竹永湖の別號

籀齋 細井九皐の別號

霹眠 林羅山の別號

韡村 木下犀潭の別號

廿二畫

歡子【書】藤原氏、歡子は關白教通の第三女後冷泉天皇の后なり姿容淸麗琵琶を善くし又書に工みなり永久二年入内して三年女御となり五年賴通の女新に宮に入る次で皇后となる歡子恚り宮を出で兄僧靜圓小野の山房にあり即ち往て此に住す世に小野皇太后と稱す康和四年八月崩ず年八十二

鑑貞【書】墨溪と號す南都括提寺の總持坊に住す能書の譽高し世人呼んで奈良法眼と稱す

鷗洲【書】卷氏、名は之紀、字は百里、掖々山人と號す通稱柳輔、菱湖の男、よく父の風格を得たり明治二年九月二十五日歿す年四十六 **鷗嶼** 守村抱儀の別號

聽雨【書】杉氏、通稱孫七郎、舊山口藩士、天保六年正月生、詩書を能くす華族に列し子爵を受けらる **聽秋**【書】伊藤氏、通稱助一、淡路の人、梁川星巖に詩を學ぶ草書を能くす **聽雨堂** 桑山玉湖の別號

巒山【書】江戸淺草誓願寺の住僧なり櫻井雪館の門に入りて書を學ぶ文化年中

讀畫齋 青木南華の別號

孿山 三浦梅園の別號

廿三畫

顯仲（書）源氏、右大臣顯房の子なり從三位左京太夫兼神祇伯に至る和歌を巧みにし兼ねて書を善くす保安四年薨ず年中八十一

顯齋（畫）平井氏、遠州の産、安政年中の人

顯定（畫）上杉氏、越後守房顯の養子にして從五位下相模守に任し關東管領となる世に山內上杉と稱するもの是れ也剃髮して可淳齋常泰と號す書を好みて山水花鳥を能くす永正七年六月戰死す年五十七

顯山 足利義持の號

顯季（畫）六條顯季は師隆の子、正二位修理大夫に任ず書を能くす保安四年九月歿す

顯常 釋大典の名

巖松（畫）鎌田子寛、秀一と號す祖仙に學びて禽獸山水人物に長ず安政六年七月二十八日歿す年六十二

巖岳齋 長谷川雪旦の別號

巖山 足利義植の別號

巖間 木俣守安の號

巖亭（畫）大阪の人、大岡嘯川に從つて書法を學ぶ安永年中

麟嶼（書）山田氏、原と菅原氏なるを以て自ら脩して菅とす名は正朔、一名は弘嗣、字は大佐、又た以て通稱とす麟嶼は其號、別に尙古堂と號す初め徂徠に學び後ち京師に出でゝ東涯の門に入る徂徠麟嶼を千里駒と稱し鳩巢は天下第一の才子と稱す書も亦た見るべし享保二十四年三月十九日病歿す年僅に二十四

廿四畫

靄崖（畫）高久氏、名は徵、字は子遠、靄崖は其の號又た疎林外史と號す通稱秋輔、幼にして畫法を鄉の雪耕山人に受け弱冠にして江戶に出で谷文晁の門に入りて從學すること四五年東奧及び信越諸州に遊びて踪跡定まらず毛の鹿沼に寓すること殊に久し故を以て人或は以て鹿沼の人となす而れども實は那須郡小松庄の產なりと云ふ遂に平安に游ぶ都人名を聞き稍々來りて畫を乞ふ靄崖一切謝絕して獨り古刹大寺に就いて其の蓄藏する古畫を借觀し孜々臨摸して日夜倦むを知らず歸へるに及びて則ち囊中已に竭く其の心を繪事に專らにすること此くの如し而して靄崖の力を得るも亦た此に在り靄崖の畫は山水に於て特に妙なり一揮紙に落つれば瀟洒磊落始め意を經ざるが如くにして謹巖の處は自から磨滅す可からず晚年に江戶藥研堀にト居し將さに六法を以て名を海內に成さんとせしが病に罹りて終に起たず是を以て世の靄崖を知る者少し但だ立原杏所、渡邊華山は靄崖の畫を稱して曰く氣韻風格古の名匠に愧ぢずと靄崖初め江戶に來る時貧特に甚し

く酒債を辨ずる能はず愛する所の池大雅の畫幅を出して之れを鬻がんとす其の妻之れを止めて曰く良人毎に此の幅を謂て我が命なりとす家貧といへども豈躬自ら命を售る者有らんや妾願はくは身を賣りて之れに代らんと因て供に泣く戸外忽ち人あり酒を齎らし入つて曰く余は之れ同癖相好する者なり小許の酒債は聊か之れを補はんと共に飲をなして醉を盡し且つ靄崖に言つて曰く余文晁の高名を慕ひ遠く江戸に來るといへども畫風我が希ふ所に非ず因て随ひ學ぶ事を欲せず然れども一世の巨匠なり兄都下に名を成さんと欲せば宜しく之れに随身すべし甚だ益を得んと靄崖恩を謝し初より屢々名を問ふ告げず只々九州地方の人とのみ云つて遂に去る後年に靄崖京に遊ぶの日田能村竹田に會す之れを視れば何んぞ計らん前時酒を齎らして語る所の人なり二人掌を拍つて倶に嬉ぶ是れより益々刎頸の交りをなすと云ふ天保十四年四月八日沒す年四十八

靄山【畫】谷口氏、通稱は貞二、京都の人、靄崖に師事して畫法を究む明治中歿す

靈彦【畫】希世、村菴と號す畫僧世斯文宜の法嗣とす詩文當世に名あり又山水及び戯畫を成す長享二年六月二十六日寂す年八十六

靈源【畫】畫風白隠に似たり天龍寺中鹿王院の住職

靈致【書畫】字は天境、南禪寺の住僧、清拙の法嗣にして甲斐の人なり書畫に名あり康暦三年入寂す

靈空【書】名は光謙、字は靈空、是湛と號す比叡山の住職權大僧正に任ず

靈海

尾形乾山の別號

靈明庵森祖仙の別號

讓【畫】山田氏、字は春耕、呆々道人と號す讃岐高松の醫師にして畫を能くせり文化の頃

廿五畫

籬島【畫】秋里氏、名は舜福、字は湘夕、京師の人畫を以て諸國を游歴し名所圖繪を著はせり

觀鷲【書】永田氏、名は忠原、字は俊平、觀鷲は其號又東皐、黎祈道人の號あり李北海を學び雲麾岳麓二帖は其の最も意を注ぐところ晩年に至り其名海内に鳴り門人千を以て數ふ又初め服蘇門に就いて儒學を受け大に精研する所あり蘇門の歿後江北海に從ひて學ぶ詩思清雅最も近體に長せり僧六如と方外の交を結ぶ六如嘗て稱して平安第一の人物といふ寛政四年八月二十五日歿す年五十五

觀慶【畫】薩摩法橋といふ貞和四年大和春日山下の四恩院に於て畫卷を作れりといふ

觀證【畫】西山三鈷寺二世の祖なり美作の前司藤原顯義の子にして畫を善くし好みて佛像を畫く又和歌に巧み也後ち法橋に叙せらる

觀盛【畫】東大寺美濃公と稱す畫僧なり源平年代の人なるべし畫く所の如來荒神の一幅御室仁和寺に傳はれりといふ

觀深【畫】芝法眼、又た三河法眼といふ奈良に住居して春日繪所となる世

に遺れるもの多くは佛書なり永享頃の人 **観翁** 服部南郭の書號 **観山**（書）森氏、大坂の人、書を岡本豊彦に學ぶ天保年中

廿六畫

鼇山（書）何適と號す玉蟾に學びて能くせり

廿七畫

驥齋（書）田村氏、野州沼田の人、狩野家の書風を能くす安政年中

廿八畫

雧山（書）加藤氏、奥州出羽の人、書法を細井廣澤に學ぶ享保年中

三十畫

鸞山（書）初め櫻井雪關に就いて書を學び後明人の遺法を則り別に一家を成す江戸淺草誓願寺の僧なり文化年中 **鸞洞** 島田元直の號 **鸞觸居** 小倉雪峰の別號 **鸞山** 曾我蕭白の別號

日本書畫人名辭書下卷終

松山堂出版書目

著者	書名	册數	内容	正價	郵税
川瀨鷗西	書畫名家全傳	二	上卷ニハ古人之傳ヲいろは譯ニテ記載ス下卷ニハ近世ノ名家之傳ヲ記ス鑑定之良書	金七拾錢	八錢
雲煙子	近世名家書畫談	八	書畫之奇說珍談等ヲ記セシ有益ナル書ナリ	金壹圓貳拾錢	八錢
竹田生	山中人饒舌	二	竹田山人篠崎小竹其他名家ガ書論ヲ絕妙ナル名文ヲ以テ記シ頭書ニハ朱書欄外註アリ	金三拾五錢	二錢
菊本嘉保	萬寳全書	十三	書畫之落款傳記陶器骨董道具古錢圖刀劍圖說後藤之彫物其他萬物ヲ記セシ書	金壹圓三拾錢	十二錢
兼葭堂	書畫便覽	六	日本ハ足利時代ヨリ近世迄支那ハ宋時代ヨリ清ニ至ル迄ノ傳及印譜ヲ明良ニ記載セシ書	金八拾錢	八錢
馮虔山	書法正傳	六	書法之要訣三昧永字八法八十四法名蹟原流其他書法ヲ論ゼシ書ナリ	金壹圓拾錢	八錢

日本書畫年表

永正

年	干支	天皇	事項
元	甲子	後柏原天皇	（足利義澄）
二	乙丑		
三	丙寅		雪舟等楊　八十七
四	丁卯		万里小路賢房　四十二
五	戊辰		（足利義植將軍再任）
六	己巳		
七	庚午		

年	干支	
八	辛未	
九	壬申	後藤祐乘 七十三
十	癸酉	釋日祝 八十七
十一	甲戌	今出川公興 六十九 尊應法親王 了庵桂悟 九十六
十二	乙亥	
十三	丙子	烏丸冬光 四十四
十四	丁丑	
十五	戊寅	中院通世 五十五 宣竹周麟 七十九
十六	己卯	釋日意

年號	年	干支	事項
	十七	庚辰	
大永	元	辛巳	〔足利義晴將軍宣下〕
	二	壬午	
	三	癸未	足利義植 五十八 下冷泉政爲 七十八 飛鳥井雅俊 六十二
	四	甲申	
	五	乙酉	
	六	丙戌	後奈良天皇 上冷泉爲廣 七十七 德大寺公胤 四十
	七	丁亥	牡丹花肖栢 八十五
享祿	元	戊子	

二 己丑	
三 庚寅	正親町三條實望卿 六十七 山科言綱 四十五 中院通胤 三十二
四 辛卯	
元 壬辰	柴屋宗長 八十五
二 癸巳	
三 甲午	
四 乙未	
五 丙申	
六 丁酉	三條西實隆 八十三

七	戊戌	
八	己亥	
九	庚子	
十	辛丑	
十一	壬寅	
十二	癸卯	下冷泉爲孝　六十九
十三	甲辰	近衛尙通　七十三
十四	乙巳	
十五	丙午	〔足利義輝將軍宣下〕

十六	丁未		
十七	戊申		
十八	己酉	荒木田守武	七十七
		上冷泉爲和	六十四
十九	庚戌	清原環翠	七十八
		尊鎮法親王	
二十	辛亥		
二十一	壬子	里村昌休	四十二
二十二	癸丑	山崎宗鑑	八十九
二十三	甲寅		
弘治 元	乙卯		

二 丙辰		
三 丁巳	正親町天皇	
元 戊午	武田紹鷗	五十二
二 己未	古法眼狩野元信	八十四
	石井了派	
三 庚申		
四 辛酉		
五 壬戌	後藤乘眞	五十八
	狩野祐雪宗信	四十九
六 癸亥	飛鳥井雅綱	七十五
	三條公條	七十七
	細川氏綱	六十
七 甲子	後藤宗乘	七十八

年	干支	事項
八	乙丑	中院通爲 四十九
九	丙寅	近衞植家 六十四
十	丁卯	
十一	戊辰	〔足利義榮將軍宣下次ぎて薨ず〕 〔足利義昭將軍宣下〕 廣橋國光 四十三
十二	己巳	
元龜 元	庚午	上冷泉爲益 五十五
二	辛未	
三	壬申	
天正 元	癸酉	〔織田信長〕 武田晴信 五十三 洗竹庵黒田正圓 九十二 万里小路惟房 六十一

年	干支	記事
二	甲戌	里村昌休 四十三
三	乙亥	
四	丙子	烏丸光康 六十七
五	丁丑	
六	戊寅	飛鳥井雅敦
七	己卯	二條晴良 五十四
八	庚申	
九	辛巳	
十	壬午	織田信長 四十九

十一	癸未			
十二	甲申			
十三	乙酉		五辻爲仲	五十六
			甘露寺經元	八十四
十四	丙戌	後陽成天皇	(豐臣秀吉)	
十五	丁亥		千道安	
			三條西公國	三十三
十六	戊子		德大寺公維	五十二
十七	己丑			
十八	庚寅		狩野永德	四十八
			北條氏政	五十三
十九	辛卯		(豐臣秀次)	
			千利休	七十

年號	年	干支	事項
文祿	元	壬辰	狩野直信　七十四
	二	癸巳	
	三	甲午	勸修寺尹豐　九十一 正親町三條公仲　三十八 飛鳥井雅春　七十五
	四	乙未	蒲生飛州氏鄉　四十 四辻公遠　五十六 曲直瀨道三　八十九
慶長	元	丙申	今出川季持　二十二 水谷正村　七十六
	二	丁酉	尊朝法親王 釋古溪　八十三
	三	戊戌	
	四	己亥	
	五	庚子	（豐臣秀賴）

六 辛丑	
七 壬寅	里村紹巴 七十九 近衛前久 七十七 前田玄以 六十四
八 癸卯	（徳川家康將軍宣下） 里村紹叱 八十二
九 甲辰	狩野光信 四十四
十 乙巳	（徳川秀忠將軍宣下）
十一 丙午	
十二 丁未	里村玄仍 三十七
十三 戊申	
十四 己酉	

年	干支	天皇	人物
十五	庚戌		蜷川親長 七十八 細川玄旨 五十九 吉田意安 五十三 中院通勝 五十三
十六	辛亥	後水尾天皇	釋春屋 烏丸光宣 六十三
十七	壬子		近衞龍山 七十七
十八	癸丑		土佐光吉 七十五
十九	甲寅		近衞信伊 五十 角倉了以 六十一
元和 元	乙卯		飛鳥井雅庸 四十七 海北友松 八十三 吉田重勝
二	丙辰		德大寺實久 三十四 小野通 五十八
三	丁巳		狩野祖酉 六十二 後藤榮乘 四十二 今出川晴季 七十九
四	戊午		狩野孝信 四十八

寛永

年	干支	人名	年齡
五	己未	藤原惺窩	五十九
		上冷泉爲滿	六十一
六	庚申	後藤光乘	九十二
七	辛酉	織田有樂軒	七十
八	壬戌	吉田宗達	三十九
九	癸亥	〔德川家光將軍宣下〕	
		狩野貞信	二十七
元	甲子		
二	乙丑	土佐光起	五十六
		住吉廣澄	七十五
三	丙寅	萬里小路充房	六十五
		大森漸齋	八十二
四	丁卯	藪內紹智	八十七
		上冷泉爲賴	三十六

五	戊辰		
六	己巳	明正天皇	釋天祐
七	庚午		甲斐德本 百十七 杉田望一 八十三 織田常眞 七十二
八	辛未		後藤德乘 八十二 後藤即乘 三十二
九	壬申		野口立圓 七十一 吉田素庵 六十三
十	癸酉		正親町三條實有 四十七 李一恕 六十三
十一	甲戌		
十二	乙亥		狩野山樂 七十七
十三	丙子		昌村昌琢 六十一

年	干支	天皇	人物
十四	丁丑		本阿彌光悦 八十一
十五	戊寅		吉田一水軒 七十七 烏丸光廣 六十 林東舟 五十四 土佐光則 五十六 和久是安 六十一
十六	己卯		瀧本坊昭乘 五十六 日野資勝 六十三
十七	庚辰		西園寺公益 五十九 三條[illegible]實 六十六
十八	辛巳		釋玉室 六十九 沼津乘昌 俳家紹意 六十一
十九	壬午		岩本將監
二十	癸未	後光明天皇	佐川田喜六 六十五 宗玩 七十 淀屋个庵 六十七 良恕法親王 七十二 釋天海 百三十四
正保元	甲申		裏辻季福 四十
二	乙酉		宮本武藏 六十四 釋澤庵 七十三 大橋重保 六十四 細川三齋 八十三 飛鳥井雅知 十六

年號	年	干支	天皇	事項
	三	丙戌		
	四	丁亥		釋安室 五十八 小堀政一 六十九 齋藤德元 八十九
慶安	元	戊子		那波活所 五十七 中江藤樹 四十一
	二	己丑		三宅寄齋 七十 谷時中 五十二 藤木敦通 六十八
	三	庚寅		狩野尙信 四十四 里村玄的 五十八 木下長嘯子 八十一
	四	辛卯		〔德川家綱將軍宣下〕 狩野山雪 六十三 飛鳥井雅宣 六十六
承應	元	壬辰		下冷泉爲景 四十一
	二	癸巳		尊純法親王 中院通村 六十七 松永貞德 八十三 近衞尙嗣 三十二
	三	甲午	後西院天皇	狩野休白 七十八 小倉三省 五十一 山本道句 八十二

年號	年	干支	人名	年齡
明曆	元	乙未		
	二	丙申		
	三	丁酉	岡本宣龍	八十三
			林羅山	七十五
			林見宜	七十九
萬治	元	戊戌	滋野井季吉	七十
			松井宗丹	八十一
			松永昌三	六十六
	二	己亥		
	三	庚子	大橋宗桂	
			狩野乘信	
寬文	元	辛丑	林養德	三十八
			堯然法親王	六十一
			釋清巖	七十四
	二	壬寅	狩野一溪	
			飛鳥井雅直	二十八
			古筆了佐	九十一

年	干支	天皇	人名	年齢
三	癸卯	靈元天皇	野中兼山	四十九
			後藤顯乘	七十八
			一世古滿休意	
			荒木田盛徵	六十八
四	甲辰		江村專齋	百
			釋翠巖	五十七
			里村玄俊	五十
			鵜飼石齋	五十一
五	乙巳		里村玄陳	七十五
			温野卜養	
六	丙午		林梅洞	二十四
			釋江雪	五十八
			林春信	二十四
七	丁未		持明院基定	六十一
八	戊申		深草元政	四十六
			上冷泉爲清	三十七
			後藤卽乘	三十二
九	己酉		雛屋立圃	九十
			石田未得	八十二
			烏丸資慶	四十八

十	庚戌	岩垣龍谿 六十九 北條氏長 六十二 住吉廣通 七十二
十一	辛亥	釋即非 五十六 林性一 三條實秀 七十四 陳元贇 八十五 安原一囊軒 六十四
十二	壬子	石川丈山 九十 大橋重政 五十五 戴曼公 七十七 狩野元俊 八十五
元	癸丑	釋隱元 八十二 狩野興以 片桐貞昌 釋乘圓 四十 木股守安 後藤程乘 七十 里村玄祥
二	甲寅	狩野探幽 七十三 直幸正心 六十一 加藤灘淵 五十四 莊田琳庵 三十六 三國筆海堂
三	乙卯	釋傳外 六十六 平澤了雪 六十四 山岡元隣
四	丙辰	林春東 二十三 釋實堂 六十四 長澤潛軒 五十六

年	干支	記事
五	丁巳	三條公富 五十八 海北友雪 八十 川井東村 七十七 向井靈蘭 六十九
六	戊午	米川操軒 五十二 狩野時信 三十七 宇井卜養 七十二 五十嵐道甫
七	己未	飛鳥井雅章 六十九 鳥山巽甫 里村昌通 六十五
八	庚申	〔徳川綱吉將軍宣下〕 林春齋 六十三 稻生恒軒 七十一 松江重頼 七十四
天和 元	辛酉	釋慧林 七十三 新井草春 七十六 廣澤長好 六十三
二	壬戌	朱舜水 八十三 山崎闇齋 六十五 西山宗因 七十八 李梅溪 六十六 本阿彌光甫 八十二 里村昌隱 五十 一世山本春正 七十三 狩野雪信女 四十一
三	癸亥	那波木庵 七十四 三宅道乙 六十一

年號	年	干支	事項	人名	年齡
貞享	元	甲子		德大寺公信	七十九
				釋一溪	六十七
				三世了祐	四十
				桑山一玄	七十四
	二	乙丑		狩野安信	七十三
				山鹿素行	六十四
				荒木素白	八十六
	三	丙寅		下河邊長流	六十三
				四世丁周	十七
	四	丁卯	東山天皇	日野資茂	三十八
				日野弘資	七十一
元祿	元	戊辰		釋獨吼	六十五
				長谷川信春	
				釋信海	五十四
				里村昌程	七十七
				人見鶴山	六十九
				西山健甫	三十一
	二	己巳		釋獨本	七十二
	三	庚午		式部卿龍慶	八十九
				山口延佳	七十六
				臼田畏齋	四十六

年	干支	人名	年齢
四	辛未	熊澤蕃山	七十三
		土佐光起	七十五
		狩野春雪	七十三
		寺田無禪	百十二
		黒川道祐	
五	壬申	岡西惟中	五十四
		瀧本坊憲乘	
六	癸酉	釋祥山	七十五
		井原西鶴	五十二
		松下西峰	六十七
		鵜飼金平	六十一
		龍野熙近	七十八
		良尚法親王	七十二
七	甲戌	尊證法親王	
		小堀政尹	七十
		狩野洞雲	七十
		釋獨照	七十八
		松尾芭蕉	五十一
		釋春澤	八十二
		吉川惟足	七十九
		山名義豐	七十二
八	乙亥	釋高泉	六十二
		谷一齋	七十一
		宇都宮由的	
		佐々木志頭摩	七十七
九	丙子	大串雪蘭	三十九
		小河立所	四十八
		貝原存齋	七十四
		人見鶴山	六十九
		本阿彌光傳	
		釋心越	五十七
		里村玄心	
十	丁丑	狩野永納	六十七
		北島雪山	
		北村湖春	五十三

年	人名	號	年齡
（元禄）十一 戊寅	木下	順庵	七十八
	石原	鼎庵	四十六
	藤村	庸軒	八十八
	久田	拾女	六十五
	山名	矩豐	七十九
（元禄）十二 己卯	高瀬	梅盛	八十九
	河村	瑞軒	八十二
（元禄）十三 庚辰	德川	光國	七十三
	榎並	貞因	八十一
	大內	松岳	五十一
（元禄）十四 辛巳	釋	寂本	七十一
	圓珠庵	契仲	六十二
	安東	省庵	八十
	西三條	實教	八十三
（元禄）十五 壬午	狩野	永敬	四十八
	安藤	朴翁	七十六
	北村	正立	五十一
	中村	惕齋	七十四
	安藤	侗庵	三十六
	下冷泉	爲元	六十二
（元禄）十六 癸未	北向	雲竹	七十二
	大石	良雄	四十五
	持明院	基時	七十
	正親町	實豐	八十五
	小野寺	秀和	六十一
	神崎	竹平	三十七
	富森	春帆	三十四
	大高	子葉	三十二
	松下	見林	六十七
	小野寺	丹女	
元 甲申	小堀	政貴	六十六
	內藤	丈草	四十五
	堀越	才牛	五十四
	鯉屋	杉風	八十六
	向井	去來	五十四
	千代倉	知足	六十五

正徳

年	干支	事項	人名	年齢
二	乙酉		伊藤仁齋	七十九
			北村季吟	八十二
			村上冬嶺	八十二
三	丙戌		釋獨湛	七十九
			大森漸軒	八十三
			栗山潛峰	三十六
			榊原篁洲	五十一
			戸田茂睡	七十八
			智月尼	七十四
			野村尚房	六十七
			高橋宗恒	六十七
四	丁亥		裏松意光	五十八
			服部嵐雪	五十四
			寶井其角	四十七
			松浦交華	六十四
			里村昌陸	六十九
			澤田訥齋	八十四
五	戊子		後藤廉乘	八十二
			林道榮	六十九
			江村樸齋	七十
			山田宗偏	八十五
			伊藤坦庵	八十六
			狩野峰信	四十七
六	己丑	中御門天皇	〔德川家宣將軍宣下〕	
			清水谷實業	六十二
			二山伯養	八十七
			白幽子	
			大淀三千風	
			宇都宮遯庵	七十七
			淺井了意	七十
七	庚寅		風早實種	七十九
			中院通茂	八十
			土佐光成	六十五
			土佐光祐	三十六
			河合曾良	六十二
			廣瀬惟然	
			岡島石梁	四十四
			平間長雅	七十五
元	辛卯		林九成	七十八
			寺井養拙	七十二
			釋法霖	三十八
			淺見絅齋	六十
			日野宮定基	四十三
			渡邊幸庵	百三十

享保

年	干支	人名	年齡
二	壬辰	〔徳川家繼將軍宣下〕	
		飛鳥井雅豊	四十九
		南部南山	五十五
		中村篁溪	六十八
三	癸巳	狩野常信	七十八
		中根白山	七十二
		貝原東軒	五十二
		大高芝山	六十五
四	甲午	貝原益軒	八十五
		狩野探雪	
		菱川師宣	七十七
		狩野探牛	
		持明院基輔	五十七
		出口延經	五十八
五	乙未	澁井春海	七十七
		森川許六	六十
		狩野梅雪	
		稻生若水	六十一
		鳥山芝軒	六十一
元	丙申	〔徳川吉宗將軍宣下〕	
		尾形光琳	五十六
		本居宣長	七十二
		山口素堂	七十五
		安藤爲章	五十八
		小澤蘆庵	七十五
		小西來山	六十三
二	丁酉	釋古磵	六十五
		南部國華	二十三
		下冷泉爲俊	三十六
		佐々木文山	七十七
		增穗殘口	六十三
		山口素堂	七十五
		岩田涼菟	五十九
		後藤松軒	八十六
		海北友賢	
三	戊戌	三宅觀瀾	四十四
		狩野安仙	
		佐保介我	六十七
		北村篤所	七十
		谷重遠	五十六
		並河天民	四十
		北村篤所	七十二

四	己亥	佐藤直方 七十 安藤東野 三十七 川勝宗久 池西言水 七十三	荷田貝女 七十三 天野桃隣 七十一
五	庚子	鵜飼稱齋 六十九 中野撝謙 五十四 菅沼曲翠 吟花堂晩山	本阿彌光道
六	辛丑	服部寛齋 五十五 狩野休碩 五井持軒 八十一 森儼塾 六十九	
七	壬寅	維方維文 七十八 高天漪 七十四 伊藤宗旨 六十五 上冷泉爲綱 五十一	江左尚白 七十三
八	癸卯	狩野洞春 新井宜郷 佐々木池庵 七十四 若林強齋 四十五	海北友山
九	甲辰	英一蝶 七十三 狩野主信 五十三 山田宗引 五十七	
十	乙巳	新井白石 六十九 味木立軒 七十六 三條實治 七十五 近松門左衞門 八十三	佐々木文山 七十七 秋色女 五十七

十一 丙午	土肥默翁	六十七
	後藤良山	七十五
	生玉琴風	八十八
	宮川松堅	九十六
	水間沾德	六十二
	中江泯山	七十二
	渡會園女	七十四
	里村昌億	六十七
十二 丁未	釋玄瑤	九十四
	中島浮山	七十二
十三 戊辰	荻生徂徠	六十三
	狩野周信	六十九
	板倉復軒	六十四
	海北友竹	七十五
	狩野探船	
	清水如水	七十二
	里村仍民	五十九
	岡島冠山	五十五
十四 己酉	蘆草拙	五十九
	鳥居清信	六十六
	服部蕉堂	
	跡部長顯	七十一
十五 庚戌	三宅石庵	六十六
	秦竹探	五十八
	大道寺友山	九十二
十六 辛亥	狩野榮川	三十六
	狩野憲信	四十
	向井滄洲	六十六
	獅子庵支考	六十七
十七 壬子	林鳳岡	八十
	三浦竹溪	六十八
	山口雪溪	八十九
	矢野拙齋	七十一
	杉山杉風	八十六
	土肥豐隆	九十四
	平野金華	四十五

元文

年	干支	天皇	上段	下段
十八	癸丑		青木露水 六十／渡邊季茂 五十九／正親町公通 八十一／橫谷宗珉 八十三	青木鷺水 七十六／天野信景 七十三
十九	甲寅		葉岡貞佐 六十五／鯛屋貞柳 八十一／水野岷山 八十九／室鳩巢 七十七	田蘭陵 三十六
二十	乙卯	櫻町天皇	佐々木文山 七十七／松島蘭谷 六十二／荒川天散 八十二／細井廣澤 七十八	壺井鶴翁 七十九／山田麟嶼 二十四／鷹見庭鳩 四十六
元	丙辰		伊藤東涯 六十七／三宅袋河 四十一／鷲尾隆長 六十五／玉木正英	釋南谷 七十四／佐久間洞巖 八十四／四時堂其諺 七十一／荷田春滿 六十八
二	丁巳		池永道雲／英一蜂 四十七／安積澹泊 九十一／有賀長伯 七十七	
三	丙午		藤木司道 五十五／岡島秀竹 八十三／上島鬼貫 七十八／武者小路實陰 七十八	小倉尚齋 六十一／一世湖十 六十三
四	己未		澤琴所 五十四／狩野松林／中院通躬 七十二／麥林舍乙田	

年號	年	干支	人名	年齡
	五	庚申	持明院基雄 香月牛山 平東海 志田野坡 三世山本政幸	五十四 八十五 五十四 七十八 八十七
寛保	元	辛酉	三宅尚齋 寺澤政辰 佐藤周軒 上冷泉爲久	八十 七十一 七十七 五十六
	二	壬戌	後藤壽乘 日野資時 星野巳八 木下巽軒	四十八 五十三 六十六 六十八
	三	癸亥	尾形乾山 林退省 狩野玉燕 富春叟	八十一 七十六 六十一 七十六
延享	元	甲子	三輪執齋 山本惟命 桑原空洞 石田梅巖 岡田正利	七十六 七十四 七十二 六十 七十八
	二	乙丑	〔德川家重將軍宣下〕 伊藤長英 關口黃山 二世湖十 宇明霞	 六十二 二十八 六十八
	三	丙寅	越雲夢 松下眞山 松岡玄達	六十三 八十一

年號	年	干支	天皇	歿者	歿者
	四	丁卯	桃園天皇	小川笠翁 八十四 菊岡沾凉 六十七 太宰春臺 六十八 菅野兼山 七十	
寛延	元	戊辰		級維良 三十八 馬場春水 八十六 堀內仙鶴 七十四 苗村介洞 七十二	烏村光榮 六十 橘守國 七十
	二	己巳		桂山彩巖 七十二 北村湖元 七十四 釋百拙 八十三 長雄耕雲 六十二	高瀬學山 八十一
	三	庚午		住吉廣保 八十五 倉岡蘇山 七十二 向井橋州 六十八 多田義俊 五十三	
寶曆	元	辛未		祇園南海 七十五 西川祐信 七十四 伊達吉村 七十二 狩野元仙 四十九	釋忍海 六十六 荷田在滿 四十 柳川直故 三十六 益田鶴樓
	二	壬申		山縣周南 六十六 飯田太華 五十八 宮川長春 七十一 佐野隱山 九十七	元淡淵 四十四 弓屋倭文女 二十 孔文雄 四十
	三	癸酉		彰城百川 五十六 永田政純 八十三 松崎白圭 七十二 永川幸緒 五十五	平林靜齋 五十八 釋似雲 八十六 風早實隆 六十三

四	甲戌	狩野洞琳	四十九
		羽川珍重	七十餘
		石島筑波	五十一
		川口靜齋	五十二
		櫻井吏登	九十三
		莊子謙	五十八
五	乙亥	伊藤龍洲	七十二
		望月玉蟾	六十三
		雨森芳洲	八十八
		渡邊始興	七十三
		香川修庵	七十三
		高田敬甫	八十二
六	丙子	堀南湖	七十三
		伊藤竹里	六十五
		黑川龜玉	五十八
		西村重長	六十餘
		狩野探常	
		大森廿古齋	八十八
		三浦竹溪	六十八
七	丁丑	梁田蛻巖	八十六
		高野蘭亭	五十四
		土肥霞州	六十五
		本多倚闌子	六十七
八	戊寅	僧了月	七十四
		中井甃菴	六十六
		柳澤淇園	五十三
		狩野梅軒	
		岡道溪	二十五
		龜田窮樂	
九	己卯	石川麟洲	五十三
		服部南郭	七十七
十	庚辰	〔德川家治將軍宣下〕	
		溝口千谷	六十五
		武者小路實岳	四十
		英一蟑	七十
		鳴嶋錦江	七十二
		稻葉迂齋	七十七
		杉浦止齋	

明和

年	干支	天皇	歿者	歿者	歿者
十一	辛巳		中村蘭林 六十五、松本淡々 八十八、井蘭臺 五十七、土屋鑑洲 七十六		
十二	壬午	後櫻町天皇	關口金鷄 七十九、五井蘭州 六十六、狩野友甫、山脇東洋 五十八	船田耕山 三十九、橋常樹 五十九	
十三	癸未		鳥居清倍 五十八、秋山玉山 六十六、菅沼東郭 七十四、大岡春朴 八十四	狩野英信 四十、田中良齋 八十二、高田良齋 八十一、賣茶翁 八十九	狩野祐清 四十七、篠田行休 七十九
元	甲申		土佐光淳 三十一、狩野永伯 七十八、泉必東、菅谷甘谷 六十九	關海南 五十九	
二	乙酉		關思恭 六十九、仲子岐陽 四十五、入江南溟 八十、木蓮萊 五十一	中根東里 七十二、和智東郊 七十五	
三	丙戌		永富獨嘯庵 三十五、馬場董水 七十八、狩野伯壽 八十九、高暘谷 四十八	久野鳳州 七十三、三井親和 八十一、篠田梅龍 五十一、堀南雲 五十八	
四	丁亥		渡邊湊水 四十八、赤松太庾 五十九、原雙桂 五十、飯田百川 七十四	服部仲英 五十五、山縣柳莊 四十二、岡白駒 七十六	

安永

年	干支	天皇	人物				人物		
五	戊子		英一舟 七十一	釋白隱 八十四	玉置筆花堂 七十五	村田春鄉 三十			
六	己丑		加茂眞淵 七十二	高頤齋 八十	狩野永良	村田春道	青木昆陽 七十二	木村兼山 七十六	服部天游 四十六
七	庚寅	後桃園天皇	狩野幸信 五十四	鈴木春信 五十三	藤井西洞 四十一	江村愚亭 二十七			
八	辛卯		淺井梅樓 五十三	佐脇嵩之 六十六	狩野梅壽	上田素鏡 七十四	田安宗武 五十七		
元	壬辰		熊代熊斐 八十	伊藤長衛 八十八	伊藤錦里 六十三	土佐光芳 七十三	田邊晉齋 八十一	滕水晶 三十五	
二	癸巳		吉益東洞 七十二	瀧鶴臺 六十五	鈴木正慶	渤海北門 七十一			
三	甲午		宋紫石 七十八	寒葉齋 五十六	雪溪 七十八	青楓 五十九	宮崎筠圃 五十八	建部凌岱 五十六	釋涌蓮

天明

年	干支	記事
四	乙未	千代尼 七十四 大畠默翁 七十三
五	丙申	池大雅堂 五十四 住吉廣守 七十三 鳥山菘岳 七十餘 大内熊耳 八十 伊藤華岡 六十八 二世太白堂桃隣 八十一 春日龜敬齋 七十一 王葛坡 五十三
六	丁酉	南溪 八十一 狩野探林 賀川玄悦 七十八 高山北溟 稻垣白巖 八十三 加藤美樹 橘梅軒 七十六
七	戊戌	伊藤蘭嵎 八十五 南宮大湫 五十一 英一川 谷藍水 五十九 大魯
八	己亥	光格天皇 富士谷層城 四十二 葛鳥石 八十 芥川貞介 八十一 平賀鳩溪 五十七 三世貞柳 八十一 河野恕齋 三十七 大谷永庵 八十三 小沼樂山 七十四
九	庚子	林東溟 七十三 大谷永庵 八十二 石王塞軒 八十 三世湖十 無爲庵樗良 五十二
元	辛丑	五十嵐俊明 八十二 湯淺常山 七十五 宇井默齋 七十七 木村了琢 海北友三 四十二

年	氏名	年齢
二 壬寅	片山兼山	五十三
	淺井圖南	
	加々美櫻塢	七十二
	細井九皐	七十二
	伊形大朴	二十七
	澤田一齋	八十二
三 癸卯	谷口蕪村	六十八
	小河牛臺	七十
	松山天姥	五十八
	原田東岳	五十五
	横井也有	八十二
	河保壽	七十
	小河臺山	四十
	奥田三角	八十一
	揖取魚彥	六十
四 甲辰	小栗常山	二十二
	伊勢貞文	七十
	高芙蓉	六十三
	井上金蛾	五十二
	萩原宗固	八十二
	田中道麿	五十五
	葛子琴	四十六
	五十嵐元誠	三十九
	荷田御風	五十七
	久米訂齋	八十六
	玉瀾女史	五十七
	杉本祐光	二十三
	堀正之	
五 乙巳	山本龍齋	五十七
	石川豐信	七十五
	鳥居清滿	五十一
	加藤枝直	九十四
	清田儋叟	六十七
	阪秋齋	
	芬川丹邱	六十七
六 丙午	〔德川家齊將軍宣下〕	
	趙陶齋	七十四
	羽倉蒼生	六十四
	月岡雪鼎	七十七
	赤松魯齋	二十三
	石田幽汀	
	屋代師道	七十七
	丹羽嘉言	四十五
	滕南豐	五十七
	鳥山石燕	七十六
七 丁未	新井邦賢	五十八
	雪中庵蓼太	八十
	狩野永常	五十八
	奥貫貫山	八十
	伊藤長秋	五十二
	岡崎盧門	五十四
	菅貞香女	五十六
	中村義齋	五十一
八 戊申	江村北海	七十六
	澁井太室	六十九
	二世英一峯	
	關口敬明	三十八
	勝山琢舟	八十三
	北澤遜齋	五十三
	曾我部容所	五十二
	渡邊信齋	

年	干支				
元	己酉	戀川春町 四十六	三浦梅園 六十七	那波魯堂 六十三	夜半亭九董 四十餘
		飯岡澹寧 七十三	四世湖十	香川景平 六十八	
二	庚戌	石井鶴山 四十二	狩野榮川 六十一	山中天水 三十三	劉安生
		山本守禮 四十四	櫻井雪館 七十四	清水靜齋 七十二	片山北海 六十九
		一世柄井川柳 七十三	早野仰齋 四十五	上柳四明 八十	佐竹噲々 五十三
		鈴木蘭園 五十			
三	辛亥	平澤旭山 七十四	春秋庵白雄 五十三	和田荊山 六十八	
四	壬子	安達文仲 六十七	新井白蛾 七十八	勝川春章 六十七	龍草廬 七十八
		淺野青洲 八十	林松林	橘保國 七十六	狩野閑川 四十六
		宮部義正 六十四	暮雨庵曉臺 六十一	千葉玄之 六十六	永田觀鵞 五十五
		上柳牧齋 五十六	久村曉臺		
五	癸丑	高山正之 四十一	青木宗舒 六十四	荒木吳江 六十五	
六	甲寅	三熊花顛 六十五	新井成美 六十三	狩野高信 二十二	天沼恒庵 五十二
		狩野永德 五十六	橘藏六 六十	一世夜雪庵金蘿	林諸鳥 五十
		金谷三石 六十三	河北桃浪 七十一	久川玄圃 六十六	山田靜齋
七	乙卯	圓山應擧 六十三	吉田元陳	香山適園 四十七	仙齋 六十三
		三浦瓶山 八十一	韓天壽 六十九	細井竹岡 八十一	大江文坡 六十八

年	干支	人名	年齢
八	丙辰	澤田東江	六十五
		溝口曉谷	六十九
		頭光	七十
		伊藤士善	
		石作駒石	五十七
		黒澤雉岡	八十四
		花安松江女	三十五
九	丁巳	駒井琦	四十八
		片山北海	
		小澤公平	四十四
		蔀關月	五十一
		村井中漸	九十
		狩野洞春	七十二
		板谷廣當	六十九
		藤井貞幹	六十六
		鶴澤探索	
十	戊午	狩野泰信	三十二
		長澤蘆雪	四十五
		吉田篁墩	六十八
		釋澄月	八十五
		八見平良	六十八
		合田汝上	三十七
		羽倉信美	七十八
十一	己未	蘆雪	四十五
		山崎蘭洲	六十七
		福原五岳	七十
		幹々女	
		桑山玉洲	五十四
		岡田新川	六十三
		佐成重威	八十三
十二	庚申	伊藤若冲	八十五
		關其寧	六十八
		稲垣棟隆	七十一
		服部栗山	六十五
		種村箕山	七十九
		釋義苗	五十九
		入江昌喜	七十八
		佐久間東川	
		三世太白堂桃隣	六十七
元	辛酉	小澤蘆庵	七十九
		柴田汝嶺	四十六
		赤松滄洲	八十一
		小柴守直	
		揚谷	四十二
		釋大典	八十三
		本居宣長	七十二
		那波魯堂	六十三
		横井千秋	六十四
		細井平洲	七十四
		三宅嘯山	
二	壬戌	木村兼葭堂	六十八
		井戸遯齋	五十九
		董九如	五十九
		唐衣橘洲	
		小島醉竹庵	六十
		磯谷滄洲	六十六
		久田蘭洲	七十二

年	干支			
三	癸亥	鈴木小蓮 二十五　鏑木梅溪 五十四　岳東海 六十九　蕉園 三十七	細合半齋 七十七　熊坂台洲 六十五　和田泰純 六十三　菱岡山 五十六	大塚嘉樹 七十三　佐田維則
元	甲子	十時梅崖 七十三　伊藤東所 七十七　狩野玉榮 七十五　佐脇嵩雪 六十九	平井靜齋　中井竹山 七十五　高嵩谷 七十五　陳穀山 六十三	僧慈雲 八十七　荒木田久老 五十九　後藤桂乘 六十五　太田翫隅 六十　鈴木尋思齋 六十一
二	乙丑	宋紫山 七十三　增山雪齋 六十六　勘亭 六十　菊地衡岳 五十九	本莊宗敬 七十七　喜多川歌麿 五十三　島篆癖 六十二　大伴大江丸 八十八	釋慈延
三	丙寅	伴蒿蹊 七十四　人見平蕙　戸崎淡園 七十八　土佐光貞 六十九	長町竹石 五十　菅尙卜 七十八　古屋昔陽 七十三　平林東岳 六十四	釋誠拙 七十五　橋本經亮 四十七　四世太白堂桃隣 三十四　渤海麗華女 五十七
四	丁卯	皆川淇園 七十四　片岡闌石 六十一　柴野栗山 七十四　廣瀨旭莊	長川華山 三十　奥田尙齋 七十九	
五	戊辰	柳川直光 七十六　內田陶丘 四十八　森永春齋　狩野惟信 五十六	竹澤養溪　清田龍川 六十二　維明 七十八　村瀨石齋 三十八	
六	己巳	伊藤藍田 七十六　泉本豐洲 五十二　永田西河 四十九　桂川甫周	釋月仙 八十九　上田秋成 七十六　橋本稻彦 二十九　谷麓谷	釋無幻 五十三

年	干支	氏名	年齡
七	庚午	葛鼇庵	五十六
七	庚午	黒江武禪	七十三
七	庚午	池田遷齋	
七	庚午	歌川國政	三十八
七	庚午	小野蘭山	八十二
七	庚午	清原雄風	六十四
七	庚午	市川鶴鳴	五十七
七	庚午	岩瀬華沼	七十餘
七	庚午	伴資規	
七	庚午	原在正	
七	庚午	小川晋齋	
八	辛未	住吉廣行	五十七
八	辛未	荒木呉椿	五十五
八	辛未	釧雲泉	五十三
八	辛未	鼎春岳	四十六
八	辛未	村田春海	六十六
八	辛未	松村月溪	七十
八	辛未	萩大鹿	
八	辛未	鷹見星岡	六十一
八	辛未	中野龍田	五十六
八	辛未	久川荊山	四十九
九	壬申	山本北山	六十一
九	壬申	岡田玉山	七十六
九	壬申	狩野永俊	四十八
九	壬申	紀梅亭	七十
九	壬申	三島自寛	
九	壬申	増島濃水	七十
九	壬申	井上士朗	七十六
九	壬申	樋口芬亭	七十五
十	癸酉	渡邊南岳	四十七
十	癸酉	篠崎三島	七十七
十	癸酉	鳥居清長	
十	癸酉	建部巣兆	
十	癸酉	松會平陵	七十三
十	癸酉	廣瀬臺山	六十三
十	癸酉	五松鶴林	七十一
十	癸酉	蒲生君平	四十七
十	癸酉	尾藤二州	六十九
十	癸酉	大橋重政	五十四
十	癸酉	川村秋輔	
十	癸酉	山本封山	七十二
十一	甲戌	濱田杏堂	四十九
十一	甲戌	歌川豐春	八十
十一	甲戌	松田龜玉	
十一	甲戌	木下應受	三十九
十一	甲戌	月航	三十一
十一	甲戌	豐島豐州	七十八
十一	甲戌	溝口千谷	六十五
十一	甲戌	田山敬儀	四十九
十一	甲戌	龜井南溟	七十二
十一	甲戌	王瀞	六十四
十二	乙亥	雨森牛南	六十
十二	乙亥	木下觀水	六十三
十三	丙子	賴春水	七十一
十三	丙子	山東庵京傳	五十六
十三	丙子	鈴木芙蓉	六十八
十三	丙子	安田躬紘	
十三	丙子	狩野融川	三十八
十三	丙子	夏目成美	六十八
十三	丙子	鶴澤探春	

年	干支	記事
十四	丁丑	仁孝天皇 古賀精里 六十八　伊藤東里 六十一　鈴木蠣潭 三十六　岡田寒泉 七十一 中井履軒 八十六　眞勢中州 六十四　荻野鳩谷 百〇一　上河淇水 七十 海保青陵 六十三
元	戊寅	山口素絢 六十一　谷文一 三十二　十時梅崖 七十二　伊東東里 六十一 米山人 七十五　司馬江漢 七十二　村瀨栲亭 七十五　前波默軒 七十四 有賀長收 六十九　加茂保考 六十九　淺山蘆國 四十餘　二世柄井川柳 朝倉荊山 六十四　里村玄川 八十二　杉林奐山
二	己卯	柴田義董 四十　柏木如亭 五十七　鳥海松亭 四十八　勝川春英 五十八 土佐光時 五十六　清水曲阿 七十三　皆川篁齋 五十八　北尾重政 八十一 鈴木鳴門 八十四　島田元直
三	庚辰	原念齋 四十七　浦上玉堂 七十六　原南陽 六十八　市川寛齋 七十二 僧江西 七十四　小河萍流 六十五　勝川春亭 五十一　五世太白堂挑隣 四十二 皆川灌園 五十八
四	辛巳	森狙仙 七十五　渡邊象山 五十六　狩野洞白 五十　石原正明 六十餘 香川黄中 七十七　中井敬義 六十四　内山眞龍 八十二　木下幸文 四十三 里村玄碩　林天眞 六十
五	壬午	松井羅洲 七十二　渡邊玄對 七十四　稻毛屋山 六十八　永田田善 七十二 衣川長秋 五十八　旭應 八十三
六	癸未	田中訥言 六十一　葛西因是 六十一　秦星池　速見恒章 太田南畝 七十五　森周峰 八十六　富士谷御杖 五十六　山本清溪 七十 淵野眞齋 六十四　曾我部簡齋 五十三　竹中淡齋 五十七　鳥羽台麓 八十五 久田蘭園

天保

七	甲申	鍬形蕙齋紹眞 七十五	川合春川	北尾政美	清水濱臣 四十九
		服部中庸 六十九	江森月居 六十八	勝山琢眼 七十八	
八	乙酉	太田錦城 六十一	賴　春風 七十九	一世歌川豊國 五十七	翠雲軒浮木 五十四
		了々齋宗佐 五十一			
九	丙戌	龜田鵬齋 七十三	大槻盤水 七十一	狩野素川彰信 六十四	釋本如 四十九
		藤田幽谷 五十三	阿部椋軒 五十三	若槻幾齋 八十三	上田咸之 七十一
		上田止々齋 七十二	谷口胤祿 五十七	立野觀海	
十	丁亥	菅茶山 八十	僧雲室 七十五	勝川春好	荷田惟德 六十三
		尾崎雅嘉 七十三	俳諧寺一茶 六十五	河北義龍 六十五	畑鶴巢 八十
		鎌田環齋 七十			
十一	戊子	酒井抱一 六十八	住吉廣尙 四十八	野呂介石 八十二	狩野伊川
		本居春庭 六十六	狩野信章 二十一	川越衡山 七十一	
十二	己丑	松平定信 七十三	圓山應瑞 六十四	中村益齋	清水常忠 三十九
		歌川豊廣 五十六			
元	庚寅	森川竹窓 六十八	中江藍江 六十五	關思亮 三十五	渡邊重名 七十二
		石川雅望 七十八	高嵩月 七十餘	狩野永俊 四十八	

年	干支	人名・年齢
二	辛卯	水尾龍淵 四十四、大江成美 八十六、佐々木景欽 五十八、狩野友川 二十二、上田蘭畹 八十六
三	壬辰	賴山陽 五十三、狩野探牧 七十三、柳川雷斗 四十六、月樵 六十三、谷秋香 六十一、河本公輔 五十八、中山嚴水 六十九、松本研齋 六十五、岡崎鵠汀 六十七
四	癸巳	市川恭齋 三十八、高橋草坪 三十二、青木木米 六十七、松丘 六十九、本居大平 七十八、勤齋 七十、六世太白堂桃隣 六十二、岡熊岳 七十二、大石眞虎 四十
五	甲午	西村楠亭 八十、賴杏坪 七十九、中村佛庵 八十四、小松翠溪 五十四、山本守禮、松本龍澤 五十一、桂直行 六十四、大江廣海
六	乙未	歌川國重 五十九、關克明 六十八、狩谷掖齋 六十、長瀬眞幸 七十一、田能村竹田 五十九、大岡嘯川 六十七、大谷榮庵 六十一、十川六有 六十一、奥劣齋 五十六、兒玉旗山 三十五
七	丙申	歌川國安 三十餘、岡本胡保 六十三、吉村蘭陵 六十八、中山信名 五十、村田春門 七十二、龜井昭陽 六十四、原在善 四十六、岡田南涯
八	丁酉	（德川家慶將軍宣下）大窪詩佛 七十一、大鹽後素 四十二、横山華山 五十四、佐野渡 七十六、山崎薰烈 五十二、長野豊山 五十五、僧明堂 六十九、原在中 八十八、中村松園

年	干支	氏	号	年齢
九	戊戌	佐伯	岸駒	九十
		白井	惟德	七十七
		狩野	永叔	五十
		山口	行厚	六十六
		松本	寒綠	五十一
		金田	茂陵	
十	己亥	春木	南湖	八十一
		僧	月峰	八十
		桓本	雪臣	六十三
		東	東洋	八十五
		摩島	松南	四十九
		百々	俊德	六十六
		甲賀	文麗	
		柴田	鳩翁	五十七
		藤井	雪堂	六十二
		小沼	西陣	六十四
十一	庚子	圓山	應震	五十
		立原	杏所	五十六
		島田	元且	六十三
		藤井	高尙	七十七
		富田	泰州	五十
		穗積	以貫	七十八
		岡本	氏足	五十一
		杉本	瀬庵	六十七
十二	辛丑	渡邊	東河	五十二
		森	徹山	六十四
		渡邊	華山	四十九
		狩野	洞益	
		谷	文晁	七十八
		屋代	輪池	八十四
		酒井	鶯浦	三十四
		村上	松堂	六十六
		並河	基廣	五十二
		大梅居	大梅	七十
		中川	自休	八十二
十三	壬寅	加茂	季鷹	九十一
		柳亭	種彥	六十
		紀	廣成	
		石井	了珪	六十
		成田	蒼虬	八十二
		山脇	廣成	
		雨森	栗齋	
十四	癸卯	高久	靄厓	四十八
		平田	篤胤	六十八
		村田	了阿	七十二
		英	一桂	八十五
		卷	菱湖	六十七
		青山	拙齋	八十六
		横山	竹谷	五十四
		長谷川	雪且	六十六
		雪中庵	對山	五十七
		香川	景樹	七十六
		高	嵩鄉	八十餘
		野呂	松廬	五十三
元	甲辰	松村	景文	六十八
		松崎	慊堂	七十四
		鈴木	南蘋	七十
		館	柳灣	八十三
		原	在明	六十七
		菅井	梅關	六十一
		桃葉庵	蓁々	六十八
		四世人見	川柳	六十七
		北小路	竹窓	八十二
		三雲	仙嘯	七十六
		岡本	茂彥	三十七

嘉永

年	干支	記事
二	乙巳	岡本豐彥 六十八　田中日華　伊藤弘濟 四十七　猪飼敬所 八十七　林文波　自然堂鳳朗 八十四　澤田名垂 七十一　安部井帽山 六十八　鹽田隨齋 四十九　杉山忠亮 四十五　城戸千楯 六十八
三	丙午	孝明天皇　林檉宇 五十四　岡田半江 六十五　浦上春琴 六十八　狩野晴川養信 五十一　岸本弓弦 五十八　伴信友 七十四　鈴木遺音 六十四　村田俊 五十七
四	丁未	長澤蘆洲 八十一　野々山綵山 六十八　小山田與清 六十五　小簑庵碓嶺　穗井田忠友 五十六　古賀侗庵 六十　海北友德 八十五　木下應夏 三十六
元	戊申	宇津木昆臺 七十　池田英泉 五十七　齋藤鑾江 六十四　山田清安 五十六　曲亭馬琴 八十二　畑銀鷄 四十九　池守秋水 七十一　清水赤城 八十三　三谷坦齋 八十三　岸慶 三十八
二	己酉	長山孔寅 八十五　朝川善庵 六十九　中根半仙 五十二　岩垣松苗 七十六　今大路悠山 六十　岡田閑林 七十　橘守部 六十九　菊地五山 八十一　葛飾北齋 九十　寺島俊叟 七十四　浦上春圃 三十　保川春貞 五十二　土佐光祿
三	庚戌	大倉笠山 六十六　谷文二 三十九　福田美楯 六十二　坂井虎山 五十三　岡本花亭 八十三　高野長英 四十七　清田松堂
四	辛亥	篠崎小竹 七十一　櫻間青涯　大橋長廣 六十四　大西椿年 六十

年	人名	年齢
五 壬子	岸良	五十五
	土佐光孚	七十一
	遠坂文雍	七十
	石川梧堂	六十餘
	松田莊廬	七十
	帆足萬里	七十五
	櫻井梅室	八十四
	菊田伊州	六十二
	望月玉川	
	今枝梅夢	五十五
	河村琦鳳	七十五
六 癸丑	〔徳川家定將軍宣下〕	
	中林竹洞	八十四
	狩野探淵	四十九
	館霞舫	
	川北溫山	六十一
	福田太華	五十九
	坂本香村	五十四
	龜田綾瀨	七十六
	一具庵一具	七十三
	古筆了伴	六十四
	中川文雪	五十
	荒井鳴門	七十九
元 甲寅	椿椿山	五十四
	小泉檀山	八十九
	千種有功	五十八
	松田直兄	七十二
	新宮涼庭	六十八
	齋藤彥麿	八十七
	木間保之	六十六
	青根九江	五十
二 乙卯	藤田東湖	五十
	沖一峨	五十八
	江川坦庵	五十五
	千葉葛野	五十六
	中島棕隱	七十七
	廣瀨淡窓	七十四
	色川三中	五十四
	本居內遠	六十四
	橫山桂子	五十六
	廬野屋麻績一	五十三
三 丙辰	賴聿庵	五十六
	足代弘訓	七十三
	江間東邱	
	佐々木靖州	五十四
	石垣抱眞	六十七
	喜多武清	八十一
	松橋江城	四十四
	北脇淡水	五十四
四 丁巳	松野梅山	七十五
	金井烏州	六十二
	梅辻春樵	八十二
	天野鵲橋	六十六
	山名廣政	七十一
	加納諸平	五十二
五 戊午	〔徳川家茂將軍宣下〕	
	梁川星巖	七十
	野田笛浦	六十一
	岩淵東山	八十一
	奥野小山	五十九
	桑原正望	五十二
	篠崎竹陰	
	鈴木其一	六十三
	市河米庵	八十
	歌川廣重	六十二
	富處西馬	五十一
	大竹蔣塘	五十八
	鹿持雅澄	六十八
	荒木田久守	七十一
	昌谷精溪	六十七
	座田重就	

年號	年	干支	人名	年齡
	六	己未	浮田一蕙	六十五
			賴鴨涯	三十五
			吉田松陰	三十
			野田笛浦	六十一
			佐藤一齋	八十八
			梅田雲濱	四十四
			歌川國直	六十二
			鎌田巖松	六十二
			岸連山	五十六
			黑澤翁滿	六十五
			石川依平	六十九
			鶴峰戊申	七十二
			夏目甕麿	八十七
			菊池五山	八十
			千手旭山	七十一
			山本亡羊	八十二
萬延	元	庚申	三浦梧門	五十二
			德川景山	六十一
			安積艮齋	七十一
			益田遇所	六十二
			村田多喜女	四十二
			山內香雪	六十二
			三浦道齋	八十二
			二東生稊	五十九
			五十嵐篤好	七十一
			水戶烈公	六十一
			莊門霞亭	六十五
			飯田默叟	六十三
			三浦桂居	四十三
文久	元	辛酉	歌川國芳	六十三
			渡邊周溪	八十四
			曾我泰庵	七十九
			江馬細香	七十五
	二	壬戌	土佐光清	五十八
			小田百谷	七十八
			松本龜岳	四十九
			吉田南陽	七十八
			藤森弘庵	六十四
			守村抱儀	五十八
			三瓶信庵	
			大橋訥庵	四十七
			岡本秋暉	七十八
			小林歌林	八十五
			熊谷直好	八十一
			古筆了博	二十七
			小島成齋	六十六
			勝山琢文	七十
	三	癸亥	貫名菘翁	八十六
			萩原廣道	五十一
			山崎美成	七十七
			岡田爲泰	四十二
			藤本鐵石	四十七
			廣瀨旭莊	五十七
			鈴木重胤	七十二
			逸見一信	四十八
			岩瀨蟾洲	六十一
			市原多代女	九十三
			賴立齋	六十一
			會澤正志齋	八十二
			牧百峯	六十三
			住吉弘貫	七十一
			鼎金城	五十三
			家里松嶹	三十七
元治	元	甲子	佐久間象山	五十四
			前田夏蔭	七十二
			平野國臣	三十七
			福田半香	六十一
			中島廣足	七十三
			三世歌川豐國	七十九
			後藤松陰	
			藤澤東畡	七十二
			大塚晚香	四十八
			金子豐水	五十
			横山華溪	四十九
			横山清暉	七十三
慶應	元	乙丑	武田耕雲齋	六十二
			鈴木透軒	二十二
			武市半平太	三十七
			藤田小四郎	二十五
			齋藤拙堂	六十九
			義亮	六十六
			香川景恒	四十三
			谷口月窓	九十二
			竹內京壽	五十四
			香川景嗣	七十四
			岸岱	八十四
			岸誠	四十

年	干支	氏名	年齢
二	丙寅	（徳川慶喜將軍宣下）	
		木下逸雲	五十二
		春木南華	四十八
		松本交山	八十三
		藤井竹外	六十
		池田孤村	六十六
		狩野探原	三十八
		梅川東南	七十
		黒川春村	六十八
		内藤廣前	七十六
三	丁卯	今上天皇	
		（將軍政權奉還）	
		西山芳園	六十四
		戸川蓮仙	八十二
		中澤雪城	五十九
		草場佩川	八十一
		釋物外	
		松本董堂	
		鹽谷宕陰	五十九
		安藤野雁	五十八
		木下犀潭	六十三
		狩野永岳	七十八
		中林竹溪	五十二
元	戊辰	鳥居清満	八十二
		小西南岳	
		寺門靜軒	七十三
		森田節齋	五十八
		村上荷汀	四十四
		高橋杏村	六十四
		池田孤村	六十
		野矢常方	六十七
		橘曙覽	五十七
		釋蘓山	七十
		野口北川	五十二
		雲井龍雄	二十七
		勝山如琢	五十四
		海北友樵	五十二
二	己巳	日根對山	五十七
		石川晃山	四十九
		卷鶴洲	四十六
		谷合南涯	四十八
		横井小楠	六十一
		梅川東擧	四十二
		上田一串	六十三
		玉嶺	六十三
三	庚午	鏑木雲潭	五十二
		鈴木鵞湖	五十五
		青山佩絃	六十四
		淺井蘆洲	
		石井潭香	六十五
		曾我耐軒	五十五
		安田內記	五十
		河北春谷	六十
		久野雪湖	
		栗原柳庵	
		松村玉文	五十二
四	辛未	玉手棠洲	七十七
		鹽田松園	六十七
		大國隆正	八十
		井上文雄	七十二
		森一鳳	七十三
		原左照	五十九
		狩野董川	六十一
		釋鐵翁	八十一
		鍋島閑叟	五十八
		鈴鹿連胤	七十七
		長澤蘆鳳	六十八
		天章	五十七
五	壬申	高橋石齋	五十六
		新居水竹	六十六
		小原鐵心	五十六
		間宮永好	六十八
		山內容堂	四十六

年	干支	人名	年齢
六	癸酉	柳生柳塘	六十七
		大西椿平	
		菊守園見外	
		八田知紀	七十五
		今泉芝軒	三十九
		荒木千秋	
		竹村大鳳	六十一
		岩垣月洲	六十六
七	甲戌	小倉青於	五十三
		美馬櫻水	六十三
		佐竹永海	七十二
		曾根梧窓	四十五
		廣瀬林外	三十九
		鈴木成齋	七十二
		歌川國輝	四十五
		鹽谷簀山	六十三
		曾根梧莊	
八	乙亥	岡白駒	七十四
		關蓑洲	七十四
		太田垣蓮月	八十五
		目賀田介庵	六十八
		武富圮南	五十八
		川村應立	五十九
		土佐光章	
		平塚瓢齋	八十
九	丙子	莊田膽齋	六十二
		安井息軒	七十八
		冲冠岳	
		坂田鷗客	五十一
		村瀬秋水	八十二
		關藤藤陰	七十
		谷文中	
		八木奇峰	七十一
		木村鐵蕉	三十九
		前川五嶺	七十二
十	丁丑	樋口逸齋	六十三
		西鄉南洲	五十三
		萩原秋巖	七十五
		木戸松菊	四十四
		青木南溟	八十四
		關雪江	五十一
		石蘭	五十五
		伊能顯則	七十三
		伊達千廣	七十五
		加藤千浪	七十一
		山田方谷	七十三
		時田光稻	四十二
		立田藍川	五十二
		村瀬雙石	五十六
		中島華陽	六十五
十一	戊寅	菊池容齋	九十一
		大槻盤溪	七十八
		齋藤月岑	七十五
		池旭	五十五
		岡本况齋	八十二
		春木南溟	八十四
		大久保甲東	四十七
		芳野金陵	七十七
		東條琴臺	八十四
		池田草庵	六十八
		林鶴梁	七十三
		三宅英齋	六十九
		佐瀬得所	五十七
		月廼本爲山	七十五
		春日潛庵	六十八
		前田半田	六十二
十二	己卯	梁川紅蘭	七十六
		土佐光文	六十八
		本田華堂	
		木下蘆洲	七十三
		小林玉潤	
		村上佛山	七十六
		狩野勝川院	五十七
		横山由清	
		那珂梧樓	五十二
		長谷川玉峰	五十八

年	干支	姓名	號	年齢
三十	庚辰	淺野	蔣潭	六十五
		目賀田	文村	六十八
		平田	鐵胤	八十二
		高見	照陽	
		土居	磬牙	六十四
		二世歌川	國貞	五十八
		平尾	魯仙	七十三
十四	辛巳	坂本	葵園	五十五
		菊地	溪琴	八十三
		江木	鰐水	七十二
		坂谷	朗盧	六十
		榊原	芳野	五十
		川上	冬崖	
		釋	天華	七十四
		渡	忠秋	七十一
		山岡	墨仙	四十七
十五	壬午	長谷川	雪堤	六十四
		鷲津	毅堂	五十八
		直道	枕石	
		清瀬	白山	八十一
		吉川	君溪	八十五
		中內	樸堂	六十
		吉村	斐山	六十一
		佐田	介石	
		杉原	竹圃	五十
		村山	松根	六十一
十六	癸未	安田	老山	四十八
		篠田	雲鳳	七十四
		岸	禮	六十八
		野間	一道	百〇二
		住吉	廣賢	四十九
		物集	高世	六十七
十七	甲申	帆足	杏雨	七十五
		中西	耕石	七十二
		橫山	文六	四十七
		成島	柳北	四十八
		廣瀨	青村	七十六
		安藤	龍淵	七十九
		古賀	茶溪	六十九
		加藤	櫻老	七十四
		齋藤	畸庵	七十餘
		大炊御門家信		六十七
十八	乙酉	岩瀨	半夢	六十九
		山中	靜逸	六十三
		大島	堯田	
		長	梅外	七十六
		藤田	呉江	五十九
		宮原	節庵	八十
		佐藤	玄覽	六十八
		三井	高福	七十八
十九	丙戌	池田	雲樵	六十二
		井上	竹逸	七十三
		卷	菱潭	四十一
		藤堂	凌雲	七十八
		近藤	眞琴	五十六
		歌川	豐宣	二十九
		庄司	謙齋	九十餘
		川邊	源好	

年	干支	氏	號	年齡
二十	丁亥	松岡	環翠	五十八
		渡邊	小華	五十四
		栗山	石寶	六十五
		草場	船山	六十九
		池田	綾岡	七十一
		伊藤	靜齋	
		矢野	玄道	六十五
		石川	晃山	四十九
		權田	直助	七十九
		内海	椿水	七十六
		羽倉	可亭	八十九
		岡本	春暉	五十八
二十一	戊子	柳田	正齋	九十二
		竹本	石亭	
		山岡	鐵舟	五十三
		早瀨	寬仙	六十
		安田	米齋	四十二
		小永井	小舟	六十一
		狩野	芳崖	六十一
		堀	秀成	七十一
		加藤	眞管	五十餘
		大亦	浩堂	四十一
		山本	竹雲	六十九
		米良	石操	七十三
二十二	己丑	賴	支峰	六十七
		福島	柳圃	七十
		淡島	椿岳	六十七
		福田	行誠	八十三
		河鍋	曉齋	五十九
		山内	林齋	七十三
		吉澤	雪菴	八十
		神山	鳳陽	六十六
		藤堂	高潔	五十九
		森	春濤	七十一
		工藤	他山	七十二
		後藤	暘谷	六十
		菱田	五升庵	
二十三	庚寅	菊地	三溪	七十四
		小林	永濯	四十八
		松本	芳延	五十三
		平福	穗庵	四十七
		木村	雅經	六十四
		中山	年次	五十一
		松平	春嶽	六十三
		山本	桃谷	五十八
		鈴木	瑞彥	五十四
二十四	辛卯	柴田	是眞	八十五
		鈴木	百年	六十八
		佐多	椿齋	七十五
		狩野	永悳	七十八
		元田	永孚	七十四
		神波	即山	
		大沼	枕山	七十四
		中村	敬宇	六十
		松平	確堂	七十八
		三條	梨堂	五十五
		佐々木	弘綱	六十四
		落合	直澄	五十二
		小山	春山	六十五
		狩野	照信	五十二
		廣澤	安任	六十二
		佐藤	牧山	九十一
二十五	壬辰	守住	貫魚	八十五
		月岡	芳年	五十四
		成瀨	大域	七十六
		小林	永濯	四十八
		鳥居	清滿	六十一
		狩野	晏川	八十四
		中野	其明	五十九
		田口	柳所	五十四
		山田	空齋	四十九
二十六	癸巳	平野	五岳	八十三
		狩野	探美	五十四

年	干支	姓	名	年齢
二十七	甲午	森	寛齋	八十一
		服部	波山	
		高橋	由一	六十七
		久米	幹文	六十七
		三世歌川	廣重	五十三
		長尾	無墨	
		四世	夜雪庵金羅	六十五
		中井	櫻洲	五十七
		柳原	前光	四十四
二十八	乙未	幸野	楳嶺	五十二
		長	三洲	六十三
		吳井	園蓬宇	八十七
		小中村	清矩	七十四
		井上	梧陰	五十二
		濱村	薇山	七十
二十九	丙申	林	雙橋	六十九
		川田	甕江	六十七
		中島	享齋	
		宮崎	王緒	
		三國	幽眠	八十七
		中沼	葵園	六十七
三十	丁酉	狩野	壽信	八十四
		完	瑛	六十四
		奧	蘭田	六十二
		栗本	匏庵	七十六
		中村	確堂	六十六
		高林	二峰	
		岸	竹堂	六十二
		陸奥	福堂	五十五
		梅辻	秋漁	七十四
三十一	戊戌	菅原	白龍	六十六
		田崎	草雲	八十四
		野口	幽谷	七十四
		岡本	黃石	八十八
		鈴木	重嶺	八十五
		馬杉	雲外	六十一
		向山	黃村	七十二
		鈴木	松塘	七十六
		島田	重禮	六十
		鈴木	重嶺	八十五
		萩原	西疇	七十
三十二	己亥	市村	水香	五十八
		勝	海舟	七十七
		大倉	雨村	
		池田	琴峰	
		丸山	作樂	六十
		谷口	靄山	八十四
三十三	庚子	杉浦	海潭	七十五
		秋月	韋軒	七十五
		税所	敦子	七十三

年	干支	人名	年齡	人名	年齡
三十四	辛丑	瀧和亭	七十二	中江兆民	
		木村芥舟	七十二	奥野遜齋	七十三
		江馬天江	七十七	岸田稻處	八十七
		宇田栗園	七十五		
三十五	壬寅	西村泊翁	七十五	山名貫義	六十七
		森川曾文	五十六	正岡子規	三十六
		谷口藍田	八十二	山田文厚	五十七
		川崎千虎	六十八	馬場不知也	
三十六	癸卯	田口米作	四十		
		村山拙軒	六十二		
		落合直文	四十七		
		野村芳國	四十九		
三十七	甲辰	秋月古香	七十三	老鼠堂永機	八十二
		落合芳幾	七十三	遠山盧山	八十二
		岡本韋庵	六十六		
		重春塘	七十二		
三十八	乙巳	谷如意	八十四	巖谷一六	七十一
		副島蒼海	七十八	多田親愛	六十六
		鳥尾得庵	五十九	山口鼎軒	五十一
		川北梅山	八十四	山田新川	七十九
三十九	丙午	久保田米僊	五十五	長岡雲海	六十五
		川村雨谷	六十九	野口寧齋	三十九
		黑川眞頼	八十三		
		根本通明	八十五		
四十	丁未	田能村直入	九十四		
		福羽美靜	七十七		
		淺井忠	五十二		
		金井金洞	七十五		

年	人名	號	年齡
四十一 戊申	水野	年方	四十三
	橋本	雅邦	七十五
	服部	撫松	六十八
	榎本	梁川	七十三
四十二 己酉	伊藤	春畝	六十九
	依田	學海	七十七
	南摩	羽峰	八十七
	中井	敬所	七十九
	釋	雲照	八十三
四十三 庚戌	小杉	榲邨	七十七
	中村	秋香	七十
	馬杉	青琴	三十六
	西田	春畊	六十六
	田能村	小篁	三十二
	一條	成美	三十四
	小野	湖山	九十七
	春秋庵	幹雄	八十二
四十四 辛亥			
四十五 壬子			
四十六 癸丑			
四十七 甲寅			

四十八	乙卯	
四十九	丙辰	
五十	丁巳	
五十一	戊午	
五十二	己未	
五十三	庚申	
五十四	辛酉	

五十五	壬戌
五十六	癸亥
五十七	甲子
五十八	乙丑
五十九	丙寅
六十	丁卯
六十一	戊辰

明治四十三年十一月十五日印刷
明治四十三年十一月二十日發行

日本書畫人名辭書

正價金壹圓參拾錢

編纂者　杉原子幸
東京市京橋區南傳馬町一丁目十八番地

發行者　藤井利八
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷者　金子久太郎
東京市京橋區弓町二十四番地

印刷所　三協印刷株式會社

大販賣所

東京　神田區表神保町　東京堂
大坂　東區北渡邊町　杉本梁江堂
西京　京都寺町通綾小路南　川勝鴻寶堂
仝　東洞院佛光寺　東枝律吉兵衞
名古屋　玉屋町　星野書店

發行元

松山堂本店
東京市京橋區南傳馬町一丁目十八番地
電話本局三百七拾四番
振替口座東京二〇〇三〇番

松山堂支店
東京市神田區錦町一丁目十番地
電話本局二千百三十七番
振替口座東京二〇四一二番

松山堂出版書目

著者	書名	表装冊数	正價郵税
東正堂	王陽明傳習錄講義	洋装合本一冊	金二圓七十錢 金十六錢
同	全並製	假洋装三冊	金二圓四十錢 金十二錢
同	全上製	洋装三冊	金二圓七十錢 金十六錢
佐藤一齋	王陽明傳習錄欄外書	和装三冊	金八十錢 金八錢
同	言志四錄	洋装一冊	金五十錢 金六錢
大鹽平八郎	洗心洞剳記	和装一冊	金四十五錢 金六錢
陽明學研究會編	精神修養陽明學活眼	洋装一冊	金四十五錢 金六錢
三輪執齋	古本大學講義	和装一冊	金三十五錢 金六錢
東敬治	標註正菜根譚	和装二冊	金廿五錢 金四錢
杉原夷山	標註續菜根譚	和装二冊	金廿五錢 金四錢
鵜巣庵	標註新菜根譚	和装二冊	金廿五錢 金四錢
木山鴻吉	評註老子道德經	和装二冊	金五十錢 金四錢
林希逸	林註老子道德經	和装二冊	金七十錢 金六錢
横田惟孝	戰國策正解	和装二冊	金一圓九十錢 金十二錢
物徂徠	辨道辨名	和装二冊	金七十錢 金八錢
張居正訂	校訂七書	和装二冊	金七十錢 金八錢
深井鑑一郎	標註學庸	和装二冊	金十二錢 金四錢
同	標註論語	和装一冊	金廿錢 金四錢
同	標註孟子	和装一冊	金廿三錢 金四錢
植田孟縉	日光山志	和装五冊	金二圓三十錢 金十二錢

著者	書名	表装冊数	正價郵税
竹添進一郎	棧雲峽雨日記	洋装一冊	金四十錢 金六錢
陸放翁	入蜀記吳船錄	寸珍四冊	金四十錢 金二錢
大槻東陽	入蜀記註釋	和装二冊	金三十五錢 金四錢
松公齋	校訂孫子	和装一冊	金廿二錢 金二錢
張文成	遊仙窟鈔	和装二冊	金六十錢 金六錢
田中正彝	情史抄	和装三冊	金七十錢 金六錢
山崎長卿	唐土名妓傳	和装二冊	金三十五錢 金四錢
網干生	古今刀劍銘鑒	和装三冊	金六十錢 金四錢
宮川一翠	要言故事	寸珍四冊	金六十錢 金四錢
新井君美	白石古史通	和装四冊	金八十錢 金八錢
元木網	俳諧饒舌錄	和装二冊	金六十錢 金六錢
賀茂眞淵	假名習字新撰百首帖	和装一冊	金三十五錢 金四錢
山本德潤	煎茶通	和装一冊	金廿八錢 金二錢
杉原夷山	補正赤穗義士四十七士傳	洋装一冊	金四十七錢 金六錢
頼山陽	日本樂府	和装二冊	金二十五錢 金四錢
宋陳起	官版宋高僧詩選	和装二冊	金九十五錢 金四錢
藤井理伯	俗語訓譯小說字彙	和装二冊	金一圓廿錢 金八錢
近藤格齋	池の坊百瓶	和装二冊	金六十錢 金六錢
近藤格齋	池の坊百花集	和装二冊	金六十錢 金六錢
近藤格齋	池の坊百圖	和装二冊	金六十錢 金六錢

松山堂出版書目

新編 詩作活法	庄門熙	和裝三冊	金七十錢	金八錢
新編 詩學活法	同	和裝三冊	金一圓二十錢	金十二錢
生花 古流百瓶	松藤齋	和裝二冊	金五十五錢	金六錢
易學發蒙	井上鷄州	洋裝一冊	金三十錢	金四錢
易學階梯	中洲眞勢	洋裝一冊	金廿五錢	金四錢
周易本筮指南		洋裝一冊	金廿五錢	金四錢
新撰年表	清宮秀堅	和裝一冊	金三十五錢	金二錢
骨董集	醒齋	和裝四冊	金九十錢	金八錢
近世奇跡考	山東庵	和裝二冊	金五十錢	金四錢
用捨箱	柳亭種彥	和裝三冊	金八十錢	金八錢
近世名家手簡	子安信成	和裝二冊	金八十五錢	金八錢
後集 古文眞寳	大竹政正	和裝二冊	金五十五錢	金六錢
陶器鑑定便覽	綱干生	和裝三冊	金六十錢	金四錢
陶器考	田内米三郎	和裝二冊	金六十錢	金六錢
紫式部日記傍註	坪井義知	和裝二冊	金五十五錢	金六錢
俳諧七部集大鏡	月院社何丸	和裝六冊	金一圓五十錢	金八錢
艷道通鑑	内藤加我	洋裝一冊	金四十錢	金四錢
王文成公眞跡帖	王陽明	折本一帖	金一圓三十錢	金八錢
官版 字學七種	秀秘園	和裝二冊	金二圓五十錢	金八錢
官版 太平清話	明陳繼儒	和裝二冊	金九十五錢	金六錢
官版 黃山領要錄	清汪洪度	和裝一冊	金八十五錢	金四錢
官版 老子經攷異	清畢沅	和裝二冊	金八十五錢	金六錢
官版 洞天清錄集	宋趙希鵠	和裝一冊	金八十五錢	金四錢
官版 韓柳文	韓退之柳子厚	和裝十二冊	金十圓	金四十錢
官版 平山堂圖志	清趙子璧	和裝四冊	金六圓	金十六錢
同 薄葉美本	同	和裝帙入二冊	金八圓	金十六錢
官版 事物異名錄	清厲荃	和裝二冊	金十圓	金廿錢
官版 皮日休文藪	唐皮日休	和裝三冊	金二圓五十錢	金十二錢
官版 毘陵集	唐獨孤及	和裝五冊	金四圓	金十二錢
官版 韋蘇州集	唐韋應物	和裝四冊	金二圓五十錢	金十二錢
官版 李長吉歌詩	唐李賀	和裝三冊	金二圓五十錢	金十二錢
官版 王荊公詩箋註	宋李壁	和裝八冊	金七圓五十錢	金十六錢
同 薄葉美本	同	和裝帙入三冊	金十圓	金十六錢
官版 衆妙集	宋趙師秀	和裝一冊	金七十五錢	金四錢
官版 唐百家詩選	宋王安石	和裝七冊	金五圓	金十六錢
官版 藏海詩話	宋吳可	和裝一冊	金五十錢	金二錢
官版 誠齋詩話	宋楊萬里	和裝一冊	金五十錢	金二錢
揚子法言	司馬光	和裝四冊	金一圓廿錢	金十二錢
張註列子	張湛處	和裝四冊	金一圓三十錢	金十二錢
助語審象	三宅橘園	和裝三冊	金四十五錢	金六錢
助字詳解	皆川淇園	和裝三冊	金七十錢	金八錢
老子隨筆	新井白蛾	和裝三冊	金七十錢	金八錢
雅譜大成抄	高井伴寬	和裝二冊	金一圓廿錢	金十二錢
青樓千字文	京傳	和裝一冊	金三十五錢	金四錢

松山堂出版書目

著者	書名	表裝冊數
翠川士	遊女用文	和裝一冊
關根江山	かな類纂	和裝一冊
岩瀨百樹	風俗女裝考	和裝四冊
馮夢龍	智囊	和裝三冊
台麓生	捃印補正	和裝六冊
吉尾泰雅	生花早指南	和裝二冊
桂月園泰雅	生花手引草	和裝二冊
同	生花秘傳集	和裝一冊
水谷有雅	生花獨習大全	和裝二冊
水谷有雅	生花圖式全書	和裝二冊
壽朶園	生花手瓶圖式	和裝二冊
水谷有雅	生花二種全書	和裝四冊
吉尾泰雅	生花三種全書	和裝五冊
玉山	繪本太閤記	薄素快入二十冊
金水道入	新刀銘盡大全	和裝一冊
南海太郎	新刀銘集錄	和裝五冊
荒木一滴	新刀辨惑錄	和裝三冊
藤原魚妙	新刀辨疑	和裝九冊
仰木伊織	古刀銘盡大全	和裝九冊
九峰	本朝鍛冶考	和裝十二冊

正價郵稅（印刷順）：金四十五錢 金六錢 金三十八錢 金六錢 金一圓 金十二錢 金八十錢 金八錢 金八十錢 金八錢 金四十五錢 金六錢 金四十五錢 金六錢 金四十五錢 金四錢 金五十五錢 金六錢 金五十五錢 金六錢 金五十五錢 金六錢 金五十五錢 金六錢 金一圓十錢 金十六錢 金一圓三十錢 金十六錢 金十六錢 金四十二錢 金四十錢 金二錢 金一圓八十錢 金八圓 金一圓 金八錢 金二圓五十錢 金十二錢 金二圓五十錢 金十二錢 金三圓五十錢 金十二錢

著者	書名	表裝冊數	定價	郵稅
藤井利伯	四書集註	寸珍快入四冊	金一圓五十錢	金十二錢
森孫一郎	音訓五經	寸珍快入四冊	金一圓六十錢	金十二錢
市川米庵	墨場必携	和裝六冊	金九十錢	金十二錢
高田忠周	行草字彙	和裝二冊	金七十錢	金八錢
太田聿郎	草書淵海	和裝三冊	金六十錢	金八錢
顧南原	隷辨	和裝二冊	金八十錢	金十二錢
新井白蛾	古易斷時言	和裝四冊	金九十錢	金十二錢
平澤白翁	人相千百年眼	和裝五冊	金七十錢	金八錢
松陵陸	醉古堂劍掃	和裝二冊	金七十錢	金六錢
牛井	藤樹全書	洋裝六冊	金一圓七十錢	金十二錢
吉村晋	儒門語要	和裝三冊	金七十錢	金八錢
賴山陽	山陽手簡帖	快入五冊	金一圓七十錢	金十二錢
乾隆	周易述義	和裝八冊	金一圓七十錢	金十二錢
念齋原	先哲叢談	和裝十冊	金二圓五十錢	金十六錢
三浦竹泉	陶說	和裝六冊	金二圓	金八錢
藤江永孝	鎭陶錄（一名續陶說）	和裝七冊	金二圓五十錢	金八錢
金森得水	本朝陶器考證	和裝六冊	金二圓五十錢	金十二錢
湖月老隱	茶式湖月抄	和裝十冊	金一圓八十錢	金十二錢
竟陵陸	茶經	和裝二冊	金八十錢	金六錢
大曲禪師	茶經詳說	和裝二冊	金六十錢	金四十錢

